

福岡城下町遺跡 1

—福岡城下町遺跡第1次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1322集



2017

福岡市教育委員会



第1次調査地点



元禄年中福岡絵図(福岡市博物館所蔵)

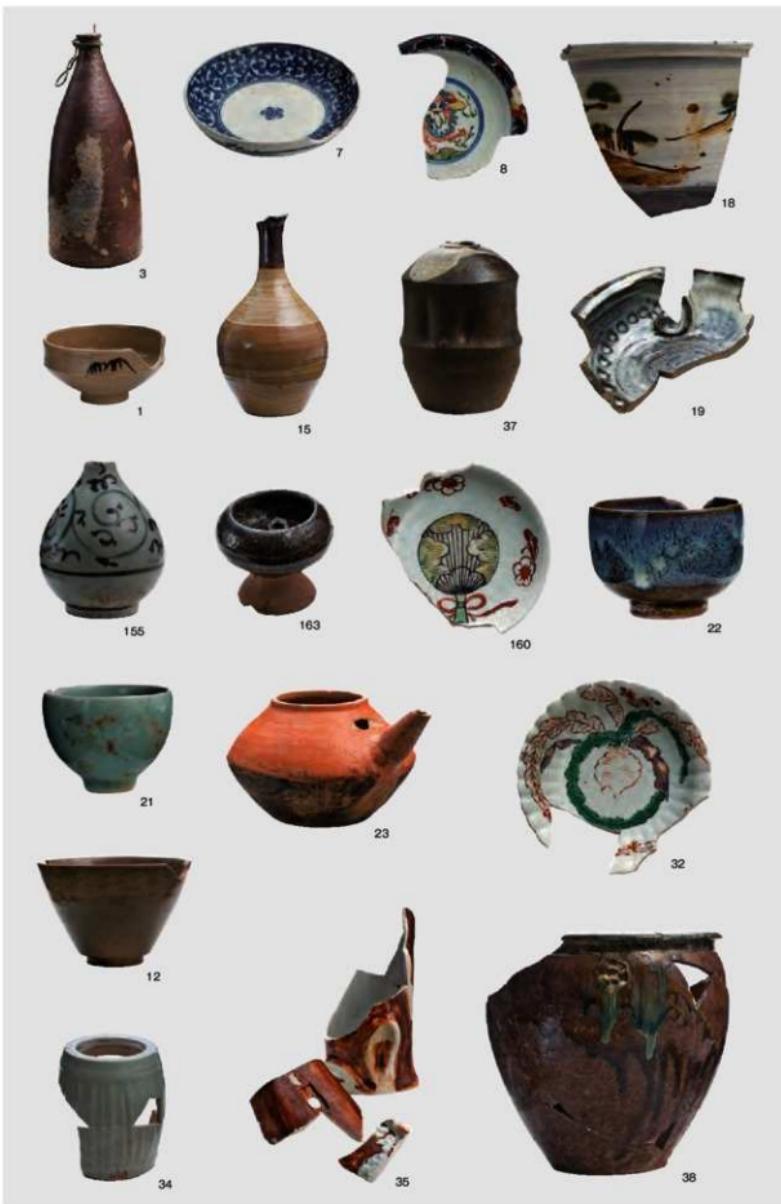
卷頭図版2



文化9年(1812)「福岡城下町・博多近隣古図」写(仮題「三奈木黒田家文書」九州大学付属図書館付設記録資料館(九州文化史資料館内所蔵)



各遺構出土志野・織部・京焼、中国產陶磁器



各遺構出土遺物 I



各遺構出土遺物 II



各遺構出土遺物Ⅲ



269



376



300



299



354



303



316



320



321



389



357



370



393



349



458



459



344



各遺構出土遺物 V

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを進めてきた福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄してきました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務あります。

本市においては、各種開発事業によって、やむを得ず失われる埋蔵文化財については発掘調査を実施し、記録保存によって後世に伝えるよう努めています。

慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いの恩賞として徳川家康より筑前国一国を与えられた黒田長政は、筑前国の太守にふさわしい城として、古代の迎賓館である鴻臚館があった現在の場所に城地を定め、福岡城を築きました。それと共に、北側海岸部の整備を行い、城下町を作りました。

本書は、その城下町の一角中央区赤坂に計画された分譲マンション建設事業に先立って、平成26・27年度に実施した福岡城下町遺跡第1次調査の成果を報告するものです。調査地の旧町名は大名町で、福岡藩の上級家臣の屋敷地があり、江戸時代の後半には、福岡城内にあった郡役所が調査地に造られていました。今回の調査で、この郡役所の建物の一部と、上級家臣の屋敷跡を確認しました。上級家臣の屋敷地からは江戸時代初めころの美濃地方で焼かれた茶陶として有名な織部焼が出土するなど多大な成果がありました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、施主の九州旅客鉄道株式会社様、施工業者の皆様をはじめとし、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会

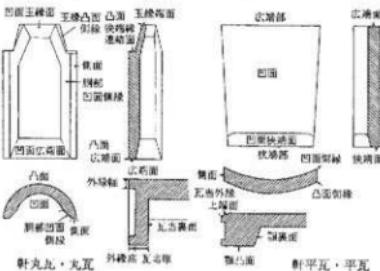
教育長 星子 明夫

凡　例

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成26(2014)年12月15日から同27年4月30日まで、福岡市中央区赤坂1丁目地内で民間の共同住宅建設にかかる受託事業として実施した発掘調査の報告書である。
- (2) 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は山崎龍雄、中尾祐太、佐々木蘭真（現独立行政法人九州国立博物館）、中園将祥（埋蔵文化財課理藏文化財調査員）が担当した。
- (3) 遺構実測は山崎、中尾、佐々木、中園、藤野雅基が行い、遺物実測は主に山崎が行い、三島和花子（福岡大学）・技能員山本麻里子に一部協力を受けた。拓本作業は萩尾朱美が行った。出土遺物の整理・収蔵作業については古賀美江、執行恭子、萩尾朱美が行った。
- (4) 遺構撮影は山崎が行い、遺構の空中写真撮影は有限会社空中写真企画が行った。
- (5) 遺物撮影は一部を山崎が、一部を写測エンジニアリング株式会社牛嶋茂氏に委託して行った。
- (6) 本書に使用した図面の添書は山崎が行い、一部を萩尾朱美の協力を得た。
- (7) 本書に使用した方位は世界測地系である。
- (8) 調査で出土した近世陶磁器の鑑定は佐賀県立九州陶磁文化館名譽顧問大橋康二氏が行った。古代から中世の輸入陶磁器については、2000年発行の太宰府市教育委員会編の「太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-」によっている。
- (9) 調査で出土した金属器、錢貨の保存処理については福岡市埋蔵文化財センター上角智希氏にお願いした。
- (10) 「福岡藩郡役所跡」についての論考は福岡市博物館宮野弘樹氏にお願いした。
- (11) 出土瓦の部位名称は下図の通りで、市本芳三「12.瓦」「概説 中世の土器・陶磁器」（中世土器研究会編 1995）による。
- (12) 本書掲載の正保福岡懇図、元禄年中福岡絵図は福岡市博物館から、文化9年(1812)年「福岡城下町・博多近隣古図」写は九州大学付属図書館付設記録資料館から画像データの提供を受けた。
- (13) 本書第1図「福岡城下町主要施設と寺社」図は本市博物館学芸課の宮野弘樹氏作成のものを使用した。
- (14) 土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
- (15) 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (16) 本書の執筆・編集は山崎が行った。

福岡城下町遺跡第1次調査情報

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
FUM-I	1435	福岡市中央区赤坂 1丁目174番1他	2563.1m ²	1261m ²	共同住宅 建設	2014.12.15～ 2015.04.30	山崎龍雄、中尾祐太 中園将祥、佐々木蘭真



瓦の部位名称

本文目次

Iはじめ	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
II遺跡の立地と歴史的環境	2
1 遺跡の立地と歴史的環境	2
2 福岡城下町について	2
III調査の記録	5
1 調査の概要	5
2 第1面の調査	6
3 第2面の調査	28
4 第3面の調査	53
5 各種遺物	54
6 各遺構出土陶磁器・土器観察表	74
IV考察	82
1 調査のまとめ	82
2 いわゆる「福岡藩郡役所跡」の土地利用の変遷について	85

挿図目次

第1図 福岡城下町主要施設と寺社（宮野弘樹氏作成）	iv
第2図 福岡城下町周辺遺跡（1/50,000）	3
第3図 福岡城と調査区の関係図（1/10,000）	3
第4図 江戸時代後期（文化9年）の調査地（「文化9年図」の一部使用）	4
第5図 調査区配置図（1/400）	5
第6図 第1面遺構全体図（1/200）	7
第7図 第2面遺構全体図（1/200）	8
第8図 調査区南壁・北壁土層（1/80）	9
第9図 SB338礎石建物（1/200・1/40）	10
第10図 SD125と土層（1/80・1/60）	11
第11図 SK043・065・067・083・109・219・251（1/60）	12
第12図 SK064・074・102・104・110・119・121・159（1/50）	13
第13図 SD125、SK043・067出土遺物（1/3・1/4）	15
第14図 SK162・220（下層1074）・262・273・278・296（1/50）	16
第15図 SK043・064・065・067出土遺物（1/3・1/4）	17
第16図 SK067出土遺物（1/3・1/4）	19
第17図 SK067・074・083・102・110・119出土遺物（1/3・1/4）	20
第18図 SK110・121・159・162・219・220・251・262出土遺物（1/3）	21
第19図 SK273出土遺物1（1/3）	22
第20図 SK273出土遺物2、SK278・288・296・317出土遺物（1/3・1/4）	24

第21図	各土坑出土遺物 (1/3・1/4)	25
第22図	SK245・316、各ピット出土遺物 (1/3・1/4)	26
第23図	擾乱土坑出土遺物 (1/3・1/4)	27
第24図	SE1071・1273 (1/60)	29
第25図	SE1071・1273出土遺物 (1/3・1/5)	30
第26図	SK1001・1014上層・1017～1019 (1/60)	31
第27図	SK1020・1023 (1/60)	32
第28図	SK1008・1014・1017～1019・1020・1023・1048完掘 (1/80)	33
第29図	SK1003・1005・1016・1049・1052・1056・1066・1067・1152・1194 (1/50)	34
第30図	SK1001・1003・1005・1008出土遺物 (1/3・1/4)	35
第31図	SK1008・1014・1018・1019出土遺物 (1/3)	36
第32図	SK1019・1020・1023出土遺物 (1/3・1/4)	37
第33図	SK1016・1023・1048・1052・1056出土遺物 (1/3)	39
第34図	SK1065・1067・1074・1121出土遺物 (1/3)	40
第35図	SP1168・1169、SK1170・1171・1195・1196 (1/50)	41
第36図	SK115・288・317・1172・1181～1183 (1240)・1236・1239 (1/30・1/40)	42
第37図	SX1123 (1/60)	43
第38図	SX1118・1193・1227 (1/40・1/50)	44
第39図	SX1123、SP1168・SK1170・1171出土遺物 (1/3・1/4)	45
第40図	SK1172・1195・1196出土遺物 (1/3・1/4)	46
第41図	土坑・ピット出土遺物 I (1/3)	47
第42図	土坑・ピット・1227土器器皿集中遺構出土遺物 (1/3・1/4)	48
第43図	土坑・ピット出土遺物 II (1/3)	49
第44図	遺構面・整地面・擾乱出土遺物 (1/3)	50
第45図	遺構掘下げ・清掃時出土遺物 (1/3)	51
第46図	第3面SD1275と出土遺物 (1/100・1/3)	52
第47図	各遺構出土軒平瓦 (1/4)	55
第48図	各遺構出土軒平・軒丸瓦 (1/4)	56
第49図	軒丸瓦・丸瓦 (1/4・1/5)	57
第50図	瓦刻印拓影と鴻臚館の瓦 (1/4・1/5)	58
第51図	鬼瓦など道具瓦 (1/4・1/5)	59
第52図	各遺構出土焼塙壺 (1/3)	60
第53図	各遺構出土土製品 I (1/2)	61
第54図	各遺構出土土製品 II (1/2)	62
第55図	各遺構出土土製品 III (1/2・1/3)	63
第56図	各遺構出土土製品 IV (1/3)	64
第57図	各遺構出土石製品 I (1/2・1/3)	65
第58図	各遺構出土石製品 II (1/3・1/4)	66
第59図	各遺構出土鉄製品 (1/3)	68
第60図	各遺構出土銅製品 (1/2)	69
第61図	各遺構出土錢貨 (X線写真)	72
第62図	第1面郡役所建物礎石配置図 (1/600)	83
第63図	正保福岡懇意図 (福岡市博物館蔵)	84

図版目次

卷頭図版 1	元禄年中福岡絵図（福岡市博物館所蔵）
卷頭図版 2	文化9年（1812）「福岡城下町・博多・近隣古図」写（仮題。「三奈木黒田家文書」 九州大学付属図書館付設記録資料館九州文化史史料部門所蔵）
卷頭図版 3	各遺構出土志野・織部・京焼、中国産陶磁器
卷頭図版 4	出土遺物 I
卷頭図版 5	出土遺物 II
卷頭図版 6	出土遺物 III
卷頭図版 7	出土遺物 IV
卷頭図版 8	出土遺物 V
図版 1	（1）調査区から南側市街地を見る（北から）（2）第2面遺構全景（上から） 91
図版 2	（1）I区第1面全景（北から）（2）I区第1面西側遺構（北東から） 92
図版 3	（1）II区第1面全景（南から）（2）SX132～134検出状況（東から） 93
図版 4	（1）III区第1面全景（北から）（2）III区第1面全景（西から） 94
図版 5	（1）I区礎石建物検出状況（北から）（2）SD125検出状況（北から）（3）SK043（南から） (4) SK043南壁土層（北から） 95
図版 6	（1）III区第1面礎石検出状況（西から）（2）SK064（北から）（3）SK067（南から） (4) SK067遺物出土状況（5）SK074（北から）（6）SK083（北から）（7）SK102（東から） (8) SK104（南から） 96
図版 7	（1）SK110（北西から）（2）SK115瓦出土状況（南から）（3）SK159（南から） (4) SK162（東から）（5）SK220（東から）（6）SK251（北から）（7）SK262（西から） (8) SK273・296（南から） 97
図版 8	（1）SK278（南から）（2）SK278遺物出土状況（東から）（3）SK288（南東から） (4) SK317（南から）（5）I区第2面全景（北上から） 98
図版 9	（1）II区第2面全景（南上から）（2）同 第2面・3面全景（南から） 99
図版 10	（1）II区第2面南側（南から）（2）III区第2面全景（上から） 100
図版 11	（1）III区第2面全景（北から）（2）同 第2面南側全景（西から） 101
図版 12	（1）III区第2面北側礎石検出状況（北から）（2）第3面SD1275（東から） (3) SD1275南壁土層（北西から）（4）SE1071（南から）（5）SE1071井筒（北から） 102
図版 13	（1）SE1273上面遺物出土状況（北から）（2）SE1273井筒（西から）（3）SE1273井筒底の状況 (4) SX1118石積みの状況（西から）（5）SX1193甕群（南から）（6）SK1001（東から） (7) SK1008（西から）（8）SK1008・1048（北から） 103
図版 14	（1）SK1014瓦廃棄状況（西から）（2）SK1014完掘状況（北から）（3）SK1018（西から） (4) SK1019（北から）（5）SK1019完掘（北から）（6）SK1020完掘（北から） (7) SK1056（東から）（8）SK1074（南から） 104
図版 15	（1）SX1123（北西から）（2）SK1172（西から）（3）SK1182甕群（北東から） (4) SK1195・1196（北から）（5）SX1211瓦出土状況（南から）（6）SK1218甕群（東から） (7) SK1240遺物出土状況（北東から）（8）II区調査区北壁（南から） 105
図版 16	各遺構出土陶磁器・瓦・土製品 106

表目次

表 1	城下町関連調査一覧（福岡城堀跡調査を含む） 2
表 2	各遺構出土錢貨 71
表 3	各遺構出土陶磁器・土器観察表 74
表 4	第1次調査出土陶磁器生産地別割合 82



第1図 福岡城下町の主要施設と寺社(宮野弘樹氏作成)

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は同市中央区赤坂1丁目174番地に、分譲マンション建設の為の埋蔵文化財の有無についての照会（事前審査番号25-2821）を平成25（2013）年10月25日付で受理した。これを受け埋蔵文化財審査課（現埋蔵文化財課）は、照会地が福岡城下町の大名町内に所在し、江戸時代初めから中頃にかけては福岡藩上級家臣の屋敷、江戸時代の文化12（1812）年には当地にあった中老の豪家の屋敷が火災にあい、その後城内にあった福岡藩郡役所が移設された場所であったことから、それらの遺構が残っていると予想されたので確認調査を実施した。調査の結果、現地表下約140cmで遺構を確認したので、遺構の保全などについて申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

平成26年10月15日付で九州旅客鉄道株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財業務委託契約を締結し、平成26年12月15日から発掘調査を、平成28年度に資料整理および調査報告書作成を行った。

2. 調査の組織

調査委託 九州旅客鉄道株式会社

調査主体 福岡市教育委員会（発掘調査：平成26・27年度、

資料整理・報告書作成：平成28年度）

調査総括 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課）長 常松幹雄

同課調査第1係長 吉武 学（26年度）

調査第2係長 榎本義嗣（27年度）

加藤隆也（28年度）

庶務 埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課） 管理係長 内山広司（26年度）

管理係長 大塚紀宜（27・28年度）

管理係 横田 忍（27・28年度）

事前審査 埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）事前審査係長 佐藤一郎（26～28年度）

同課事前審査係主任文化財主事 池田祐司（26～28年度）

同課事前審査係文化財主事 福蘭美由紀（26・27年度）

同課事前審査係文化財主事 吉田大輔（28年度）

調査担当 埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課）文化財主事 山崎龍雄

文化財主事 中尾祐太

同課埋蔵文化財調査員 佐々木蘭貞（26年度）

同課埋蔵文化財調査員 中園 将祥（27年度）

整理作業員 萩尾朱美、古賀美江 執行恭子

調査・整理に際し、陶磁器については佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問大橋康二氏、愛知県陶磁美術館井上喜久雄氏、文献に関しては福岡市博物館学芸課官野弘樹氏、焼塙壺に関しては東京都小平市教育委員会の小川望氏、土人形については太宰府市教育委員会の山村信榮氏、屋敷遺構については佐賀大学教授宮武正登氏に指導と助言を得た。また調査に際しては多くの発掘作業員の協力を得て無事終了できたことを記して感謝の意を表します。

II 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地と歴史的環境（第2図）

福岡城下町遺跡は博多湾沿いに形成された海岸砂丘（箱崎砂丘）上に立地する。この砂丘は最高で4mの標高を測る。福岡城は南側の大休山から延びる丘陵地上に築かれている。

福岡城下町は江戸時代から続く市街地であるため、肥前堀・中堀に伴う調査（表1）以外、考古学的調査が行われていない。江戸時代以前の遺跡の存在がよく分からぬ地域であるが、近年調査地北側400m離れた浜の町公園内で行われた防災対策の警固断層確認調査では、縄文時代早期後葉の貝塚^(註1)が発見された。福岡市役所地下駐車場建設のために行われた肥前堀の調査では、弥生時代から古墳時代前期の遺物が堀内から出土し、報告者は遺物の残りが良いことから、周辺に当該期の遺跡の可能性を指摘している^(註2)。また西鉄福岡駅事務室や個人住宅の井戸掘削工事では中国製陶磁器が発見されているという^(註3)。同様の海岸砂丘がある箱崎、西新・藤崎地区では弥生時代から古墳時代の遺跡が確認されていることから、福岡城下町内にも同時代の遺跡が存在する可能性はある。

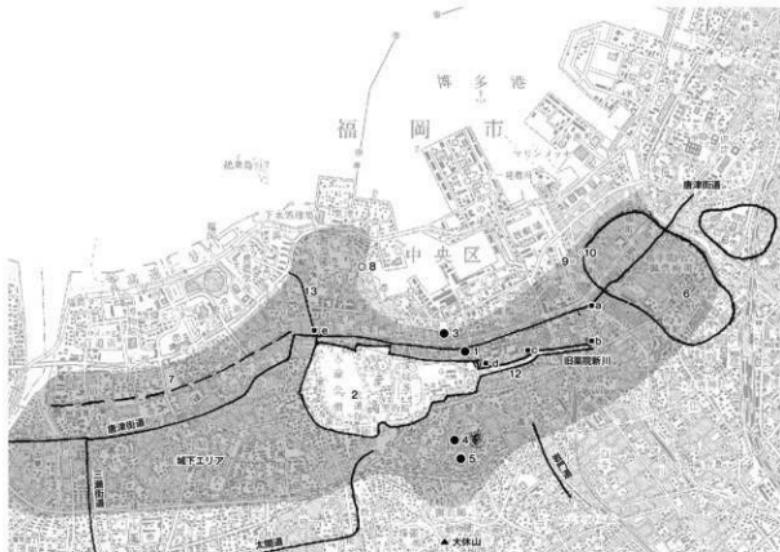
城下町南側の丘陵部では、中央区警固2丁目にある筑紫女学園校舎改築に伴って、大半が破壊されていたが帆立貝式前方後円墳の警固丸山古墳が調査され、古墳の一部と古墳時代後期の馬具を副葬する土坑や古代の墓地が出土した^(註4)。学園南側に残る緑地帯では前方後円墳の警固茶臼山古墳がある。また福岡城内の鴻臚館・福岡城内の確認調査でも、古墳遺構や副葬品と思われる遺物が出土し、天守台で箱式石棺の存在が知られる^(註5)など、福岡城が作られた南側の丘陵部では前方後円墳を含む警固古墳群がある。古代から中世は荒戸山（現西公園）東麓には中国・朝鮮半島との交流のための船が停泊した津があり、海底から遺物も採集されている^(註6)。鎌倉時代の元軍襲来（文永の役）の際には赤坂山で戦いが行われている。福岡城内の調査では中世の溝などの遺構が確認されている。

2. 福岡城下町について（巻頭図版1・2、第1～4図）

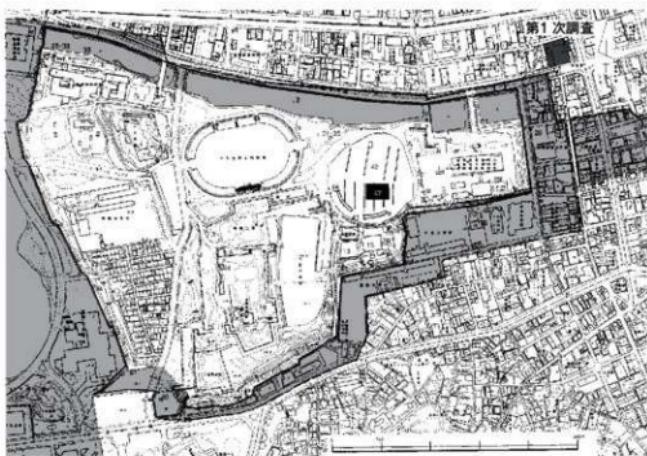
慶長5年、石田三成ら西軍と徳川家康ら東軍による天下分け目の関ヶ原の戦いで、豊前中津城主であった黒田長政は徳川家康方に加わり勝利し、その恩賞として筑前国一国を与えられた。まず小早川隆景が築いた名島城に入ったが、名島城は多々良川河口に築かれた城であり、周囲を海川で囲まれた要害の地ではあったが、城地が狭いため、新たに城地を大休山ふもとの警固村福崎の地に求めたとあり（『黒田家譜』）、翌慶長6年から益田宗清（与助）、野口一成（佐介）に命じて城を築き始める。そ

表1 城下町関連調査一覧（福岡城堀調査を含む）

調査番号	遺跡名	次数	立地	調査主体	予算種別	調査原因	所在地	調査面積	調査期間	報告書
1 7605	福岡城跡	2	北側内堀外壁	福岡市教育委員会	令達	地下鉄建設	中央区荒戸～赤坂	14900	1976.12～77.10.08	101
2 7728	福岡城跡	3	垂院新川	福岡市教育委員会	令達	地下鉄建設	中央区天神	500	1978.03～78.03	101
3 8134	城堀	5	城堀	福岡市教育委員会	民間受託	ビル	中央区赤坂1丁目12-8	79	1982.03.17～82.03.26	101
4 8449	福岡城跡	7	肥前堀1次	福岡県教育委員会	令達	公園	中央区天神1-1	580	1984.06.01～84.06.12	
5 8747	福岡城跡	8	肥前堀2次	福岡市教育委員会	令達	市庁舎	中央区天神1-7	150	1985.07～85.08	131
6 8840	福岡城跡	12	肥前堀3次	福岡市教育委員会	民間受託	ビル	中央区天神1丁目6-8	650	1988.11.07～88.11.26	293
7 8956	福岡城跡	14	肥前堀4次	福岡市教育委員会	令達	市庁舎	中央区天神1-8-9	700	1989.10.11～89.10.21	294
8 9416	福岡城跡	26	赤坂門	福岡市教育委員会	民間受託	電気所	中央区赤坂1丁目10-2	255	1994.05.25～94.08.06	463
9 9546	福岡城跡	32	中堀	福岡市教育委員会	民間受託	共同住宅	中央区大名1丁181番外	154	1995.12.11～95.12.27	498
10 9630	福岡城跡	36	中堀	福岡市教育委員会	単費	共同住宅	中央区大名1丁目360-1	46	1996.08.23～96.08.23	年報11
11 9639	福岡城跡	37	中堀	福岡市教育委員会	単費	事務所	中央区大名445-1	10	1996.09.11～96.09.11	年報11
12 0064	福岡城跡	46	中堀	福岡市教育委員会	国庫補助	ビル駐車場整備	中央区大名2丁目443番外	166	2000.03.01～00.03.30	755.1005
13 0503	福岡城跡	53	城堀	福岡市教育委員会	公共受託	共同住宅	中央区赤坂1丁目55番地	156	2005.04.04～05.05.20	960
14 0514	福岡城跡	54	肥前堀	福岡市教育委員会	国庫補助	商業ビル	中央区天神2丁目169-170番地	288	2005.04.25～05.05.25	年報20
15 0634	福岡城跡	58	中堀	福岡市教育委員会	国庫補助	商業ビル	中央区大名2丁目160-1～4	4217	2006.07.06～06.07.10	年報21
16 1435	福岡城下町	1	郡住所跡	福岡市教育委員会	民間受託	共同住宅	中央区赤坂1	2014.12.15～15.04.30	1322	



第2図 福岡城下町周辺遺跡(1/50,000)



第3図 福岡城と調査区の関係図(1/10,000)

れと共に北側海浜部に城下町が作られる。この地の北側には古代からの港荒津があった場所であり、海上交通を重視する黒田長政が、商人の町である博多と異なる当地を選んだのであろう。

福岡城は大休山から続く丘陵に築かれた平山城である。福崎山に築かれた本丸天守の最大標高は約35mを測る。それを囲むように二の丸、さらに三の丸が囲む形態の広大な城域を持つ。天守の存在は不明であるが、本丸・二の丸は高石垣で築かれ、三の丸部分は高い土塁と堀で囲まれ、土塁は下部に石積みのある腰巻石垣である。防衛の要所には櫓が作られ、通説では47の櫓があったと言われる^(註7)。堀は城地を取り囲むように掘られ、西側が草香江の入り江を利用した大堀で、東側の堀から東方向に中堀・肥前堀として那珂川まで延び、城下町の防御ラインとしている。南側は丘陵を掘り切って堀としている。

福岡城下町は城の北側海浜部を中心に造成される。福岡城築城と共に城下町づくりが開始されたと思われる。城下町の範囲は『新修福岡市史特別篇』^(註8)によれば、東は博多との境を流れる那珂川、西は大堀から博多湾に通じる唐人町口堀（ヤナ堀）、南は中堀・肥前堀南の春吉口、薬院口、赤坂口で限られる範囲が福岡城の外郭としている。この範囲がいわゆる近世城郭の一つの特徴である惣構の範囲である。城下町は江戸時代が進むにつれて発展・拡大を遂げ、江戸時代後期になると西は西新・藤崎まで、南は大休山北麓まで藩の施設が出来るなど広がる。那珂川東側の博多は古くからの伝統を持つ商人の町であるが、南側に戦国期に臼杵氏に開削されたという伝承を持つ房州堀があり、寺町が形成されるなど軍事・防衛的性格を持ち、福岡城の外郭的性質がみられるなどして福岡城下町に含む考えもある^(註9)。城下町内には福岡藩家臣の給米を保管する永倉、学問所、藩の港波戸などがあり、藩役所施設、武家屋敷、町屋などが城下町内には存在している。明治4年（1871）の廃藩置県後は、調査地にあった郡役所は廃され、大名小学校、電報局などがつくられ、それらの移転後は、武徳会演武場^(註10)などが作られ、徐々に民有地として細分化されて行く。



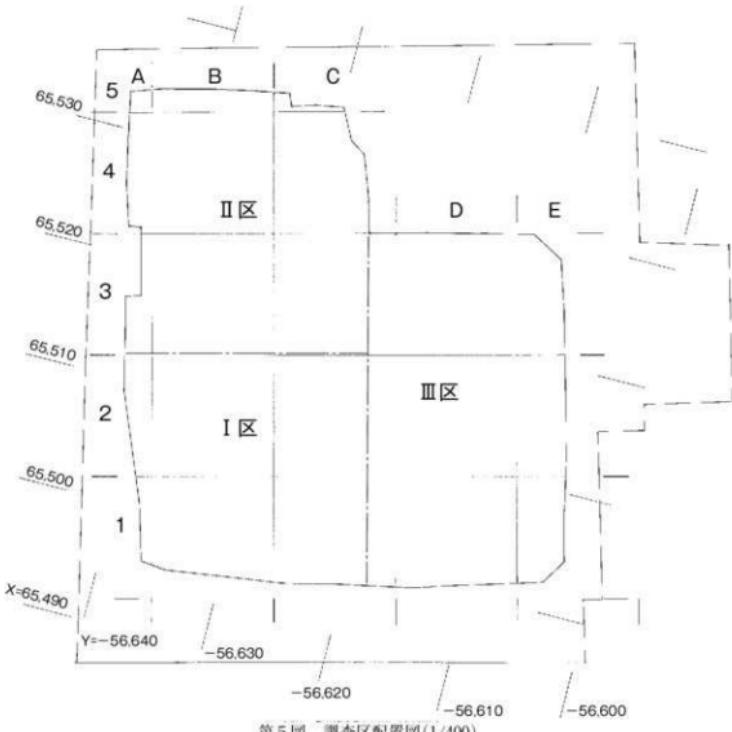
第4図 江戸時代後期（文化9年）の調査地（「文化9年図」の一部を使用）

III 調査の記録

1. 調査の概要（第5～8図、図版1）

調査の地番は中央区赤坂1丁目174番地1他、調査前は民間駐車場であった。駐車場の営業が終了後、駐車場のアスファルトと建物を解体・撤去後の調査となった。調査時の廃土は場内処理で、当初は2分割で調査を行う予定であったが、調査前の現地協議で、調査区東側で撤去したアスファルト下に固く厚いコンクリートの建物基礎があることを確認した。調査前にそれを撤去する必要があり、調査が着手できる南西側をI区、その北側をII区、厚いコンクリート基礎がある東側をIII区として、平成26年12月15日から調査を開始した。III区で確認したコンクリート基礎は、I区終了後調査を中断し業者によって撤去を行い、その後II区・III区と順次調査を行った。遺構の残りが予想以上に良く、当初3月末であった調査期間を施工側との協議で、1カ月延長し、4月末で無事調査を終了した。

調査は10mグリッドで調査区画を設定し、包含層・整地面出土遺物などを取り上げた。深さ0.8～1.2mで郡役所と思われる礎石と、焼土・炭化物を多く含む整地面を確認した。その面を第1面とし遺構を確認した。また第1面の整地面を撤去後、基盤の砂丘面と城下町造成時の面を第2面とし、造成面を撤去した砂丘面を第3面として調査を行った。ただ時間的な制約から整地土の掘下げは重機を用い、また砂丘面の調査は十分には出来なかった面がある。遺構番号は第1面が001から、第2面は1000か



第5図 調査区配置図(1/400)

らとし、遺構の性格によって遺構記号を付した。

出土遺物は中型のコンテナケースで400箱を超える。遺物の整理が間に合わず、今回報告の遺物は担当者が遺物洗浄時に取り上げたものである。ゆえに重要な遺物が漏れている可能性があり、遺構の時期認識も不十分であることをお断りしておく。陶磁器・土器の詳細な記録は遺物観察表にまとめた。また紙面の都合上ガラス製品、骨などの自然遺物は図化・図示出来なかった。

2. 第1面の調査（第6・7図・図版2・3）

第1面は酢工場の地下施設、旧大名小学校校舎などの近代建物の基礎攪乱、太平洋戦争の空襲の空襲の瓦礫処理坑などにより破損を受けた部分もあったが、郡役所建物と思われる建物の礎石、廐棄土坑、溝、ピットなどを検出した。時代としては18~19世紀であろう。

①礎石建物（SB）

SK338（第9図、図版5-(1)・6-(1)）

調査区中央を北から東へ延びる礎石・柱穴列である。焼土・炭化物を多く含む整地面で確認した。確認規模は南北約28m、東西16.5m以上を測る。建物主軸方位はN-15°-Wである。この礎石柱穴列は各礎石間隔が平均で1.95mを測る。この間隔はほぼ京間の1間に当たる。礎石は花崗岩や火成岩系の直径20~50cmの削石・扁平な自然石の石を用いている。出土遺物は各柱穴掘方から瓦・陶磁器片が出土している。江戸後期のものが多い。特に図示出来るものはなかった。

②溝状遺構（SD）

SD125（第10・13図、巻頭図版4、図版5-(1)・6-(1)）

I区西側で検出した南北に延びる溝、南側では近代の地下室SX057に切られ、北側は土坑SK065や攪乱土坑などと重複し、南端ではSK102・119などに切られている。確認長は約115mとなる。溝幅は土層ベルト部分で約2m、深さは0.8mを測る。この溝の延長は北側II区では遺構面が攪乱などを受けているためか確認出来ず、調査区南壁でも確認できず、細長い大型土坑の可能性もある。ただ溝断面の形状がV字状を呈すことから溝とした。18~19世紀の遺物がある。

出土遺物 肥前陶磁器、瓦類、金属製品などが出土。主なものを挙げる。1は南ベルト上層出土。京焼風陶器小碗。鉄絵で筆を描き、外底部は露胎。高台内に墨書があるが、意味は不明。2は上一中層出土。薩摩か肥後産の陶器蓋。黒色釉がかかり、胎土に夾雜物が多い。3は完存の備前陶器瓶。外面全面鉄釉をかけ、一部自然釉がかかる。焼成時の粘土が付く。内面は露胎。口の周りに銅線が巻き付く。側面は、一面は膨らみを持つが、別方向から見ると膨らみがなく、見る方向で器形が違うという趣を出している。底部に刻印がある。

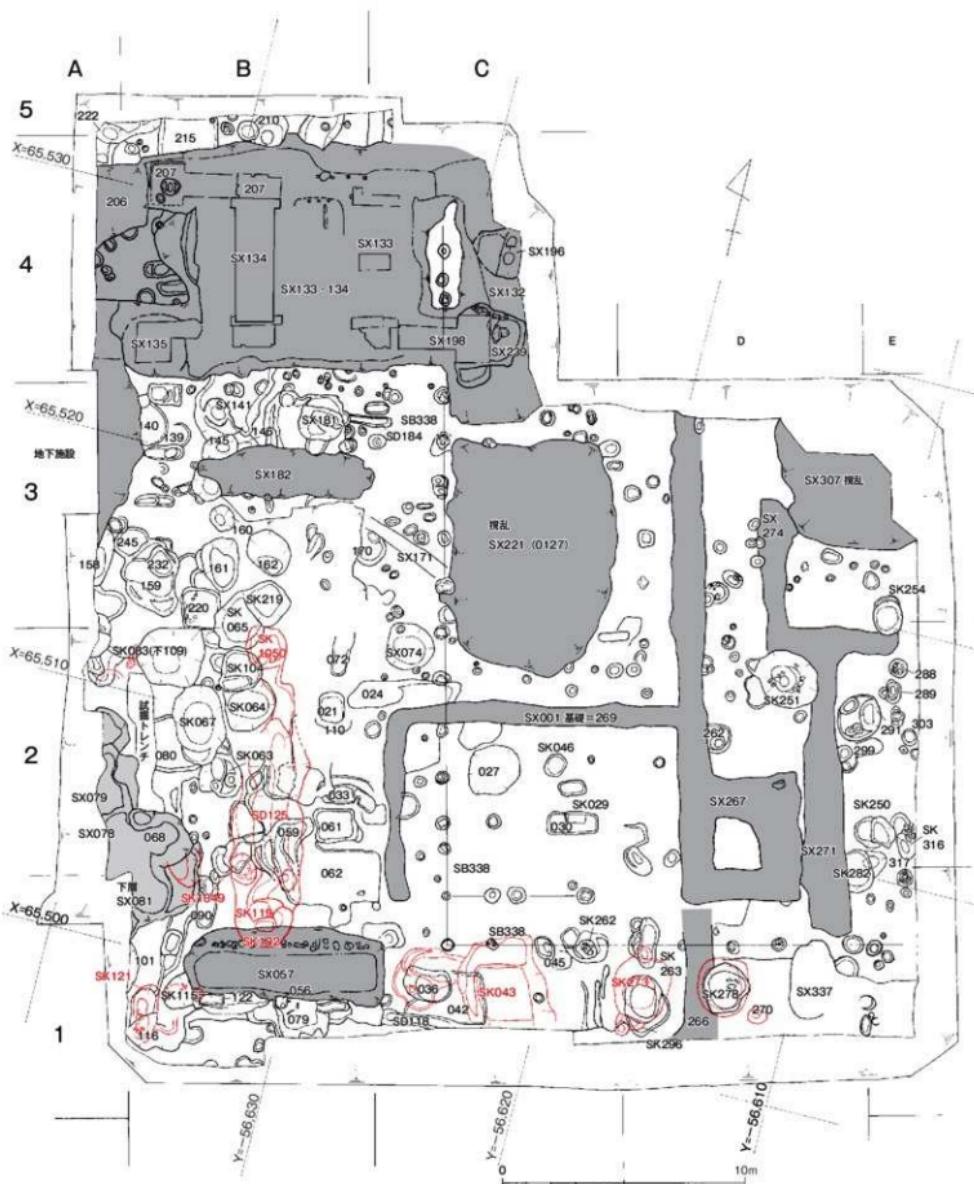
③土坑（SK）

主なものを挙げる。

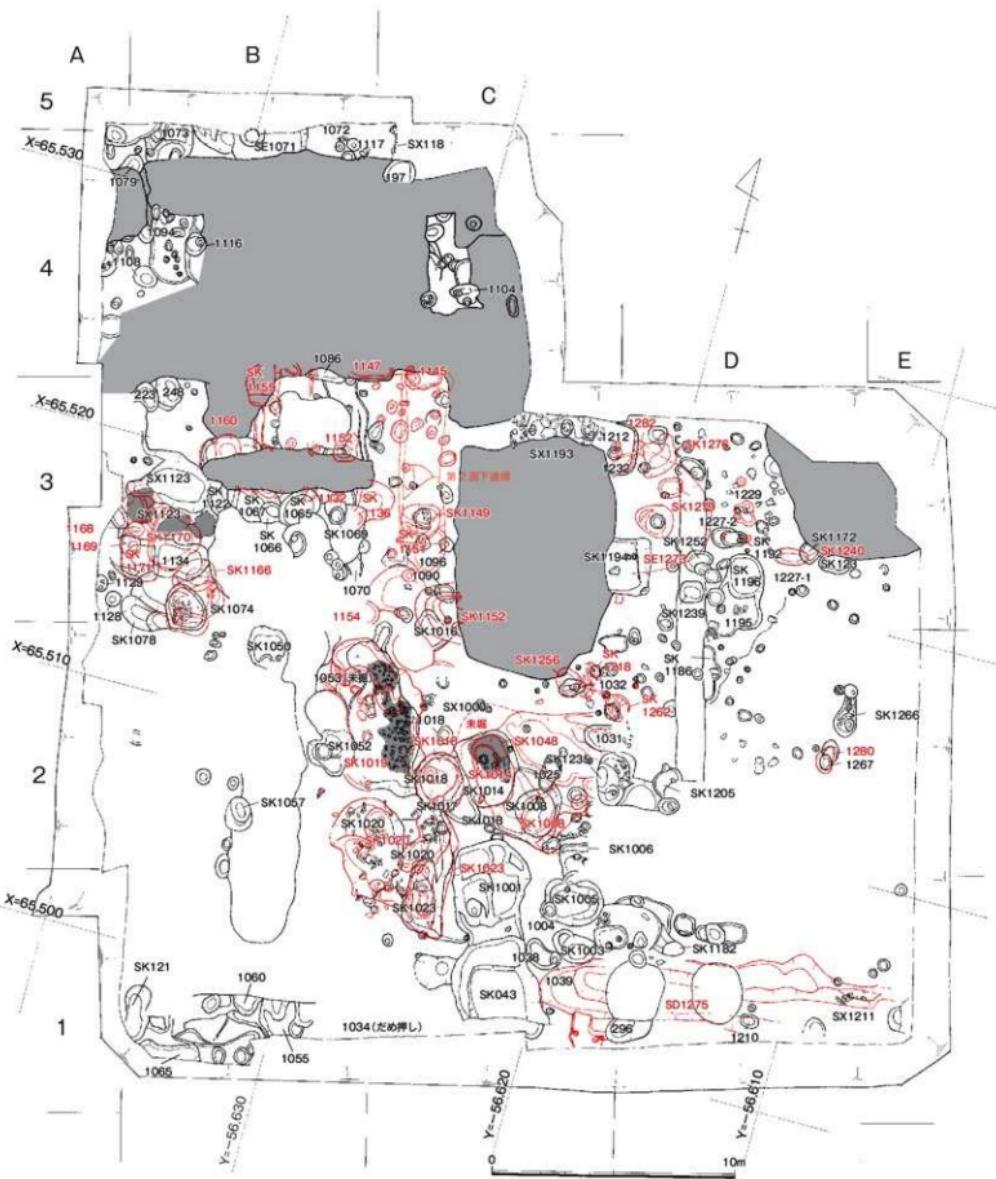
SK043（第11・13・15図、巻頭図版4、図版5-(3)）

I区南壁北側、整地面下で検出。大型の土坑で、壁は崩れるが方形を呈すと思われる。南北3.7m以上、東西長3.5m、最大深さ1.2mを測る。底面は中央部が一段深くなる。埋土の上層は黒色から黒褐色土で炭・灰・焼土などを多く含む。場所的に郡役所建物に伴う地下倉庫とするには不自然で、1出土遺物から見て郡役所建設時に埋め立てられたと考える。

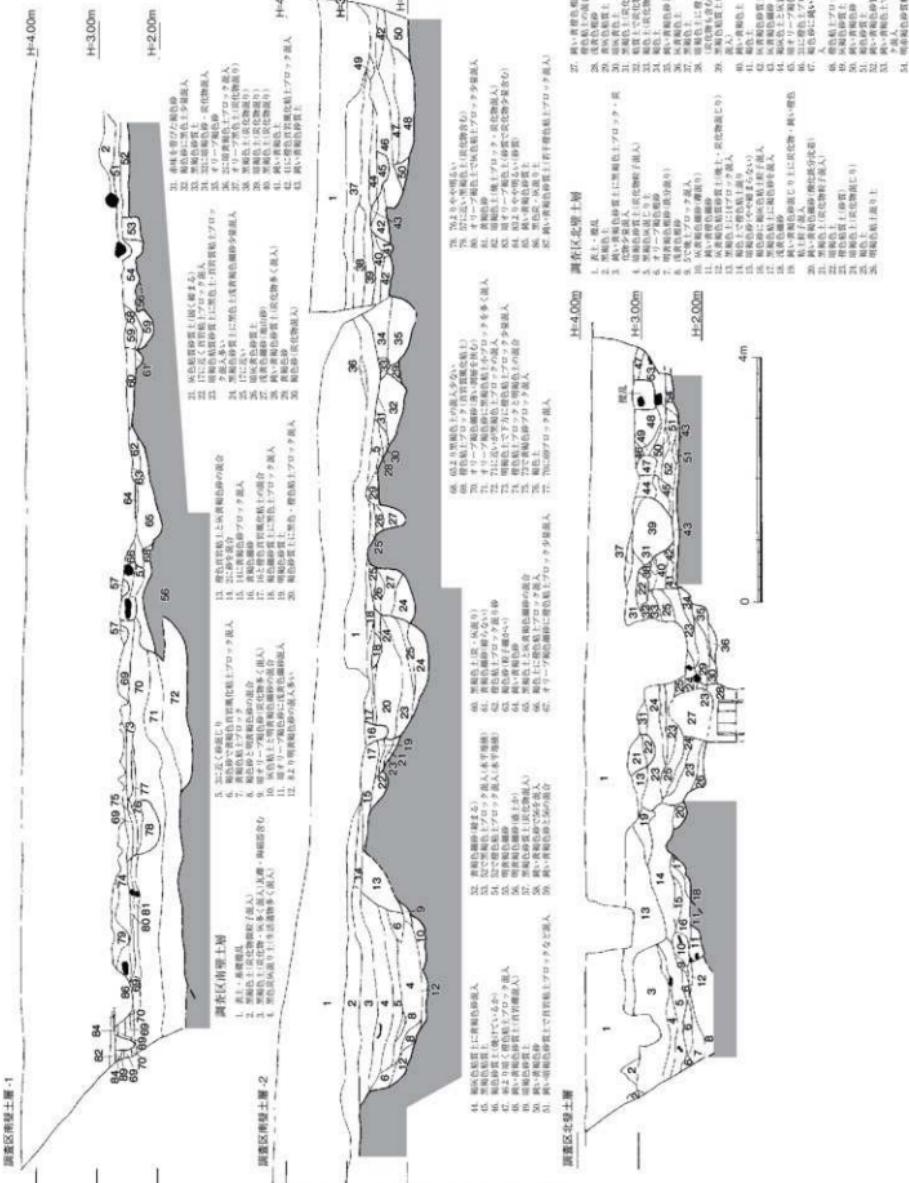
出土遺物 瓦や陶磁器、土人形などが多量出土。紹介する大半が下層出土。18~19世紀前半頃迄。4~7は染付磁器。4~6は碗。4は肥前系。5は肥前の陶胎染付碗。釉は厚めで、疊付き鉄漿が塗られる。6は肥前の小碗。ほぼ完存。外面鶴と松が3か所あり、高台内離れ砂付着。7は皿。内面唐



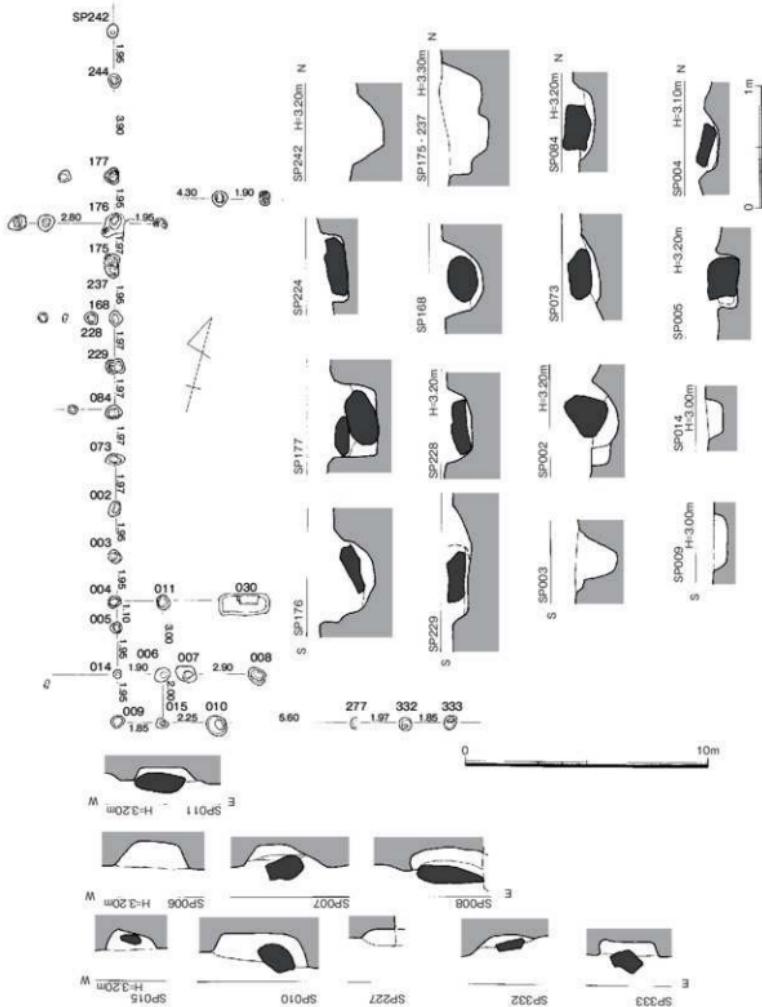
第6図 第1面造構全体図(1/200) 紅色は下層検出造構



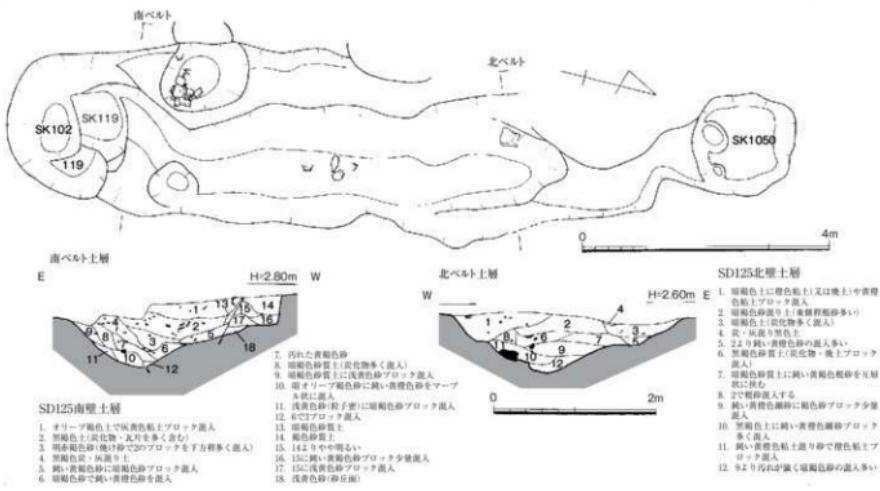
第7図 第2面遺構全体図(1/200) ライ赤色は下層検出遺構



第8図 調査区南壁・北壁土層(1/80)



第9図 SB338礫石建物(1/200・1/40)



第10図 SD125と土層(1/80・1/60)

草と五弁花、高台に「富貴長春」の銘。8は肥前の色絵龍文小皿。見込に龍が赤、黄、黄緑、青色の彩色で描かれる。高台内昆虫文。9~20は陶器。9はヨーロッパのアルバレロの薬壺の影響を受けたコップ器形。福岡産で江戸後期。外面に銛のような鉄絵。10・11は蓋。いずれも福岡産。10はオリーブ灰色の青磁釉が掛かる。天井端部釉の掻き取り。11は完存。外面暗褐色の鉄釉が掛かり、口縁内面は露胎。12は天目形の碗ではほぼ完存。福岡産。灰オリーブ色釉が掛かる。豊付釉掻き取りで重ね焼き粘土が付着。13は火入。福岡高取系。光沢を持つ釉を掛ける。外面獅子か狛犬の獸面が付く。14は福岡産の小型甕。鉄釉などを二度がけする。15は肥前武雄周辺窯産刷毛目瓶。口縁部は黒褐色の釉。16は竹節形瓶。福岡高取系。胴部に窪みがある。17は壺か瓶底部。外面鉄漬を掛け、外底部は露胎。18は肥前陶器二彩の大鉢か植木鉢。内外面白化粧土の刷毛目で、外面暗褐色の鉄釉で文様を描き、更に釉を上掛け。19はアワビ形状の大皿で福岡の高取焼。外底部には巻貝、二枚貝の足をつける。褐色釉の下地に薬灰釉をかけている。

SK064 (第12・13・15、卷頭図版4、図版6-(2))

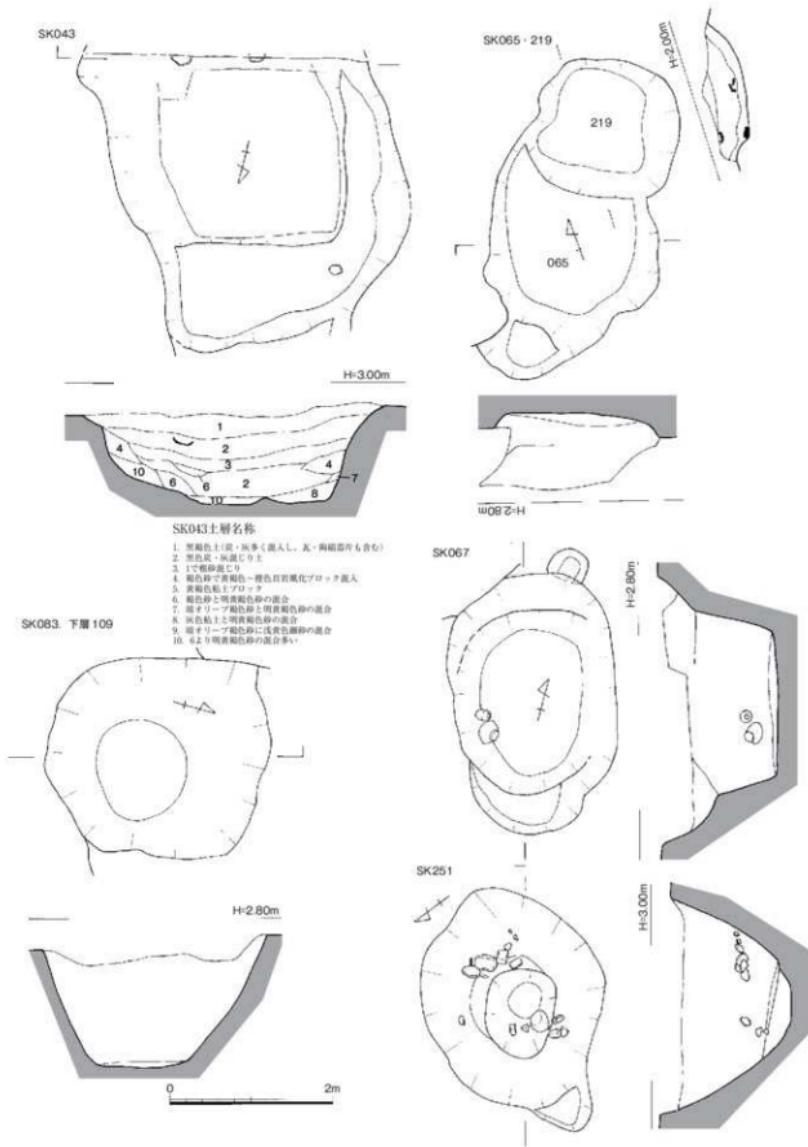
I区西側で検出した不整円形の土坑。SK104に切られる。規模は2.0×2.1m、深さは1.2mを測る。埋土は黒褐色土で、炭、灰を含む。18~19世紀後半までの遺物を含み、明治時代以降の廃棄土坑か。

出土遺物 瓦・陶磁器・金属製品などが出土。20は上層出土。肥前染付磁器碗。内面は鳥籠と雷文、外面は鶴親子と鳥籠を描く。21~23は陶器。21・22は小碗。21は肥前青磁小碗。23の土瓶内出土。大河内山窯のものか。22は福岡県高取か。黒褐色の鉄釉に灰白色から青灰釉を掛け流す。豊付き釉掻き取り。23は関西系陶器の土瓶。外面柿色釉で、下半は使用による煤が付着。中に21が入っていた。24は灯明皿で福岡産。25は土師質土器のコンロか七輪。内径18.2cmを測る。口縁部は使用により煤ける。製品名なのか「自適」というスタンプがある。江戸末から明治か。

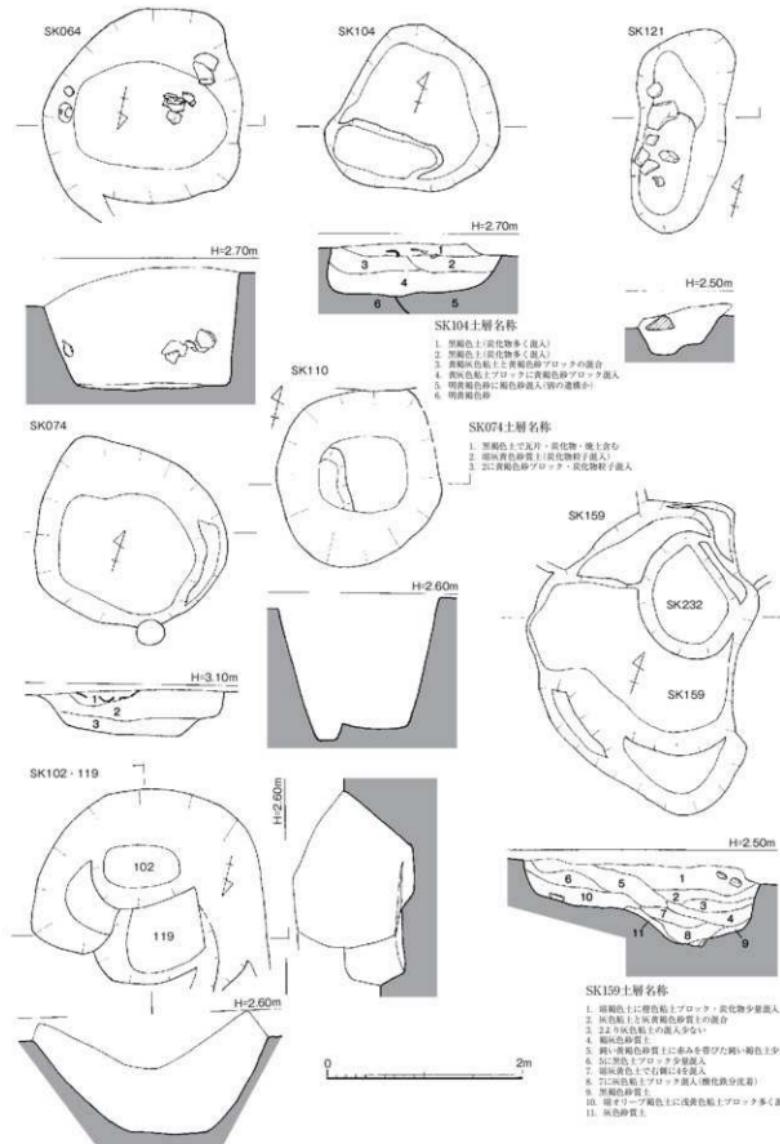
SK065 (第11・15図)

I区とII区境で検出。当初は攪乱土坑としている。II区でSK219と切り合う。規模は径1.94m、最大深さ0.86mを測る。

出土遺物 瓦や陶磁器が出土。26・27は染付磁器。いずれも肥前磁器で18世



第11図 SK043・065・067・083・109・219・251(1/60)



第12図 SK064・074・102・104・110・119・121・159(1/50)

紀のもの26は碗で口縁外面四方櫛文と草花文。27は瓶。28は輸入碍子。「1869年W.M.WARDEN&CO」という刻字がある。英國産で明治初めに当地にあった電信局で使われていたものか。

SK067 (第11・16・17、巻頭図版4、図版6-(3)・(4))

I区西側で検出した平面梢円形状を呈す土坑。規模は径2.05×3.20m、最大深さ1.5mを測る。埋土は炭・灰含む黄褐色砂、黒褐色砂質土の混り土である。下層から高取焼の甕などが出土。遺物量が多く廃棄土坑か。**出土遺物** 瓦や陶磁器、鉄製品などが多く出土。18~19世紀の遺物が多い。図示したものは中~下層出土が多い。29~35は磁器。29・30は肥前系染付碗。29は小広東碗。外面と見込みに「壽」文。30は18世紀のもの。濃い藍色での施文。31は肥前有田の小皿。型打ち成型。見込みにナスを描く。32は肥前有田の色絵皿。蛇の目釉剣で、その上に赤・緑・紫色でカブを描く。釉の発色は良い。33は肥前有田の染付瓶底部。内面露胎。豊付きアルミナが付着。34は肥前の青磁灰落とし。口端部は使用により釉が剥げる。外底は露胎で輪宝の墨書がある。35は肥前有田の色絵磁器掛花生破片。梅と鶯を立体的に描き、幹は鉄薔で濃淡をつけて塗る。17世紀末~18世紀前半。36~40は陶器。36は美濃焼の葵皿で型打ち成型。37は福岡小石原と思われる竹節瓶。鉄釉の上に肩部一部藁灰釉を厚く掛けた。外底部はケズリで露胎。38は福岡産の中型甕。高取系か。肩部に花弁の貼付け。暗赤褐色釉の上に淡黄色~灰色釉などを流し掛けた。39は福岡高取の茶碗。厚めの黒釉が掛かる。40は肥前の壺の蓋。波状の刷毛目である。41~50は土師器皿。41~49は小皿。口径は7.5~7.8cm、器高は0.9~1.5cmで外底部は回転糸切離し。45は底部片で墨書が残る。50は底が丸みを持つ皿。口径11.2cmと他より大きい。表面に煤が厚く付着。他に41~49も煤が付着しており、灯明皿として使用されたのであろう。51・52は瓦質土器火鉢。ほぼ同形。51の外面はミガキに近いナデでスタンプ文があり、内面上半煤が付着する。52は外面横刷毛目後ナデ。内面はタテ・ヨコナデ。色調はいずれも黒色。

SK074 (第12・17、図版6-(5))

I区北側中央で検出。隅丸方形形状を呈す土坑。規模は径1.8×1.95m、最大深0.45mを測る。埋土の上層は黒褐色土、下層は暗灰黄色砂質土で瓦・炭化物を多く含む。**出土遺物** 瓦や陶磁器、鉄製品などが多く出土。53は肥前の染付磁器碗。城と草花を描く。1770~1810年頃のもの。

SK083 (第11・17図、図版6-(6))

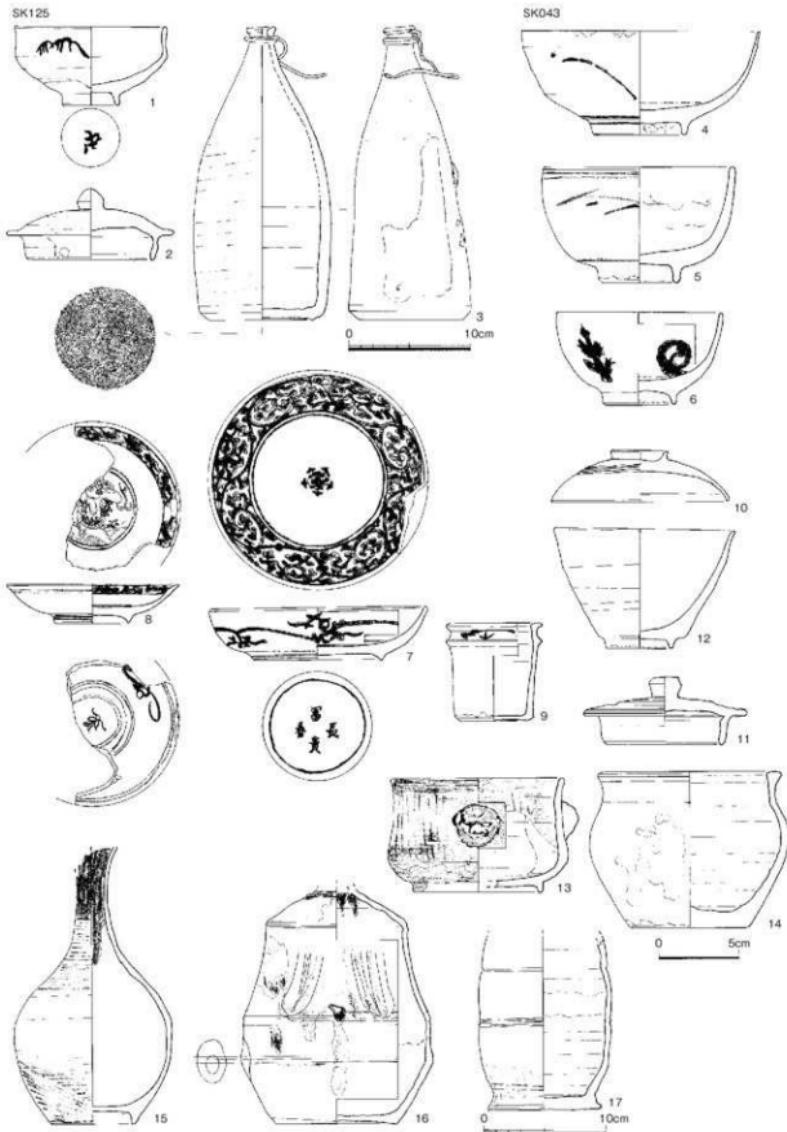
I区北側中央で検出。下層は109としている。平面形状は不整円形で、規模は2.45×2.75m、最大深さ1.6mを測る。埋土は褐色砂・暗褐色砂混り灰色粘土。**出土遺物** 瓦や陶磁器、土師器、鉄製品などが出土。54は肥前有田の手塙皿。55は色絵の肥前三川内のサザエの置物片。56は陶器の灯明皿。福岡産で19世紀。57は土師器小皿。口径7.2cm。外底部回転糸切離し。

SK102・119 (第12・17・23図、巻頭図版5・6、図版6-(7))

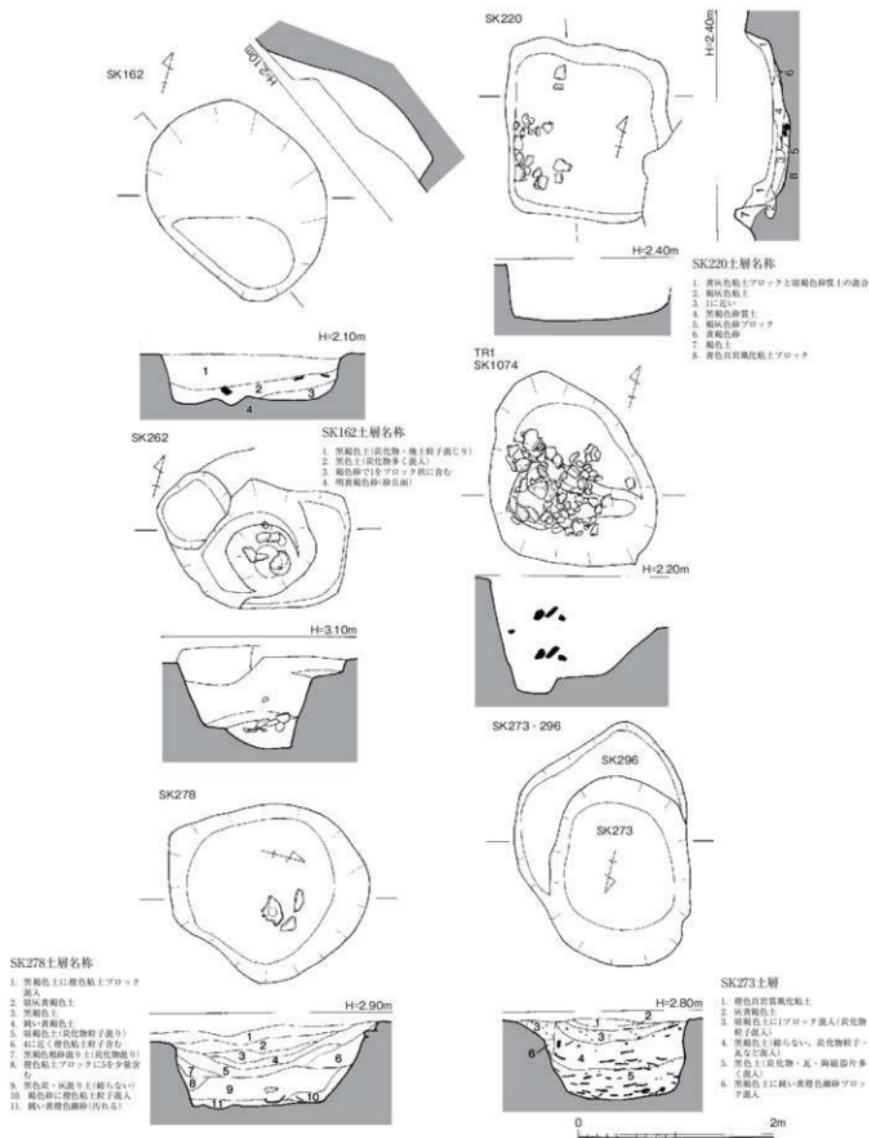
I区SD125南端で検出。陶磁器が大量に廃棄された状況で出土。最大幅2.2m、深さはSK102が1.2m、SK119が1.1mを測り、SK102がやや深い。**出土遺物** 瓦や陶磁器、土師器、鉄製品が出土。58~69はSK102出土。58・59は肥前器白磁猪口。18世紀後半~19世紀前半。60・61は肥前の白磁紅皿。18世紀前半。62は肥前有田手塙皿。凹型高台で見込みにナスを描く。63は肥前の饅頭身碗底部。見込みに太極、高台内に「長命富貴」銘が描かれる。縁辺は意図的に割る。瓦玉への転用か。18世紀後半。64は色絵の型打ち製品。65は陶器灯明皿。66~69は土師器小皿。口径は7.4~8.0cmを測る。外底部回転糸切。70は外耳鍋。口径21.2cm。外面は粗い縱刷毛目で煤が付着。71・189はSK119出土。71は京焼風陶器の灰落とし。文様は剥げている。18世紀後半~19世紀。189は陶器で肥前甕屋窯の甕。

SK104 (第12図、図版6-(8))

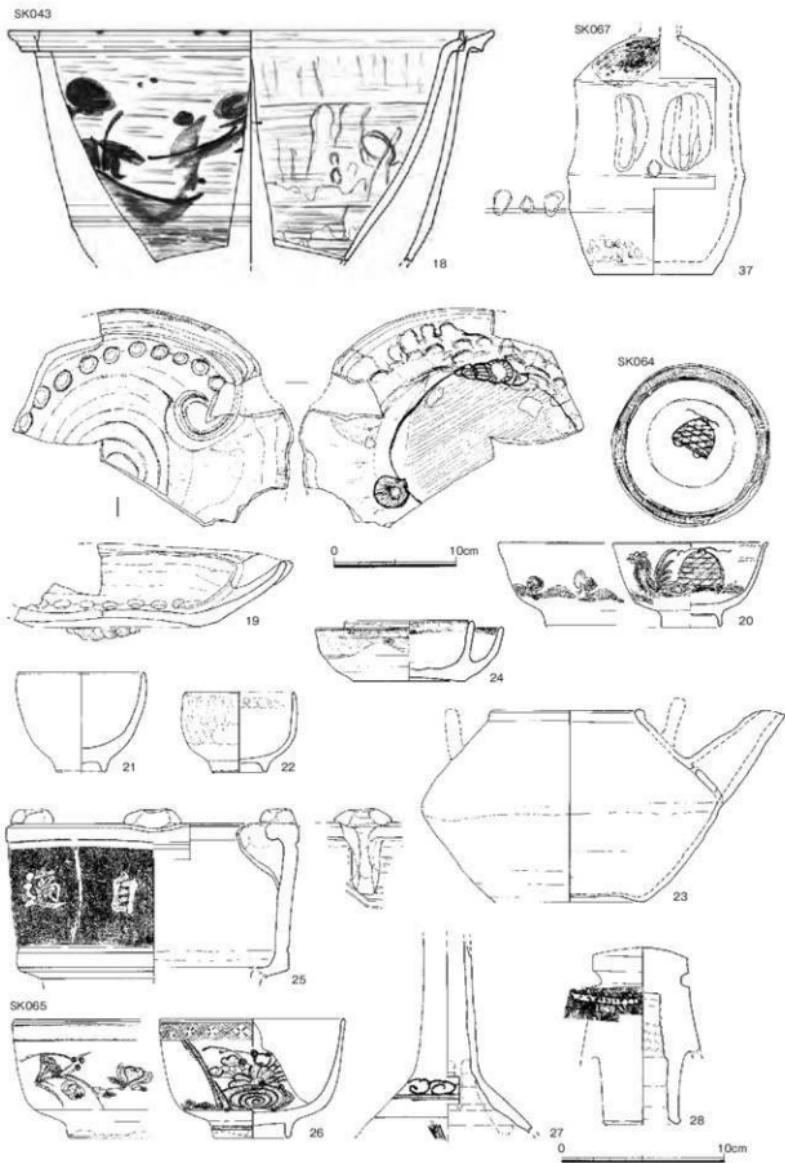
I区北側で検出。SK064を切る。規模は径1.6×1.75m、深さは0.5mを測る。埋土は黒褐色土、黄灰



第13図 SD125、SK043・067出土遺物(1/3・3、16、17は1/4)



第14図 SK162・220(下層1074)・262・273・278・296(1/50)



第15図 SK043・064・065・067出土遺物(1/3・18、19、37は1/4)

色粘土ブロックに黄褐色砂ブロックの混合土。図示する遺物はない。

SK110 (第12・17・18図、巻頭図版5、図版7-(1))

SK021と同じ土坑。円形土坑で規模は径1.65×1.75m、深さ1.45mを測る。黒褐色砂質土で炭化物・焼土ブロックを含む。出土遺物 瓦や陶器、土師器、鉄製品などが出土。18~19世紀の遺物が出土。72はSK021で出土。陶器大鉢で肥前武雄窯。いわゆる二彩唐津。17世紀末~18世紀初。73~78は染付磁器。73は肥前染付小碗。波佐見系。74は肥前有田。宝文の文様。75は肥前有田の水裂文皿。底部蛇の目四型高台。76は肥前の蓋。77は肥前有田の菱形の小香炉片。78は陶器小碗片。福岡か萩。79は肥前京焼陶器底部。外底部墨書きあり。80は土師器小皿。口縁に煤が付着し、灯明皿か。

SK115 (第21・36図、巻頭図版5、図版7-(2))

I区南西隅、**SX057**に切られる楕円形の土坑。廃棄された瓦が多数出土。埋土は橙色粘土混りの褐色砂質土。17世紀の遺物を含み江戸初期の遺構。

出土遺物 瓦片が多量に出土。17世紀前半の遺物を含む。81・82は陶器。81は小碗。肥前内野山窯。82は壺下胴部。福岡か肥前。築城期のもの。83は中国産白磁か青白磁の皿底部。粗い貫入が入る。84は瓦質土器の鉢。内面刷毛目、外面丁寧なナデ、刷毛目でヘラ刻文が入る。

SK121 (第18・36図、巻頭図版5)

I区南東隅で検出。規模は径0.95×2.15m、深さは0.4mを測る。埋土は褐色砂質土が主体で、内面に礫石を含む。**出土遺物** 瓦や陶器、土師器、鉄製品などが出土。85は陶器小碗。

SK159・232 (第12・18図、巻頭図版5、図版7-(3))

II区で検出した不定形の大型土坑。径2.4×3.15m、最大深0.8mを測る。近現代の大型攪乱下で検出。底面北側一段土坑状に下がる部分を**SK232**としている。遺物から見て築城期に近い遺構。

出土遺物 86は中国漳州窯系染付磁器碗。内外面輪線が巡る。焼成は不良。87~89は陶器。87は肥前の皿。内外面重ね焼痕が残る。88は福岡上野か高取の大皿片。89は福岡産の燭台片。98は肥前青磁皿。見込ヘラ切りの文様。99は肥前唐津小十窯の陶器皿。見込目痕粘土残る。

SK162 (第14・18図、図版7-(4))

II区で検出した楕円形状土坑。規模は径1.55×1.95m、最大深0.77mを測る。埋土は黒褐色砂混じり土で炭化物・焼土塊を含む。18~19世紀の遺物が出土。**出土遺物** 90は肥前有田の染付磁器稜花皿。91は肥前の白磁小杯。92は福岡産青磁釉の皿。豊付に鉄錆を塗る。

SK219 (第11・18図)

II区、**SK062**北側で検出した方形土坑。規模は径1.65m四方で、深さ0.5mを測る。埋土の主体は炭化物粒子を含む黒褐色粗砂混じり土。**出土遺物** 93は中国景德鎮芙蓉手の小碗。94は関西系の陶器の小杯。

SK220 (第14・18図、図版7-(5))

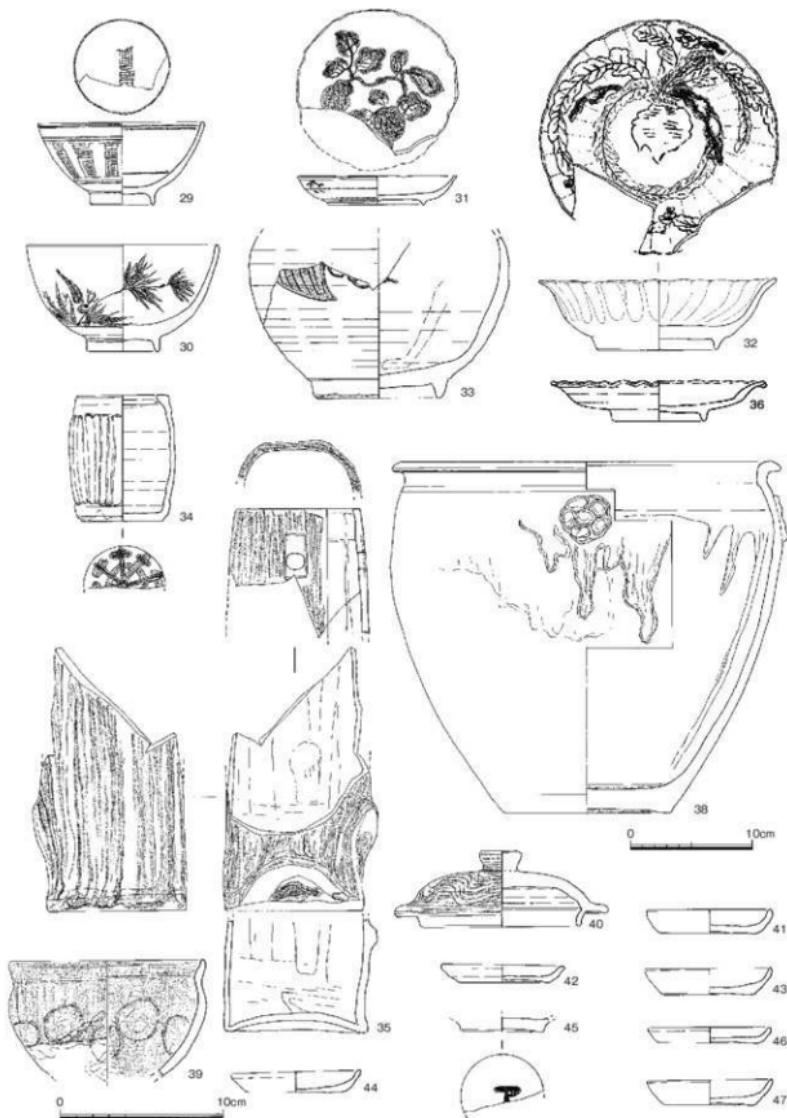
II区で検出。径1.55×1.7m、深さ0.5mを測る。形状が方形であり、元々木枠があったのか。埋土は褐灰色・黄灰色粘土ブロックと暗褐色砂質土の混合。下で検出したSK1074は2面で報告する。

出土遺物 95は肥前染付の碗。呉須の発色は不良。96は白磁碗。97は中国越州窯系青磁碗底部。鴻臚館時代のもの。

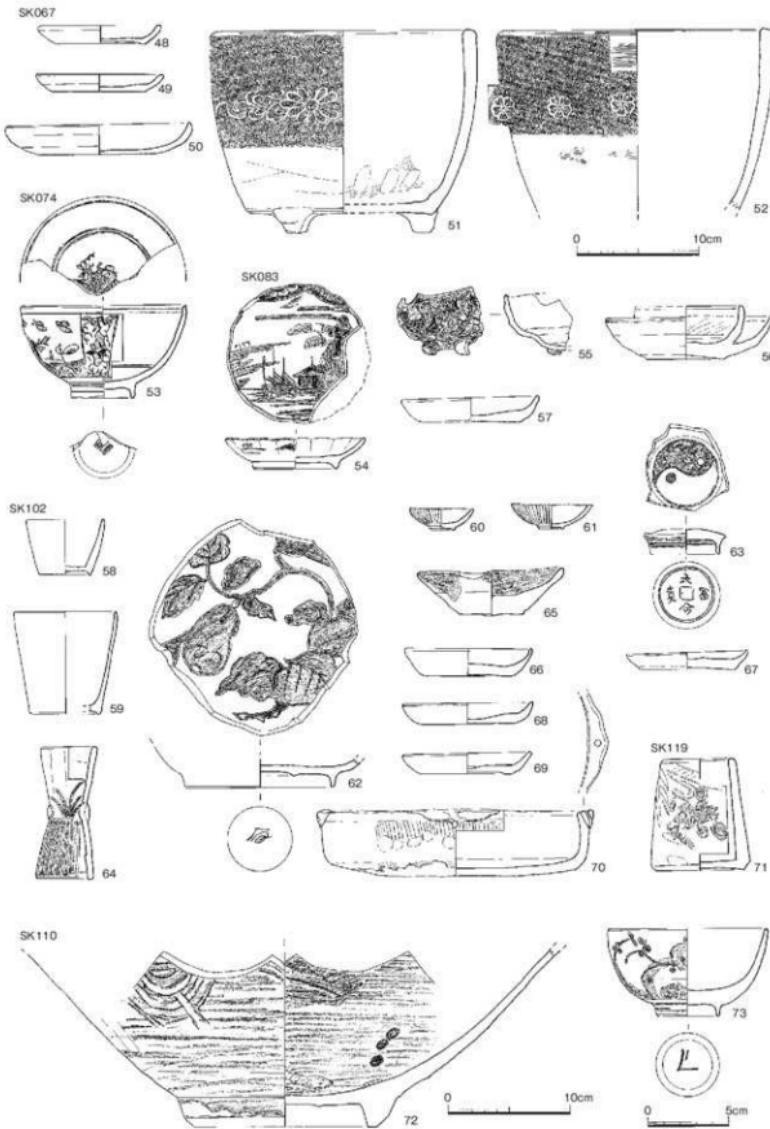
SK251 (第11・18図、図版7-(6))

III区で検出した楕円形状の土坑。規模は2.27×2.75m、最大深さ1.6mを測る。中層から下層に礫石が入っていた。埋土は黒色から黒褐色土である。17世紀~18世紀の遺物がある。

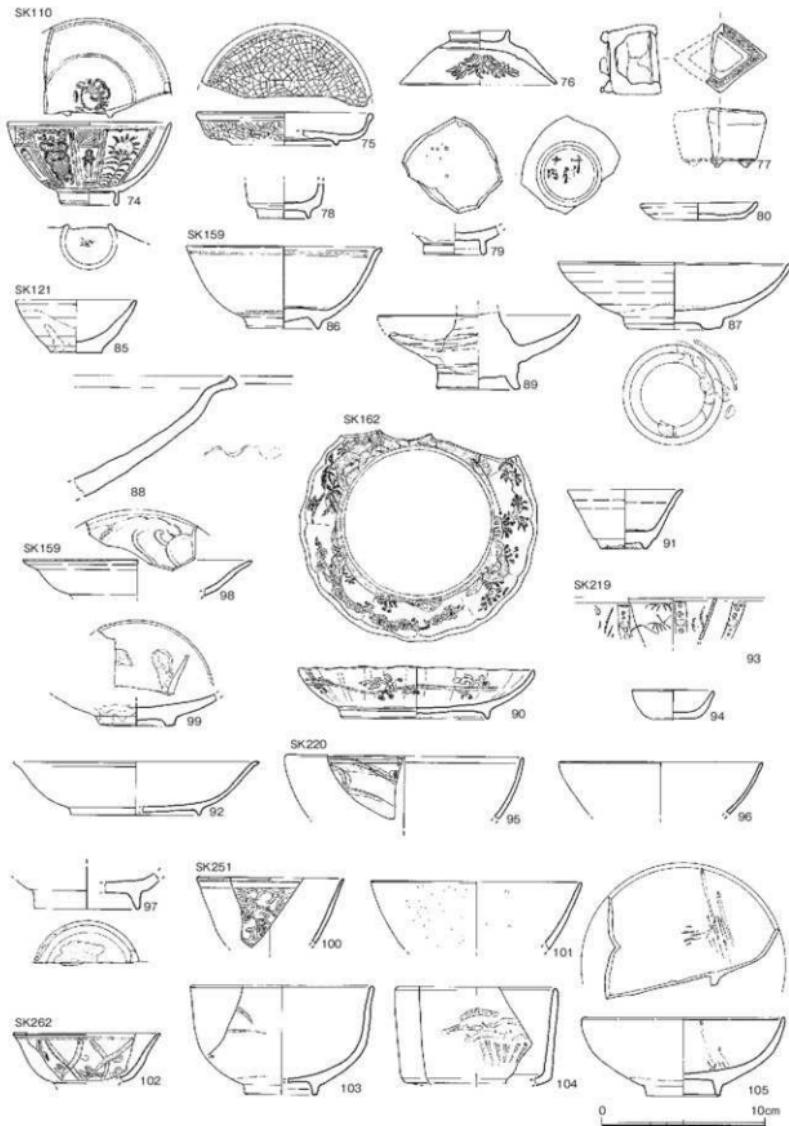
出土遺物 100は中国清代景德鎮の小碗。被熱している。101は肥前磁器碗。表面ピンホールが入っ



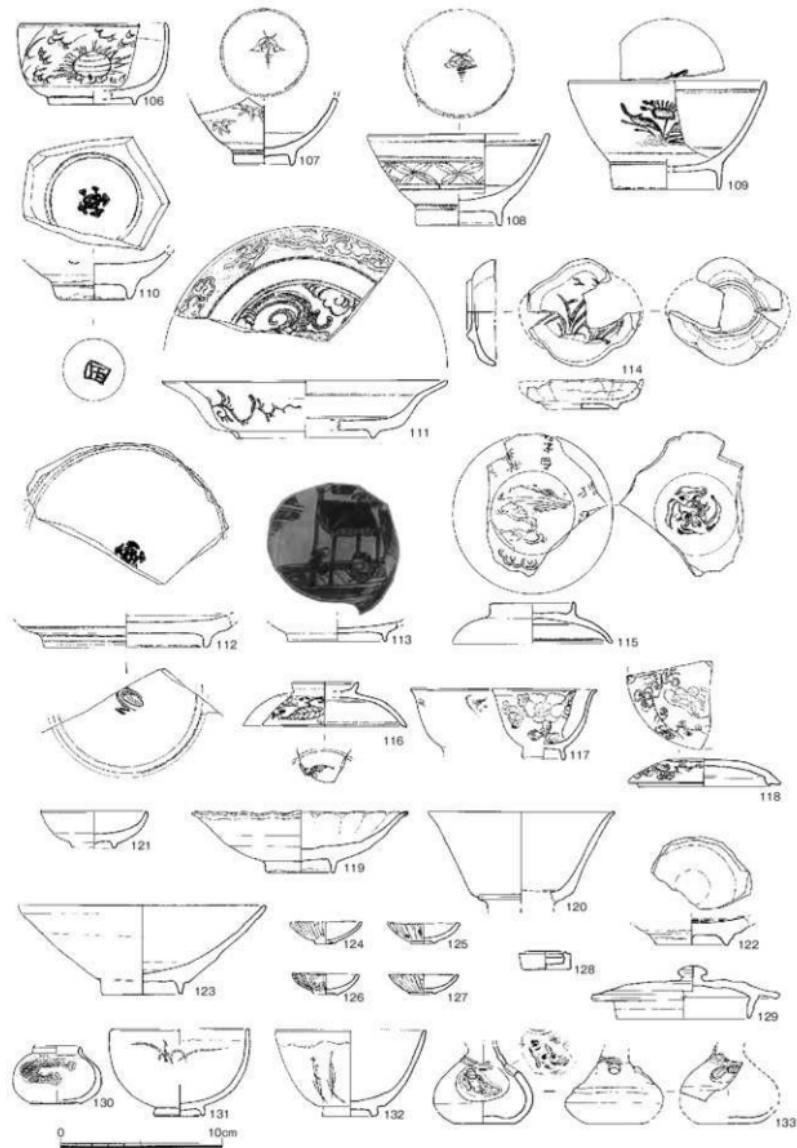
第16図 SK067出土遺物(1/3・38は1/4)



第17図 SK067・074・083・102・110・119出土遺物(1/3・51、52、72は1/4)



第18図 SK110・121・159・162・219・220・251・262出土遺物(1/3)



第19図 SK273出土遺物1(1/3)

た黄みがかった灰白色釉がかかる。

SK262 (第14・18図、図版7-(7))

調査区南側Ⅰ・Ⅲ区境で検出した土坑。平面形状が不整方形を呈す。規模は径1.35×1.85m、最大深さ1.05mを測る。埋土は黒褐色土で、瓦・礫を多く含む廃棄土坑である。18世紀の遺物を含む。

出土遺物 瓦・陶磁器・鉄製品などが出土。102～104は下層出土。102は肥前系染付小碗。103・104は陶器。103は肥前の碗か。104は京焼風筒碗。松原を描く。105は京焼風陶器の碗。

SK273 (第14・19・20、巻頭図版3・5、図版7-(8))

Ⅲ区南壁周辺で検出した楕円形を呈す土坑。北側でSK295を切り、南側はSK296に切られる。

規模は径1.75×2.45m、最大深0.9mを測る。埋土は主に黒褐色～黒色土で炭化物・焼土を含む。

出土遺物 近世陶磁器・瓦・鉄製品など18～19世紀中頃までの遺物を多数含む。106～128は磁器。106～116は染付。106は肥前の蓋付小鉢で文様は火炎宝珠。107～110は碗。107・108は肥前系で見込みに昆虫文が入る。109は肥前系の広東碗。110は肥前波佐見系の碗。見込み五弁花と高台内「福」字がある。111～113は皿。111は肥前長与窯のものか。型紙刷りで雲龍文か。112は肥前波佐見系。見込み五弁花、高台内渦福がある。113は肥前の皿。見込みは赤壁賦。114は肥前系の小鉢で型打成型する。焼成は不良。115・116は蓋。115は広東碗の蓋。外面雲文、内面如意雲文か。116は肥前系の蓋。117・118は色絵。117は小杯で中国清の景德鎮産の小杯。118は肥前有田の蓋。119～128は白磁。119は肥前有田の波縁皿。120は肥前の小碗。121は肥前の小杯。122は肥前波佐見系の皿片。123は肥前の碗。見込み蛇の目釉剥ぎ。124～127は白磁紅皿。肥前産で18～19世紀のもの。128は肥前野中島屋圓の薬合の身。129～134は陶器。129は蓋で南九州産か。口縁受端部に白化粧土を塗る。130はままと小壺。関西系陶器。131・132は関西系陶器碗。131は丸碗。133は備前の水差し。胴部に布袋様がある。134は肥前か福岡の油差し。135は土師器小皿。外底部糸切。136～139は瓦質土器で火鉢と破片。胴部外面にスタンプ文が入る。139の外面には線刻が入る。140は弥生時代中期の無形壺口縁片。

SK278 (第14・20図、巻頭図版5、図版8-(1)・(2))

SK273東側で検出した不整円形土坑。規模は径1.8×2.1m、最大深0.9mを測る。埋土は黒褐色土・黒灰色炭・灰混り土が主体。18～19世紀前半の遺物が出土。**出土遺物** 近世陶磁器・瓦・鉄製品などが出土。141～147は磁器。141は肥前系の染付碗。見込みに「壽」が入る。外面は蝶と草花。142は肥前有田の染付皿。高台内「成化年製」か。143は肥前系碗蓋。内面は昆虫文。144は肥前の碗。外面籠文。145は肥前染付小杯。146・147は肥前の紅皿。型打ち成形。148・149は陶器。148は福岡か熊本小代焼か。口縁部重ね焼き砂が付着。149は福岡高取系陶器擂鉢。外底部離れ砂付着。

SK288 (第20・36図、図版8-(3))

Ⅲ区砂丘面で検出した円形小土坑。規模は径0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は灰黄褐色から暗褐色粘土混り砂。内面に10～25cmの礫石があった。**出土遺物** 150・151は中国産白磁碗口縁片。150は端反の形態。築城期以前か

SK296 (第14・20図) SK273南側土坑。152は肥前系の白磁波縁皿。153は関西系陶器筒碗。

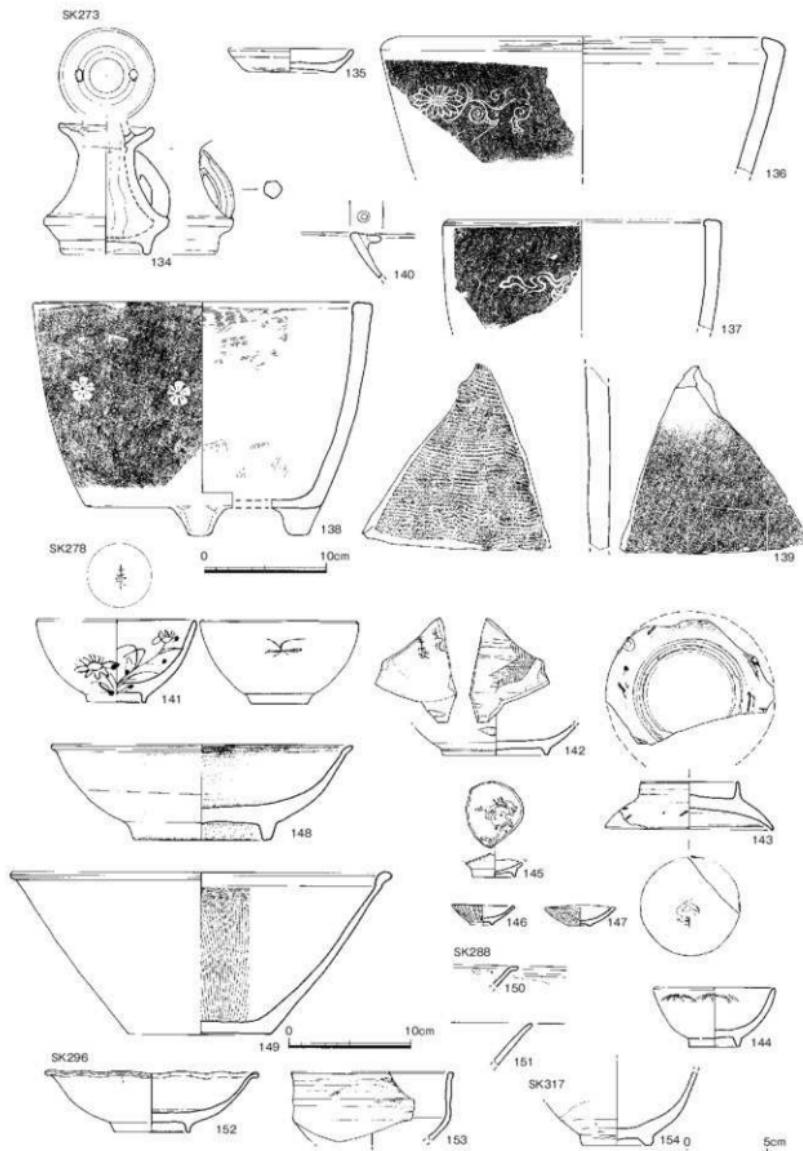
SK317 (第20・36図、図版8-(4))

Ⅲ区砂丘面で検出した不整円形小土坑。規模は径0.52×0.6m、深さ0.35mを測る。埋土は暗褐色砂質土で、内面に5～15cmの花崗岩・礫岩・砂岩の小割石があった。

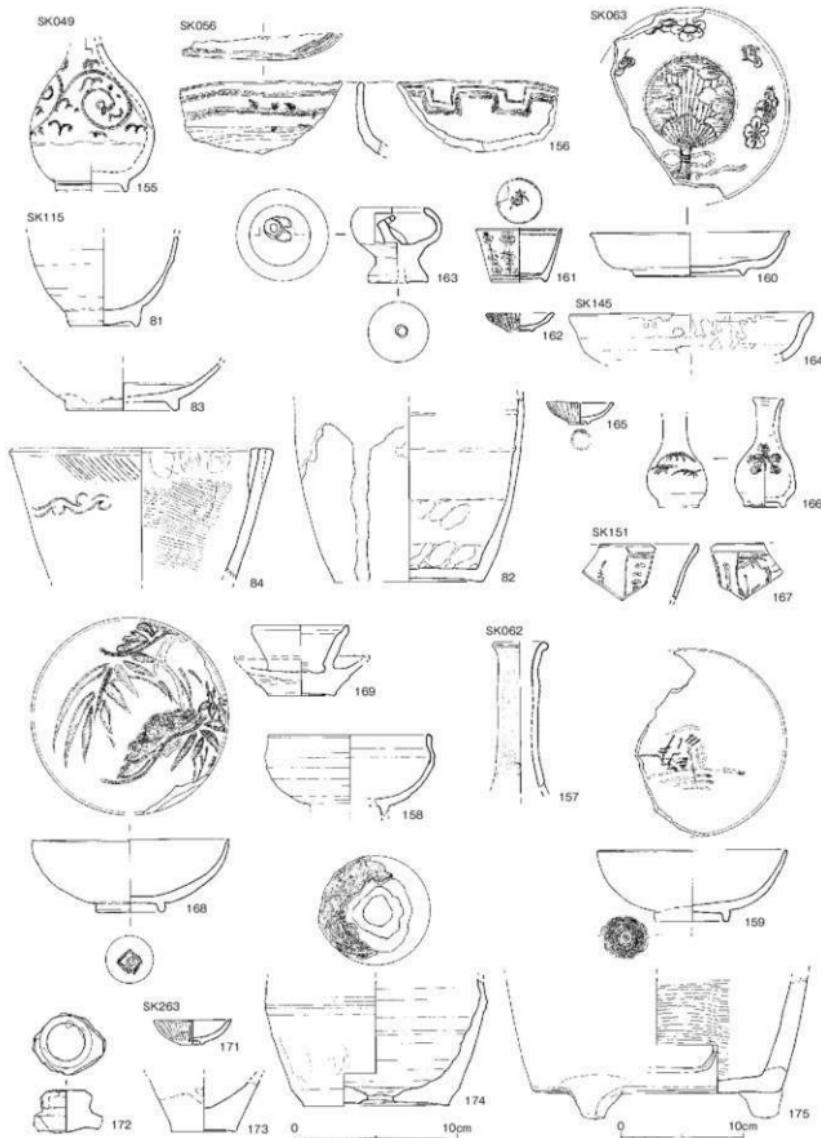
出土遺物 154は肥前陶器の碗。光沢を持つ黒褐色釉がかかる。

その他の土坑出土遺物 (第21・22図、巻頭図版3・5)

155はSK049出土の肥前染付瓶。156はSK056出土の美濃焼志野・織部の向付片。157～159はSK062



第20図 SK273出土遺物2、SK278・288・296・317出土遺物(1/3・136~138、149は1/4)

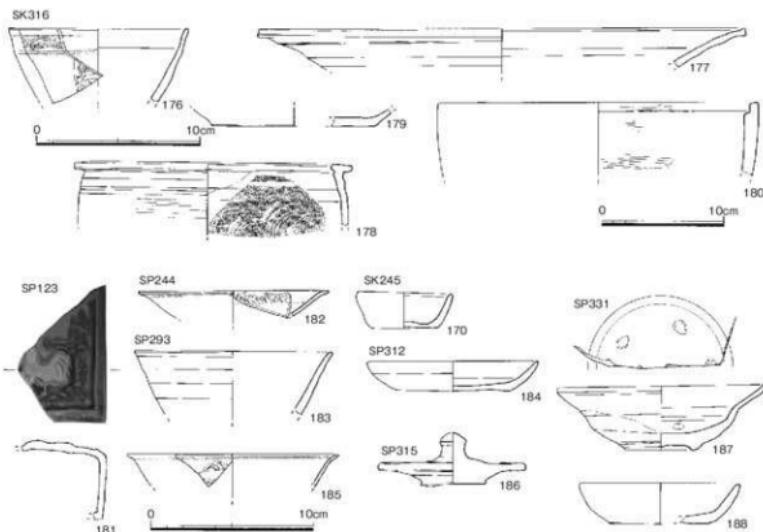


第21図 各土坑出土遺物(1/3・175は1/4)

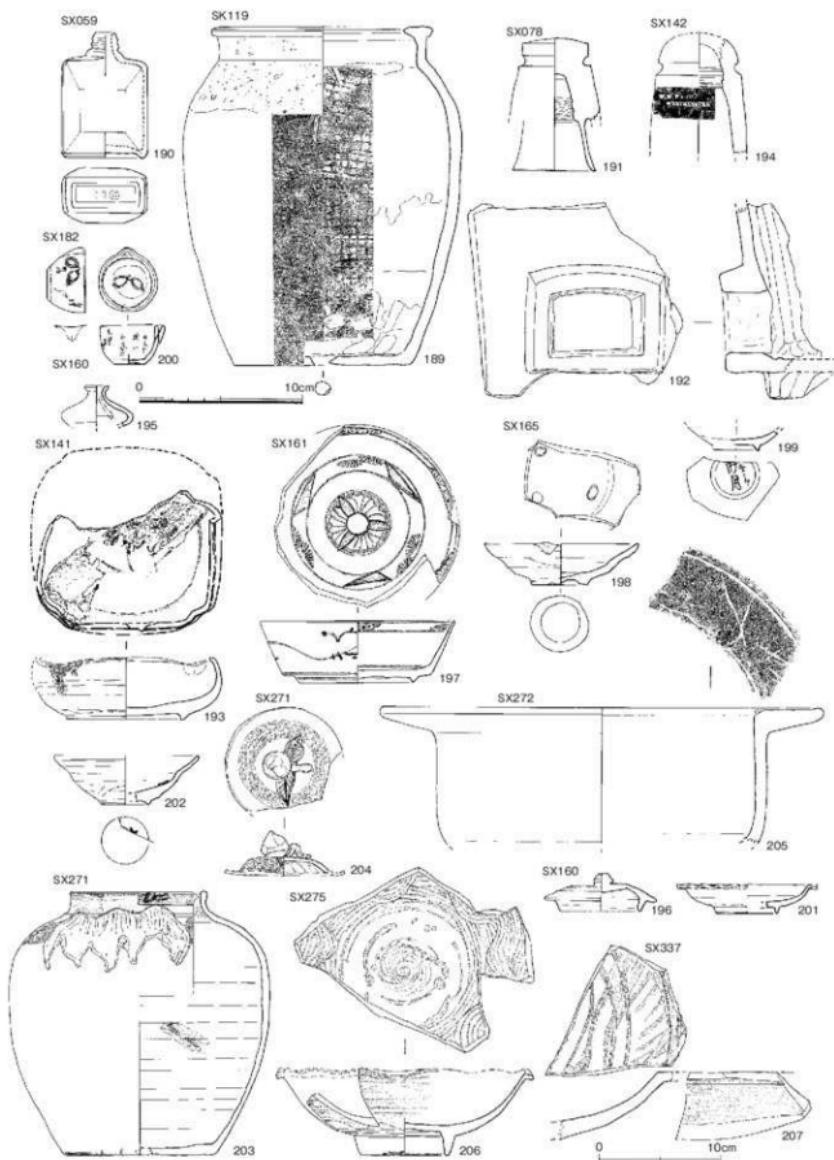
(撲乱土坑) 出土。157は肥前の刷毛目の瓶。158・159は肥前京焼風陶器碗。159の高台内に京焼系の丸印のスタンプがある。160~163はSK063出土。160は肥前色絵皿。見込の蛇の目釉剥ぎ上に絵を描く。161は肥前染付猪口。外面「寿」字文様。疊付釉搔き取り。162は肥前の白磁紅皿。163は福岡上野の灯火具のタンコロ。164~166はSK145出土。164は福岡高取系の皿。灰白色釉に暗褐色釉をにじませるよう垂れ掛ける。165は肥前の紅皿。166は肥前有田産と思われる小型の花瓶。167はSK151出土。中国明末景德鎮芙蓉手の碗か。表面は荒れ被熱している。168・169はSK222出土。168は肥前京焼風陶器碗。高台内の丸印を四角く黒く塗る。169は灯火具のヒヨウソク。170はSK245出土の完存の土師器小皿。171~174はSK263出土。171は肥前白磁紅皿。172は肥前武雄の緑釉陶器蓋の摘み。173は福岡高取焼の三官胎容器の底部。174は竹節形の陶器瓶で植木鉢に転用。福岡県産か小代焼きか。175は土師質土器火鉢底部。176~180はSK316出土。176は肥前の染付碗。177・178は陶器。177は鉢で福岡産。178は福岡産の壺か大皿の口縁。179は土師器皿底部。外底部回転糸切。180は土師質土器の鍋か、内面落し蓋受けの段が付く。

④ピット・撲乱土坑(SX)出土遺物(第22・23図、巻頭図版5、図版16)

以下は第1面ピット出土遺物。181はSP123出土の肥前有田の染付水滴。型押成形。182はSP244出土。中国明朝染付碗。183はSP293出土。萩の白磁碗か。184はSP312出土。土師器皿。口縁煤が付着。185はSP314出土。中国景德鎮の染付碗。186はSP324出土。肥前陶器の蓋。187・188はSP331出土。肥前陶器の皿。見込胎土目。188は土師器皿。外底部回転糸切。



第22図 SK245・316、各ピット出土遺物(1/3・180は1/4)



第23図 扰乱土坑出土遺物(190、195、200は1/3・その他は1/4)

190~206は明治以降の擾乱土坑出土遺物。190はSX059出土。瀬戸焼の白磁小瓶で高台に記号がある。191・192はSX078擾乱土坑出土。191は英國産碍子。192は土師質土器コンロ。下に焚口がある。193はSX141出土。江戸後期の瀬戸焼の向付。194はSX142出土。英國産碍子で「W.M.WARDEN, WESTMINSTAR」印がある。195・196はSX160擾乱出土。195は肥前白磁ミニチュア瓶。196は薩摩焼の陶器蓋。197はSX161擾乱出土。肥前の染付皿。蛇の目凹型高台。198・199はSX165擾乱出土肥前唐津の灰釉皿。見込胎土痕。199は陶器で関西系小碗。高台内墨書「□□御用」か。200はSX182擾乱土坑出土。染付小杯。肝油用。201はSX247出土。瀬戸の製皿。202はSX258出土。肥前陶器皿。203・204はSX271出土。203は福岡西皿山の壺。204は関西系の手捏の焼き縮め陶器蓋。205はSX272擾乱出土。瓦質土器の火鉢か。口縁部上面に刻字「景」がある。206はSX275擾乱出土。肥前陶器の刷毛目皿。207はSX337擾乱出土。肥前二彩唐津の大皿。

3. 第2面の調査

第2面は第1面10~20cm下の城下町造成面である。造成面は福岡城造成土の橙色岩風化粘土や地山の砂丘面などである。上面の擾乱・遺構で壊されたりした部分があったが、屋敷建物の礎石、井戸2基、地下倉庫、大型の不定形土坑、瓦廃棄遺構などを検出。また遺構面・各遺構から玉砂利が数多く出土しており、玉砂利敷きの場所があったと思われる。遺構の時期は17~18世紀頃である。

①井戸 (SE)

SE1071 (第24・25図、図版12-(4)・(5)・16)

II区北壁沿いで検出した瓦井戸。第1面の210は掘方、211は井筒である。郡役所図（第62図）にならない事から、郡役所建設前に埋められたのであろう。安全対策上完掘していないが、掘方は円形状を呈し、規模は東西幅約3.5m、深さは1.5m以上を測る。井筒は径0.56~0.6m、23×28cm、厚み3cmの井戸瓦7枚組の瓦井戸で、確認したのは1段で下に残る段数は不明。

出土遺物 掘方、井筒内から瓦・陶磁器片、金属製品など17~18世紀頃の遺物が出土。208~211は磁器。208は肥前有田の染付碗。高台内「大明年製」銘がある。209は肥前の白磁小杯。210は肥前青磁小碗。高台内鉄泥を塗る。211は肥前の燭台か人形など置物の一部。外面龍が張り付く。型作りであるが上物。212~216は陶器。212は福岡高取の褐釉碗。213は肥前か福岡の碗小片。214は福岡産刷毛目小碗。白化粧土の横刷毛目。215は肥前内野山皿。銅綠釉で蛇の目状釉焼き取り。216は上層SK210とした部分で出土。肥前武雄で焼かれた緑釉四耳壺の耳部分。217は土師器小皿。体部下半に穿孔がある。218・219は土師質土器の大盤か、外面刷毛目であるが、煤などの付着物がない。

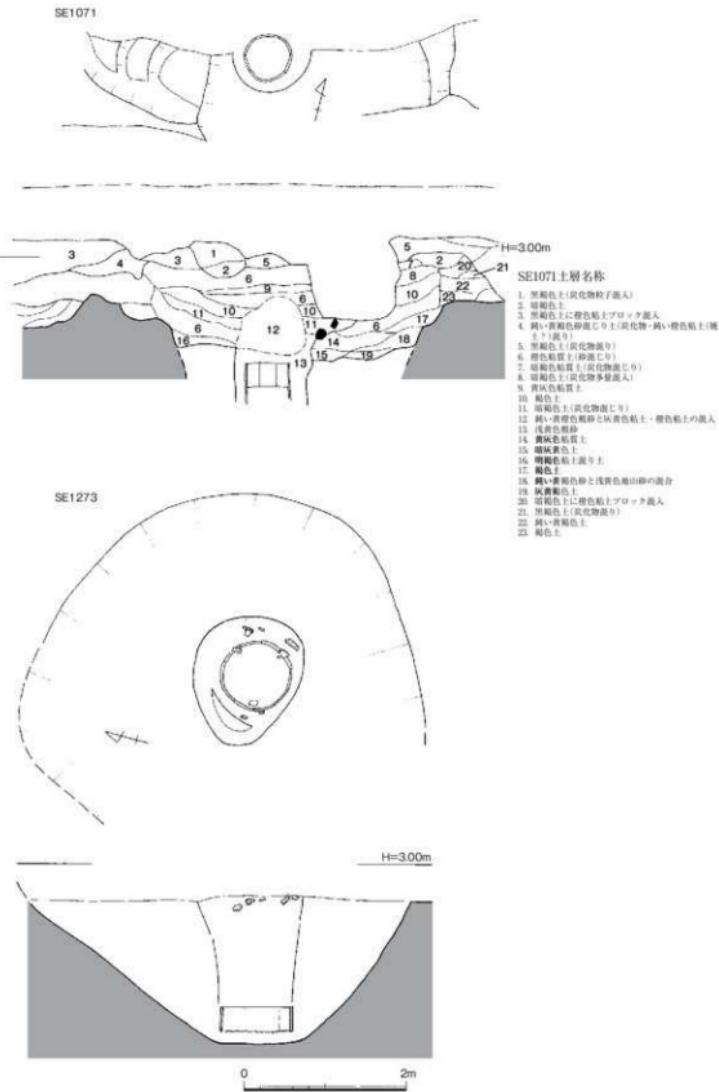
SE1273 (第24・25図、図版13-(1)~(3))

III区2面下で検出。建物礎石下で検出。上面で織部焼向付など17世紀初めの遺物が出土。井戸の埋立て儀礼の可能性がある。井筒の調査と掘方断面の確認のみであったが、掘方は不整円形と思われ、径は約4.8m、深さは1.6m以上を測る。埋土は黄褐色~明褐色粗砂・砂質土の混合土で、瓦・礫石などが入っていた。井筒は瓦組で、1段のみ残る。10枚の組合せで径0.85×0.9mを測る。瓦は幅24cm、長さ30cm、厚さ3.5cmを測る。井戸底には玉砂利が敷き詰められていた。

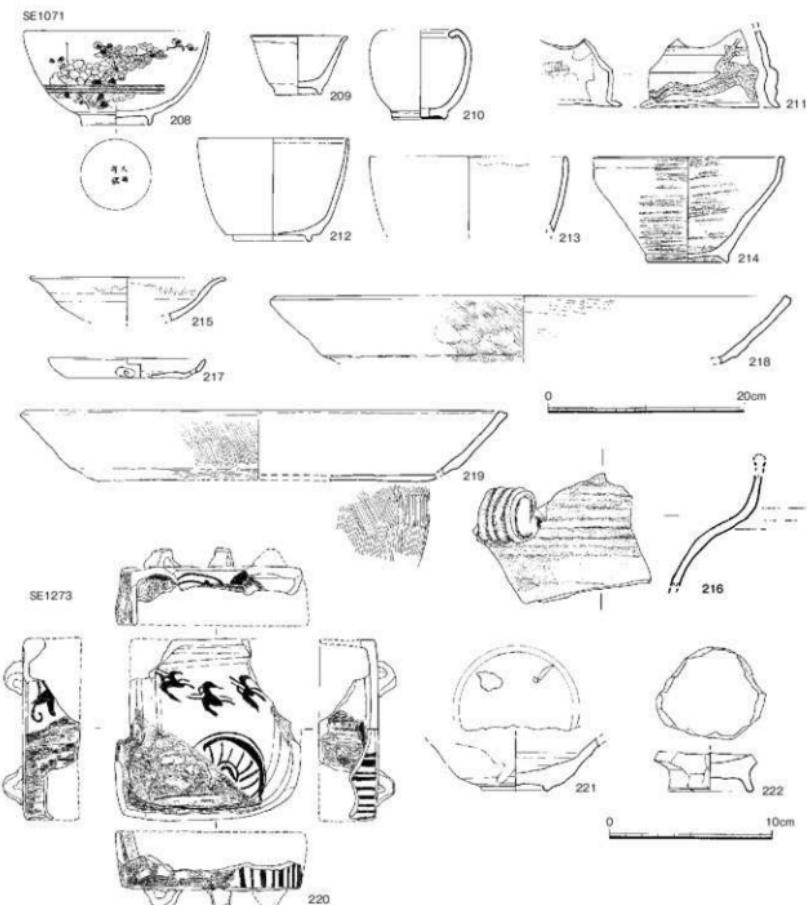
出土遺物 以下は上層出土遺物。これ以外に完存の焼塩壺2点、動物骨などがある。220は織部焼の向付。水鳥と水車など水辺風景を描く。同様の向付がSK1172で出土し、セットであったのかも知れない。221は肥前の灰釉皿。見込に胎土痕がある。222は福岡産陶器底部片。瓦玉かも知れない。

②土坑 (SK)

SK1001 (第26・30図、図版6、図版13-(6))



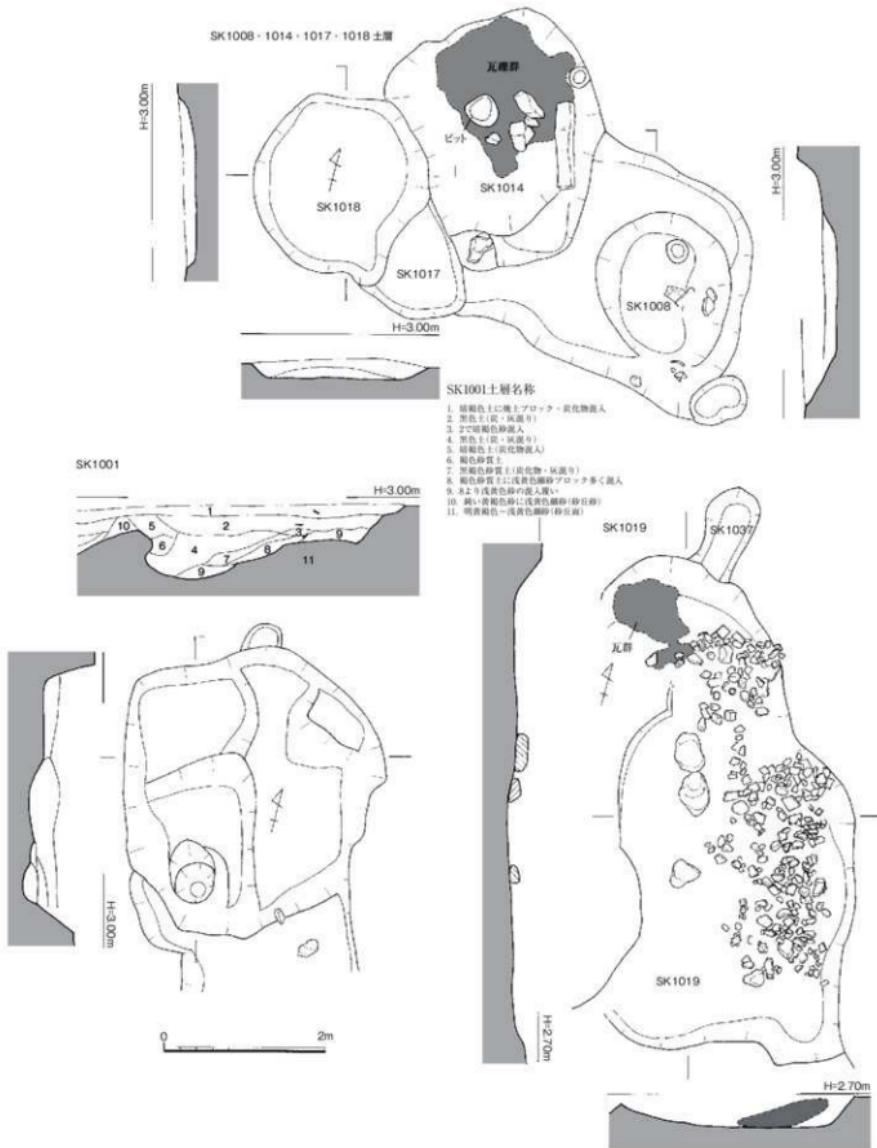
第24図 SE1071・1273(1/60)



第25図 SE1071・1273出土遺物(1/3・218、219は1/5)

I区で検出した隅丸方形状の土坑。第1面整地面を10cm程下げた面で検出した。規模は径3.2×3.55m、底面は段状を呈し、深さ0.5~0.9mを測る。埋土は黒色土が主体で炭・灰が混じる。18世紀までの遺物があり、郡役所以前に埋められたものであろう。

出土遺物 瓦や陶磁器などが出土。223・224は染付。223は肥前有田の蓋付小鉢。口縁部は無釉。224は肥前の陶胎染付碗。褐色釉と鉄絵の文様。225~228は陶器。225は肥前の線香立て。226は瀬戸窯の鉄漿壺。肩に耳が付き、内面鉄漿が付着している。227は陶器の小形壺か壺。外面カキ目で黒褐色釉が厚めに掛かる。外底部は露胎で丁寧なナデ。228は肥前陶器の二彩瓶。刷毛目風。229は土師器小皿。外底部は回転糸切で孔が開く。230は土師質土器の火舎か火鉢。外面丁寧なナデ調整。



第26図 SK1001・1014上層・1017~1019(1/60)

SK1003 (第29・30図)

I区東側で検出した平面不整円形の土坑。規模は径1.3m、深さ0.8mを測る。埋土は暗褐色砂質土。
出土遺物 231は肥前の京焼風陶器の碗。鉄絵で筆を描く。

SK1005 (第29・30図)

I・III区境で検出。SK1056と切り合う。不整円形状の土坑で、径2.1m、深さ1.4mを測る。暗褐色砂質土の下に固く締まった青灰色砂質土となる。

出土遺物 232は関西系陶器皿。見込み縁・黄・茶色で松を描く。233はSK1005・1006境の上層出土。瀬戸・美濃の折線皿。16世紀後半のもの。234は中国産の白磁皿。見込ヘラ切文がある。

SK1008 (第26・28・30・31図、巻頭図版3・6、図版13-(7)・(8))

I区中央SK西側で検出した不定形状の土坑。径2.7×3.5m、深30cm程と浅い。北側はSK1014に切られ、東側は15cm程深くなる。
出土遺物 瓦や近世陶磁器、鉄製品、寛永通宝などが出土した。235は肥前の白磁小杯。236は肥前波佐見系の染付中皿。見込コンニャク印判の五弁花。自身を帯びたアルミナを輪状に塗布している。高台離れ砂付着。237は肥前有田の色絵化粧小皿。山水風景を描く。238は肥前の白磁蓋。239は肥前の京焼風陶器の二彩碗。240は肥前唐津陶器の皿。見込砂目痕あり。17世紀初。241は福岡高取焼系の茶陶片か。被熱で釉は発泡している。242は中国宜興窯朱泥の散蓮華。薄く精緻な作り。243は肥前陶器の油差し。外面黒色の鉄釉がかかる。244は素焼きの灯火皿。型作りで、口縁に煤が付着する。245は古代の綠釉陶器把手片。

SK1014 (第26・28・31図、図版14-(1)・(2))

I区SK1008北西隅で検出した不定形の土坑。上部に大量の棧瓦などを含む廃棄瓦や食された貝殻

- SK1020土層名称**
1. 黒・赤褐色砂質土(炭化物・焼土ブロック混入)
 2. 黄褐色土(灰・灰多量混入)
 3. 開闢色砂
 4. 1.2.9.褐色土上プロック多く混入
 5. 褐色砂質土に青褐色砂質ロック混入
 6. 1.2.9.褐色土(灰多量混入)
 7. カーテン(褐色土)や軽灰
 8. 開闢色土(褐色土)プロック混入
 9. 黒・青褐色土に灰・青褐色砂質粒多く混入
 10. 黒褐色土(褐色土)プロック混入
 11. オーラー褐色土(柱状的の子細かい)
 12. 10.に混じる褐色粘土

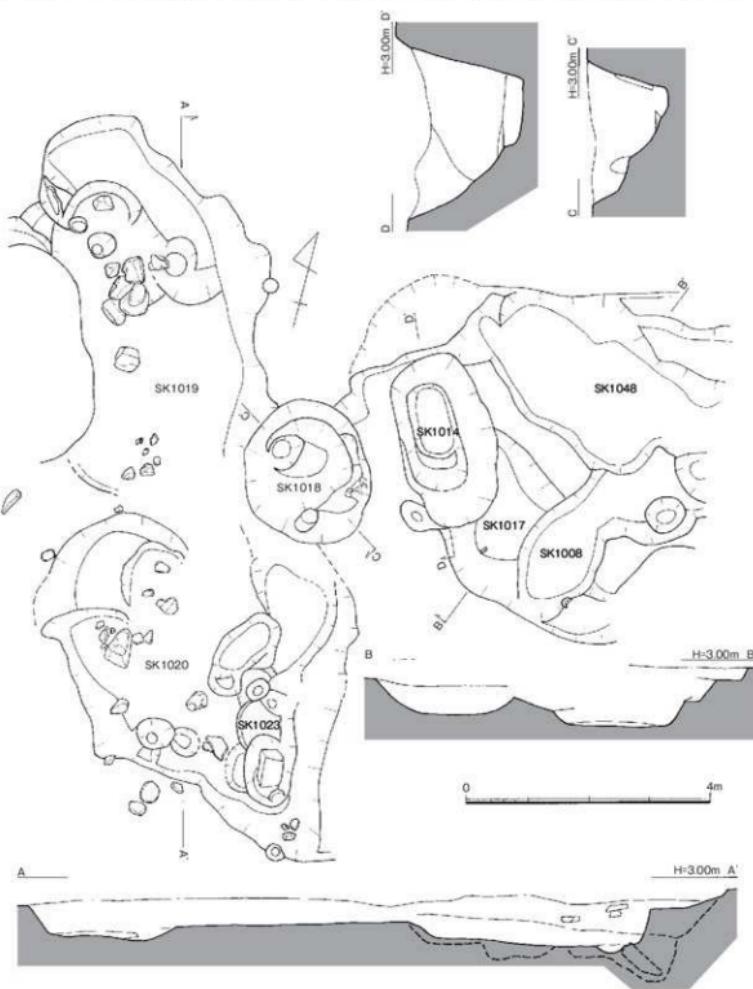
- SK1023上層名称**
1. 暗褐色土に焼土ブロック・炭化物混入
 2. 色色土(灰・灰多量混入)
 3. 開闢色土(褐色土)
 4. 開闢色砂
 5. 暗褐色砂土に淡褐色砂質ブロック多量混入
 6. 褐色砂質土(炭化物混り)で淡褐色砂の混入多い



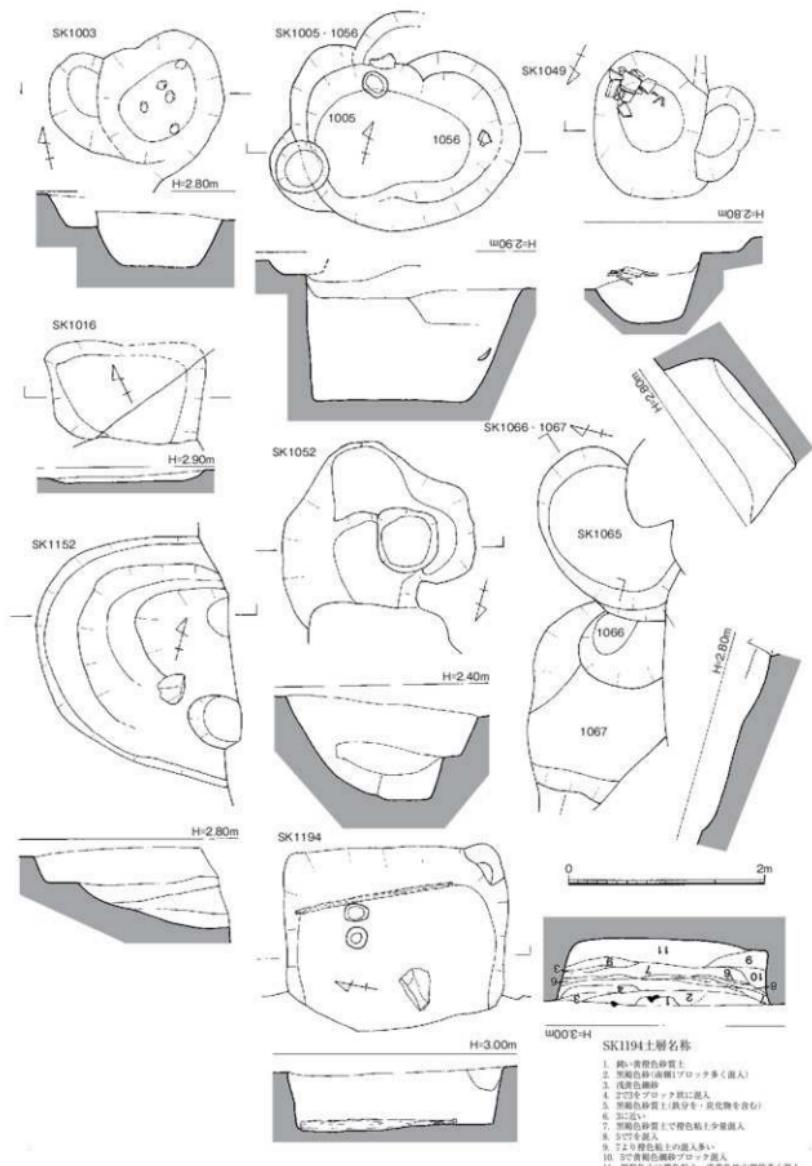
第27図 SK1020・1023(1/60)

などや瓦石、屋敷に使われていた石などが多数廃棄されており、それらを除去し掘下げると南側にスロープが付いた隅丸長方形状の形状を底面となる。規模は径2.25×3.0m、最大深さ1.3mを測る。埋土は黒褐色土系である。本来あった土坑状の遺構に生活残滓や不用品などを捨て埋め立てたものであろうか。

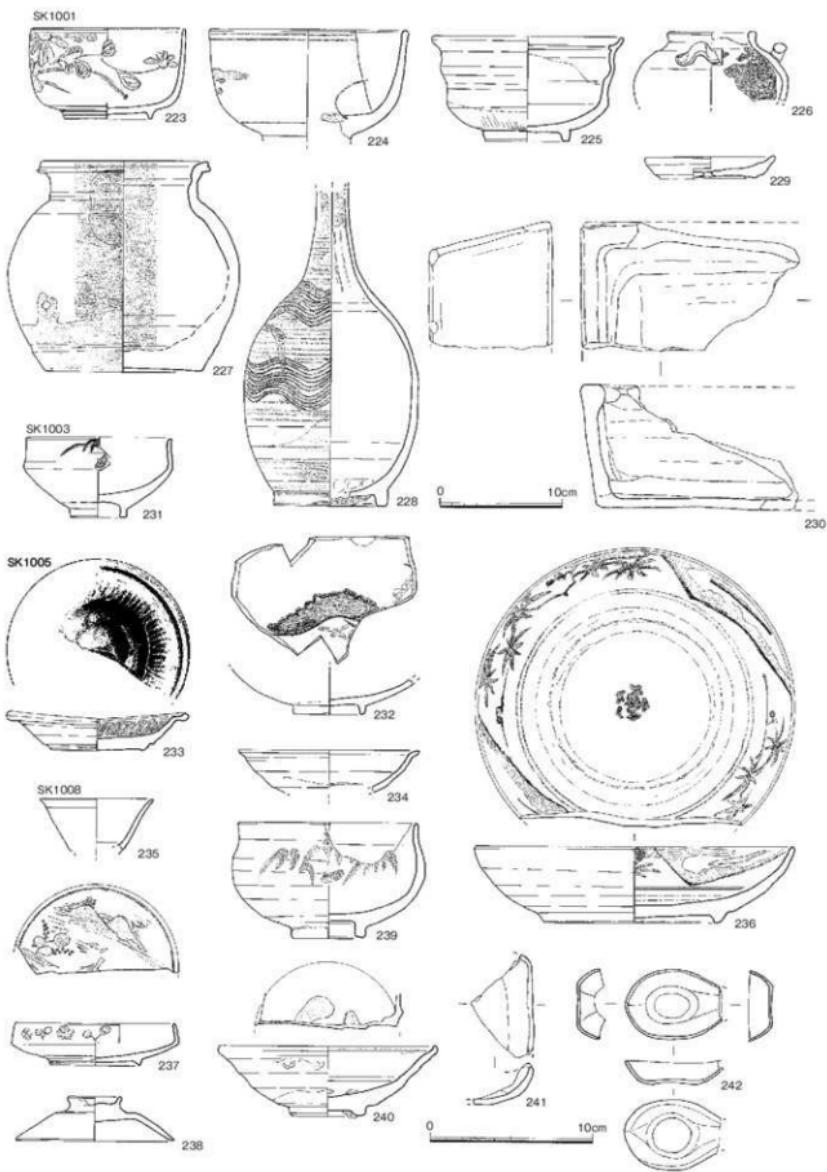
出土遺物 瓦礫群中より瓦他、多種のものが出土。17~18世紀の遺物があるが、主なものを示す。246~249は染付磁器。246は肥前染付小杯。247は肥前系磁器小杯か碗。外面黒い鉄絵文様を描



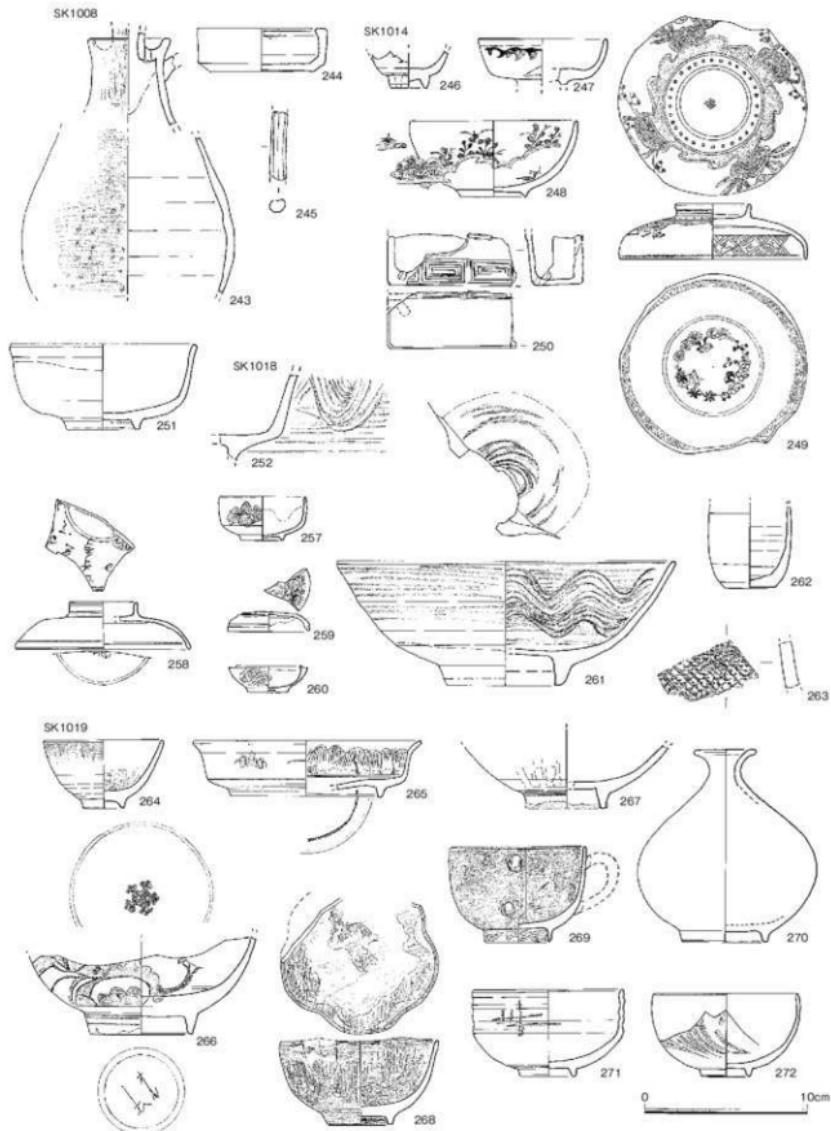
第28図 SK1008・1014・1017~1019・1020・1023・1048完掘(1/80)



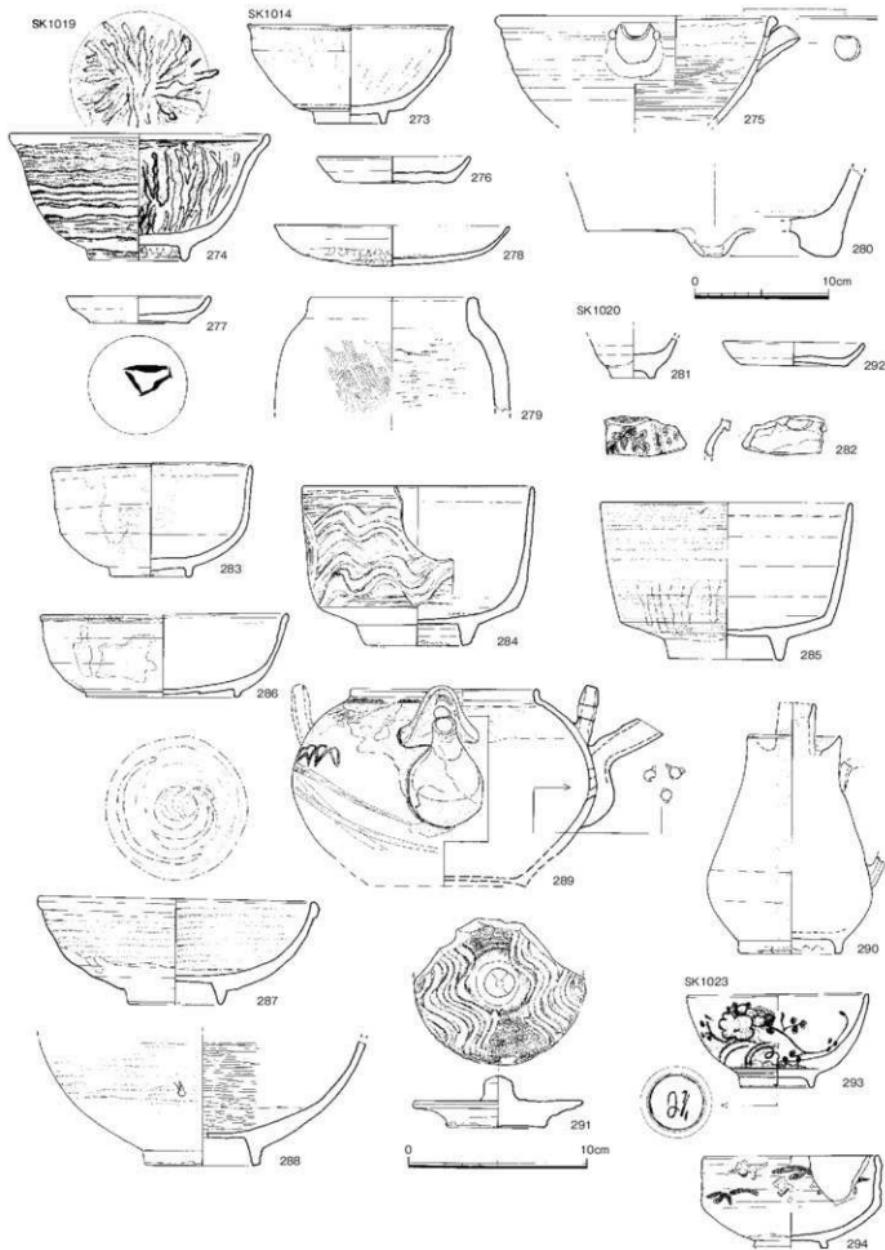
第29図 SK1003・1005・1016・1049・1052・1056・1066・1067・1152・1194(1/50)



第30図 SK1001・1003・1005・1008出土遺物(1/3・228、230は1/4)



第31図 SK1008・1014・1018・1019出土遺物(1/3)



第32図 SK1019・1020・1023出土遺物(1/3、280は1/4)

く。248は小碗。呉須で山水文を描く。高台は擦り。249は肥前有田の望料形碗の蓋。松竹梅と四方櫻の帶文を描く。250は肥前の水滴。型打ち成形で外面黄釉がかかる。文様は雷文。251は福岡高取の陶器茶碗。高台部は露胎。252は肥前陶器の刷毛目の蓋付鉢身の一部。

SK1016 (第29・33図、巻頭図版6)

I・II区境で検出した長方形状の土坑。規模は径1.0×1.55m、深さ10cmを測る。浅く削平を受けている。埋土は黒色から暗褐色土で、上部には瓦片が集積していた。

出土遺物 瓦片、近世陶磁器などが出土。18世紀前半頃の遺物がある。253は肥前有田の染付小碗。254は肥前の染付香炉。蛇の目高台で外面山水文を描く。口端部赤くなる。255・256は京焼乾山支流の角皿片。255の内面に「乾山」と書かれている。表面は風化している。

SK1018 (第26・28・31図、図版14-(3))

I区SK1014西側で検出した不整の六角形状の土坑。南東側はSK1017を切る。規模は径2.2×2.17m、最大深さ22cm程で浅い。埋土は黒色土で炭化物を多く含む。

出土遺物 近世陶磁器や瓦片、錢貨(寛永通宝)などが出土。17~18世紀の遺物がある。257は肥前有田染付小碗(杯)。外面コンニャク印判。258は肥前の染付蓋碗の蓋。外面に文字のような文様が描かれる。259・260は肥前有田の合子の蓋と身で型押し成型である。261・262は陶器。261は肥前陶器の刷毛目中皿。内面白化粧土で波状と横方向の刷毛文様を施す。262は福岡高取の茶入か。暗オリーブ褐色釉を施す。263は須恵器片。外面細かい格子目叩きを施す。

SK1019 (第26・28・31・32図、巻頭図版6・7、図版14-(4)・(5))

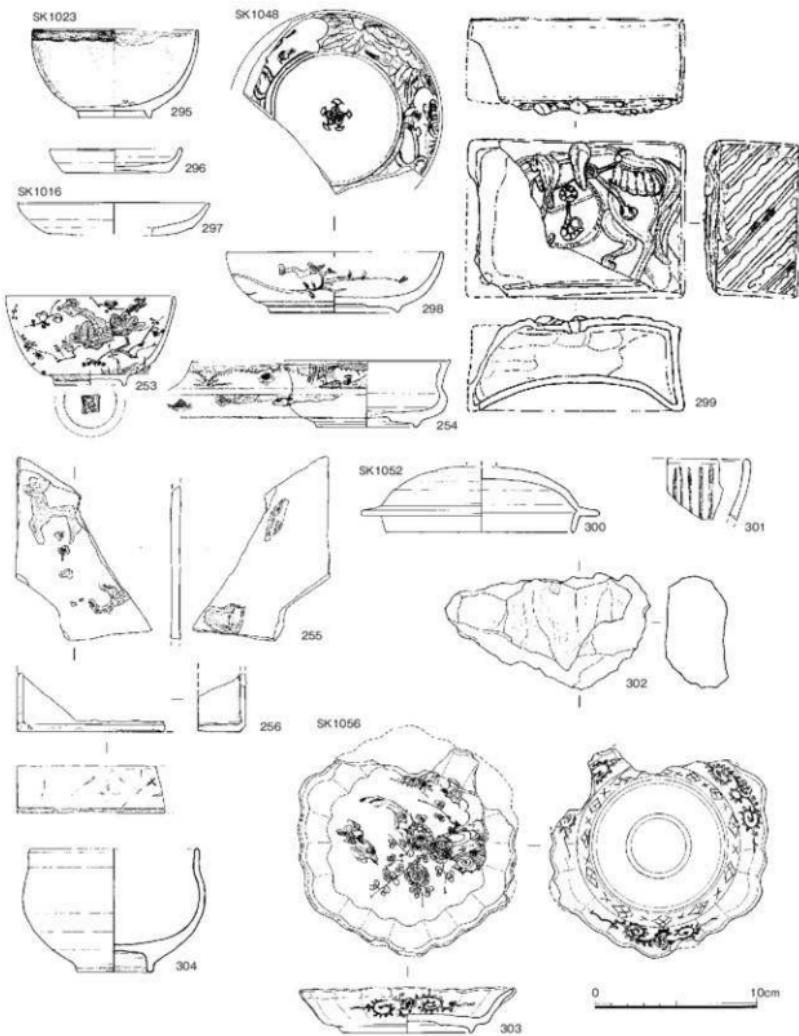
I区北側中央、SK1017・1018北西側で検出した不定形の大型土坑。長軸径6m、短軸幅2.9m、最大深さ0.4mを測る。埋土は炭化物を含む黒色土で、東側に瓦片が多量に廃棄されていた。瓦片を除去し完掘すると長さ0.5m程の大型の石が一列に並ぶように出土した。

出土遺物 近世陶磁器や瓦片、錢貨などが出土。18世紀代の遺物がある。264は肥前の陶胎染付の小碗。外面雨打文で内面赤褐色の付着物が付着。化粧の紅か。化粧道具と思われる。265は肥前有田の皿。外面帆船、内面柳文。266は肥前波佐見系の染付大碗。見込五弁花のコンニャク、高台内「大明年製」銘。267は青磁釉の碗。肥前産か。268~272は陶器。268は福岡産の花弁状を呈す小鉢。極暗褐色釉に黒色釉を上掛けする。269は福岡陶器の把手付小碗。黒色釉がかかる。270は肥前陶器の化粧用か油壺。高台疊付は露胎で砂粒付着。271・272は関西系陶器小碗。高台部は露胎。273は関西京焼系陶器。天目形の茶陶で、口縁部鉄釉を二度掛けする。274は肥前陶器刷毛目の鉢。275は肥前の片口鉢。灰黄色釉を二度掛けする。276~279は土師器。276・277は小皿。外底部回転糸切で、277の底部には三角形状の記号のような墨書がある。278は丸底形の皿。径13cmを測り、外底部はヘラケズリ。中世の可能性もある。279は壺。焼が良く内外面煤が付着。内面に煤が厚く付着し、炭壺か小型火鉢の可能性がある。280は土師質土器で七輪か焜炉の底部。外面はミガキ。

SK1020 (第27・28・32図、巻頭図版6、図版14-(6))

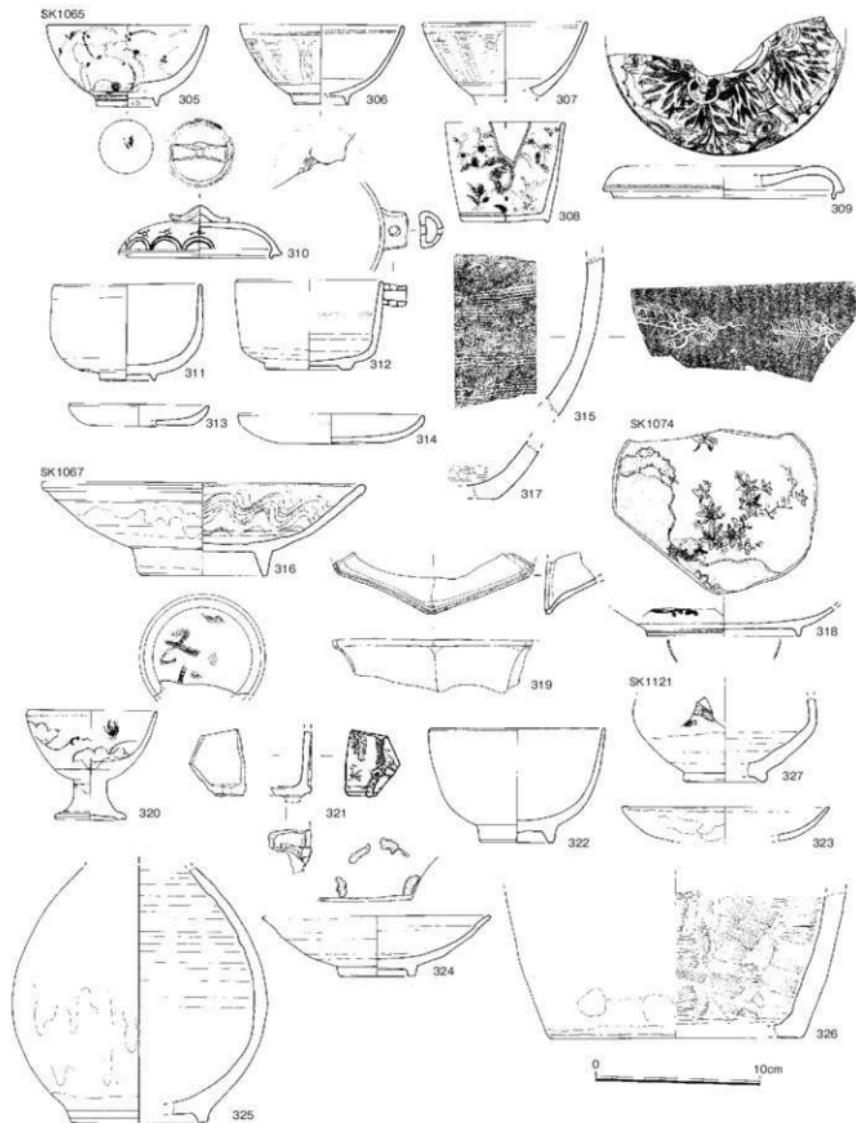
I区中央SK1018南側で検出した不定形土坑。南側はSK1023と切り合い、その不整円形状の土坑があり深くなる。規模は径4.8×5.6m、最大深0.9mを測る。底面は西側に一段深くなる。底面床面には最大径60cm程の割石・自然礫石などが床面直上で出土した。埋土は上面が鈍い赤褐色砂質土黒色砂質土で炭化物・灰・焼土ブロック混り、下層はやや暗い褐色砂が主体である。周辺の大型土坑と合わせて庭造構の可能性があるが、底に水漏れを防ぐための貼粘土などがない。断定は出来ない。

出土遺物 近世陶磁器や瓦片、錢貨などが出土。17~18世紀の遺物がある。281は肥前白磁の小杯。高台部はケズリ出し、露胎、疊付は擦り。282は肥前有田の色絵唐子人形の一部か。型押し成型である。



第33図 SK1016・1023・1048・1052・1056出土遺物(1/3)

283~289は陶器。283~285は碗。283は福岡の陶器碗。煎茶碗。黒色釉がかかる。284・285は肥前の
蓋付鉢の鉢。白化粧土による刷毛目。284は波状の刷毛目、285は横刷毛目である。286は福岡産陶器
の深皿。蛇の目高台で褐色の鉄泥を塗る。287・288は鉢。287・288は肥前の刷毛目鉢で、片口鉢か。



第34図 SK1065・1067・1074・1121出土遺物(1/3)

288がやや大型。289は肥前の黒・緑・茶色の三彩土瓶。290は肥前の油壺。黒色釉がかかる。291は肥前武雄あたりの陶器蓋壺の蓋。天井波状の粗い沈線。赤い胎土で黒色釉がかかる。292は土師器小皿。外底部回転糸切。

SK1023 (第27・28・32・33図)

I区SK1020南、SK1001東側で検出した土坑。規模は径1.6×3.05m、最大深0.5mで、底面は北側に深くなる。南西隅と北寄り中央にピットがある。埋土は黒色土から暗褐色土で灰炭化物を含む。

出土遺物 瓦・陶磁器などが出土。18世紀の遺物がある。293は肥前波佐見系染付碗。高台内に簡略化した「大明年製」銘がある。294は関西系陶器碗。見込みハマ痕がある。295は福岡産の陶器碗か。黒褐色の鉄釉がかかる。296・297は土師器皿。296は外底部回転糸切。297の外底部は回転ケズリ後ミガキ。296には口縁部煤が付着する。297は内底部が黒化する。いずれも灯明皿として使用か。

SK1048 (第28・33図、巻頭図版7)

I区SK1008北側SK1014で検出した不定形の大型土坑。規模は長径3.5m以上、深さ約1mを測る。東側はⅢ区にかかるが不明。埋土は黒灰色粘質砂質土で黄褐色砂ブロックを混入。

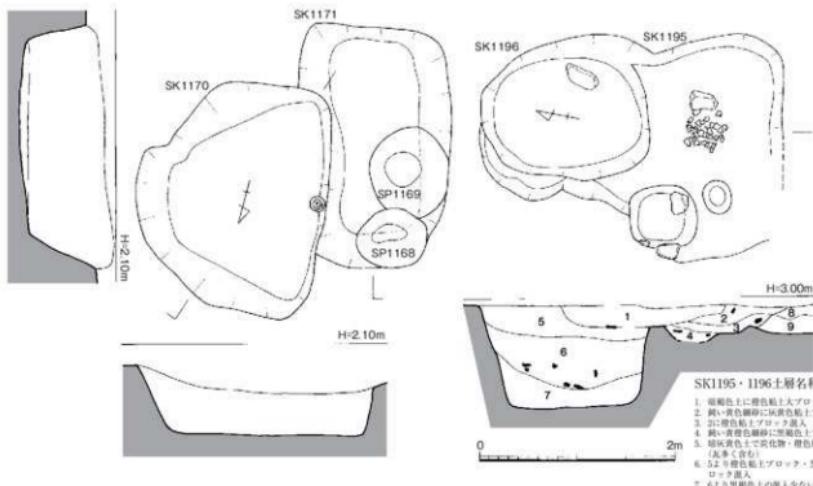
出土遺物 瓦・陶磁器などが出土。18世紀の遺物がある。298は肥前系の染付皿。蛇の目凹型高台で見込み五弁花。299は肥前有田の飾り馬の色絵水滴。型押し成型で、内面に布目痕がある。

SK1049 (第29図)

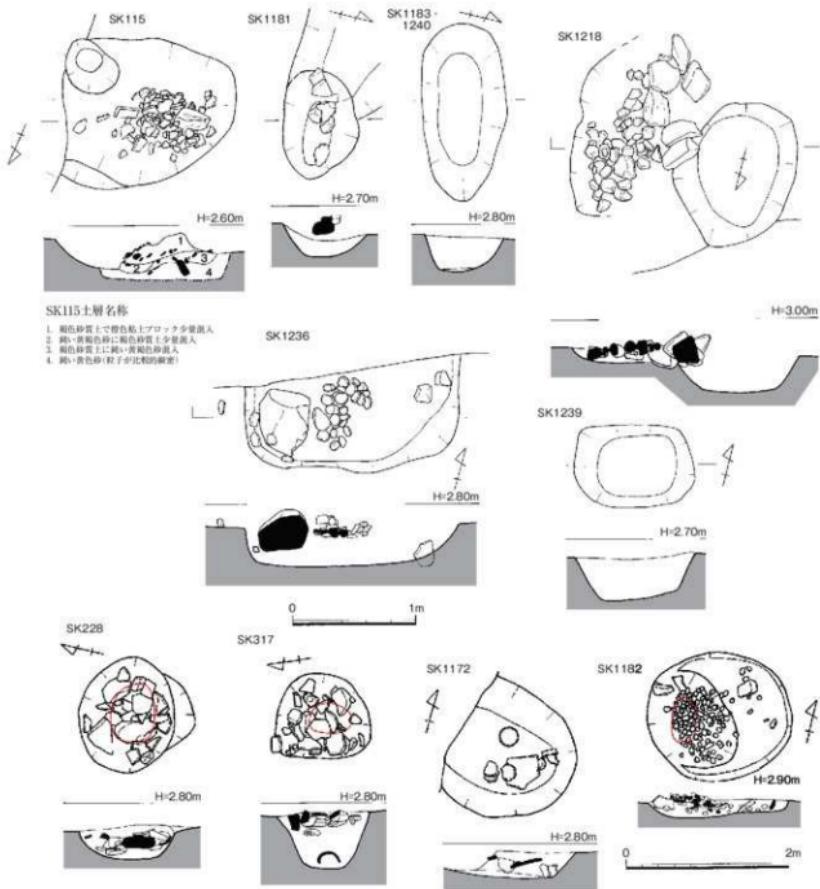
1面SD125内で検出した不整円形の土坑。規模は径1.35×1.55m、深さ0.7mを測る。埋土は黒褐色砂質土で、下層に地山砂を多く含む。瓦片が上層で出土するが、図示する遺物はない。

SK1052 (第29・33図、巻頭図版7)

I区中央SK110に切られる円形土坑。規模は径1.95×2m以上、最大深さ1.1mを測る。底面は段状に深くなる。埋土は暗褐色砂質土と黄褐色砂で炭化物を含む。 出土遺物 瓦・陶磁器などが出土。



第35図 SP1168・1169、SK1170・1171・1195・1196(1/50)



第36図 SK115・288・317・1172・1181~1183(1240)・1236・1239(1/30・1/40)

18世紀迄の遺物がある。300は肥前陶器壺の蓋。刷毛目である。摘みが取れている。301は中国明代の龍泉窯系青磁碗。退化した錦蓮弁。302は焼土塊。壁体か。刷毛目があり、黒化している。

SK1056 (第29・33図、図版14-(7))

SK1005と切り合う不整円形土坑。規模は径1.64m、深さ1.15mを測る。

出土遺物 303は肥前有田の染付皿。蛇の目凹型高台で、口縁褐色に縁どる。型打ち成形。304は福岡産陶器茶碗。黒褐色釉の施釉で、高台部重ね焼き粘土付着。

SK1065~1067 (第29・34図、巻頭図版7)

II区で検出した楕円形状の土坑。1065が1066・1067を切る。1065は1.15×1.8m、1066は1067東

側の円形状の土坑。長径1.97mを測る。深さは1065が0.5m、1066・1067が0.17~0.24mである。埋土は1065が暗オリーブ褐色土で炭化物混じりである。出土遺物 305~315はSK1065出土。18~19世紀初頃の遺物。305は肥前波佐見系小碗。外面雪の輪梅樹、高台は「大明年成」306・307は肥前の小広東碗。壽字文が全周する。308は肥前染付猪口。桜本文様。309・310は染付蓋。309は肥前有田か。310は肥前で文様は輪宝文の崩れ。化粧道具の蓋か。311は肥前系の白磁小丸碗。312は関西系陶器の手付碗。柄の装着部が付く。内面薄い圓線。313・314は土師器皿。313はほぼ完形の皿で内外面黒化する。315は瓦質土器火鉢片。外面スタンプ文がある。316・317はSK1067出土。316は肥前陶器の刷毛目皿。高台内に意味不明の墨書がある。317は土師質土器底部片。外面赤色顔料が残る。

SK1074 (第14・34図、巻頭図版7、図版14-(8))

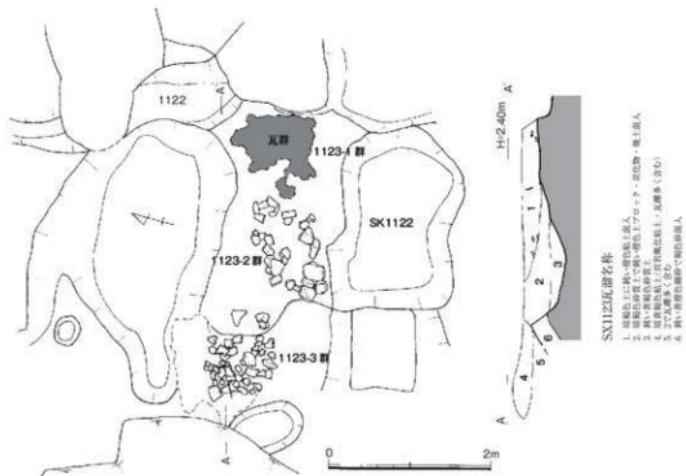
II区SK220下で検出した不整楕円形土坑。規模は径1.68×2.06m、最大深さは約1.2mを測る。南側が一段深くなる。埋土はオリーブ褐色砂で地山砂ブロック混入。礫石や陶磁器片が投込まれていた。

出土遺物 瓦や近世陶磁器、金属製品などが出土。18世紀前半頃までの遺物を含む。318は肥前有田の角皿。口唇部褐色釉で口紅状に塗る。319は肥前有田の染付皿。紅葉風景を描く。320は肥前染付の仏飯器。蓮と昆虫文か。321は色絵の柿右衛門様式の虫籠型香炉片。322は肥前内野山の陶器碗。灰オリーブ色釉がかかる。323は陶器銅緑釉皿。324は肥前陶器皿。見込砂目痕がある。325は福岡産の褐釉瓶か。326は瓦質土器火鉢内面細かい刷毛目、外面横刷毛目。

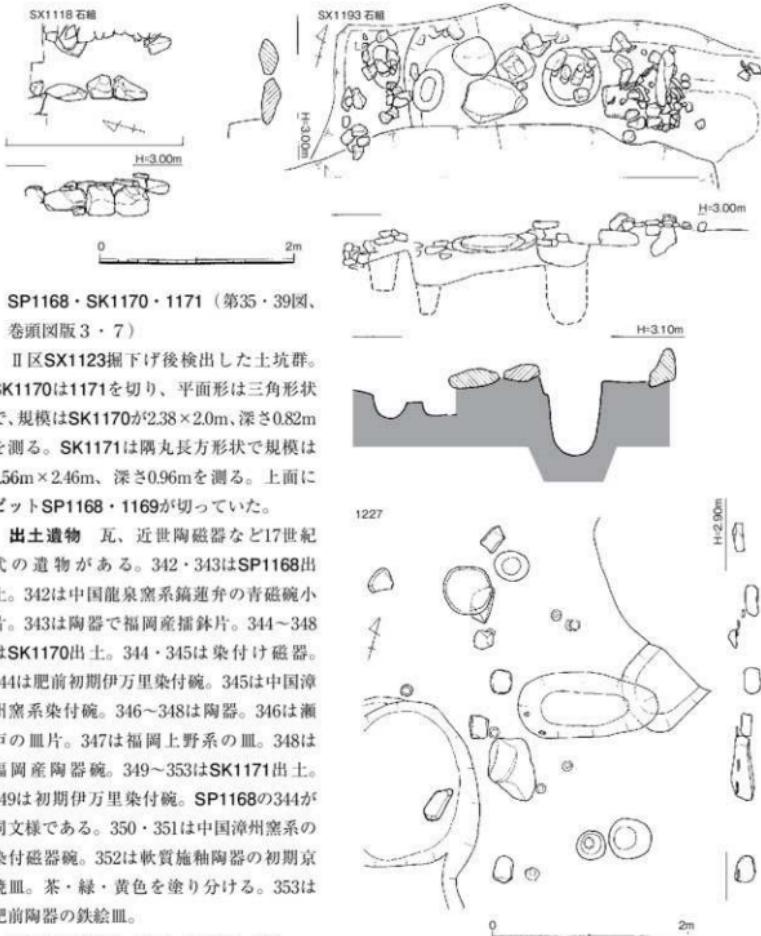
SK1152 (第29・39図、巻頭図版7)

II区の第2面整地面を掘下げた砂丘面で検出した円形土坑。東は大型擾乱に切られる。規模は径2.6m、深さ0.8mを測る。埋土は褐色砂で浅黄色砂を混入する。

出土遺物 近世陶磁器などが出土。354・355は水滴。肥前有田で型作り成形。内底布目痕が残り、底部との接合面が見える。354は上面左下隅に水の出し口孔がある。文様はボタンの花と虎か。



第37図 SX1123(1/60)



第38図 SX1118・1193・1227(1/40・1/50)

SK1172 (第36・40図、図版15-(2))

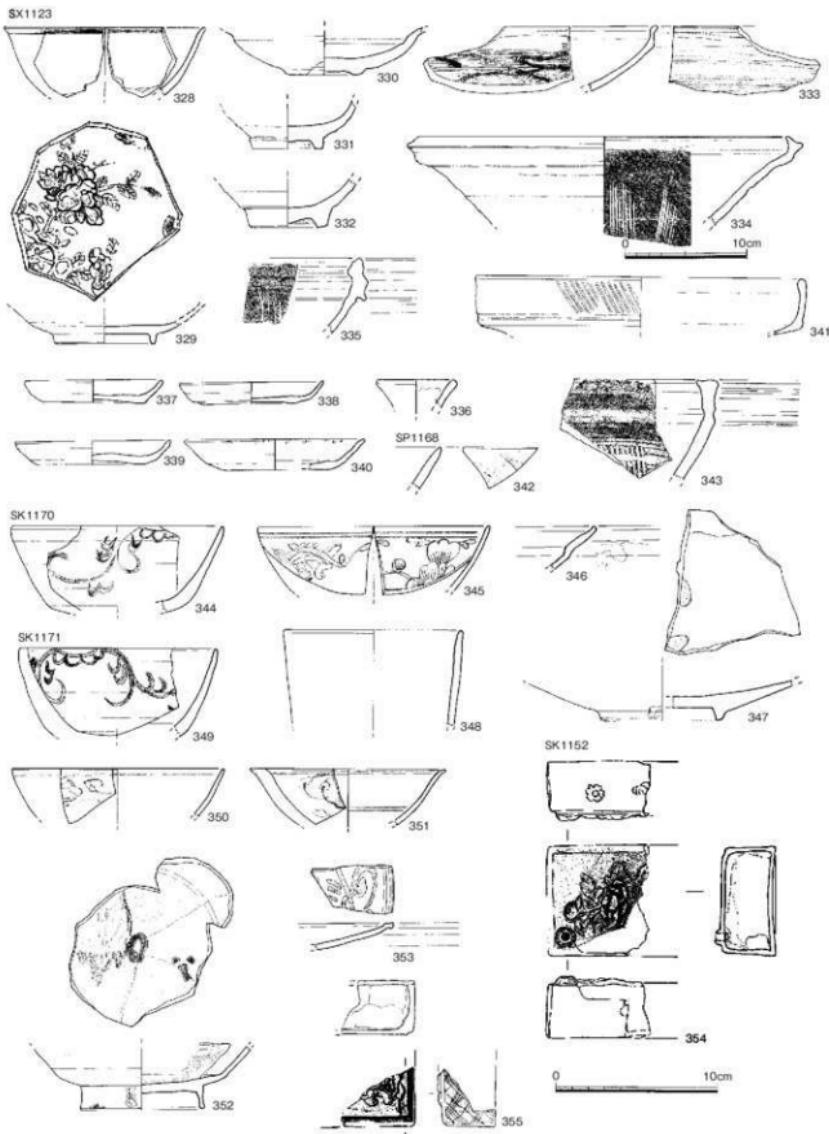
Ⅲ区擾乱307に切られる土坑。規模は0.73×0.80m、深さ0.15mを測る。埋土は炭化物。

焼土を含む灰色砂質粘土ブロックと褐色砂の混合。内部から瓦、肥前陶器、美濃の茶陶織部焼が出土。

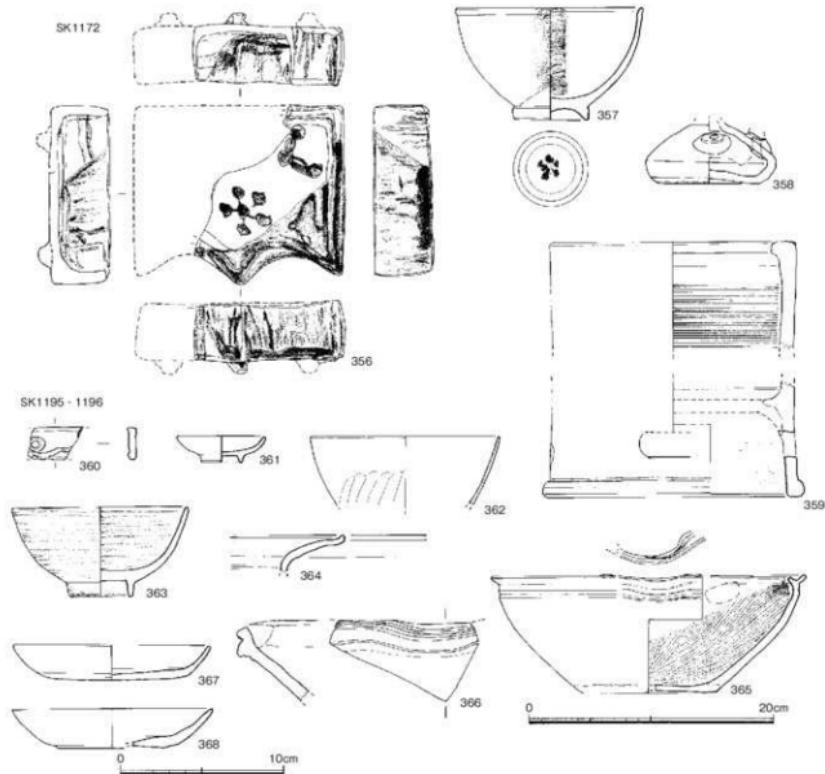
出土遺物 瓦や近世陶磁器が出土。17世紀の遺物出土。356は織部焼向付。型作りで布目痕が残る。水草を描く。357は肥前の銅緑釉碗。高台梅鉢状文の墨書がある。

SK1181 (第36・43図、図版7)

Ⅲ区で検出した楕円形状土坑。規模は径0.62×0.9m、深さ0.3mを測る。砂岩と玄武岩の礫石群が中に



第39図 SX1123、SP1168、SK1170・1171出土遺物(1/3・334は1/4)



第40図 SK1172・1195・1196出土遺物(1/3・365は1/4)

あった。 出土遺物 369は福岡産の灰釉碗。370は福岡上野焼の茶碗。いずれも17世紀。

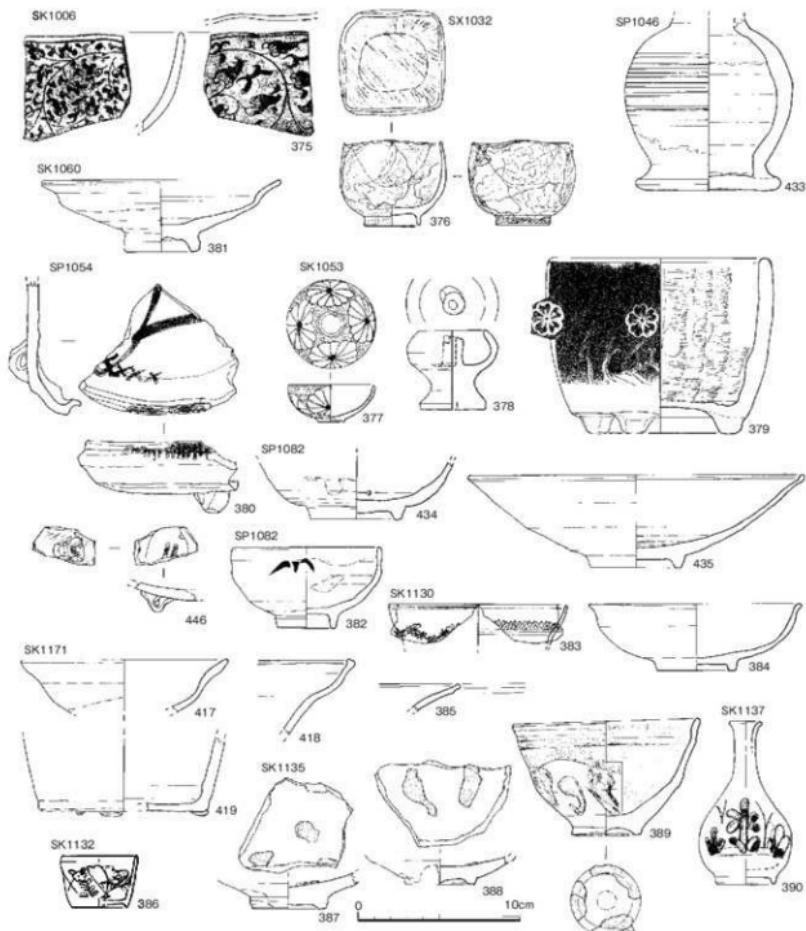
SK1194 (第29・40図)

Ⅲ区221に切られる長方形の土坑。規模は径 $2.3 \times 1.85 + a$ m、深さ0.68mを測る。埋土は黒褐色土が主体で砂や橙色ブロック、炭化物などを混入する。上層は水平に細かく堆積する。底面東側隅に板材が残っていた。地下倉庫か。 出土遺物 瓦や近世陶磁器、金属製品などが出土。358は福岡産の灰釉陶器水滴。底部回転糸切で無釉。359は土師質土器の七輪か焜炉か。内面粗い櫛目。

SK1195・1196 (第35・40図、図版15-(4))

Ⅲ区中央で検出した土坑。北側土坑を1195、南土坑を1196とする。1195が切る。1196の規模は径 1.5×1.75 m、深さ1.07mを測る。1196の埋土は暗灰黄色で橙色粘土、黒褐色土を混入する。

出土遺物 瓦や近世陶磁器、金属製品などが出土。17~18世紀前半の遺物がある。360はSK1195出土。福岡高取焼系の把手片。沈線文様がある。361~368はSK1196出土。361・362は白磁。361は



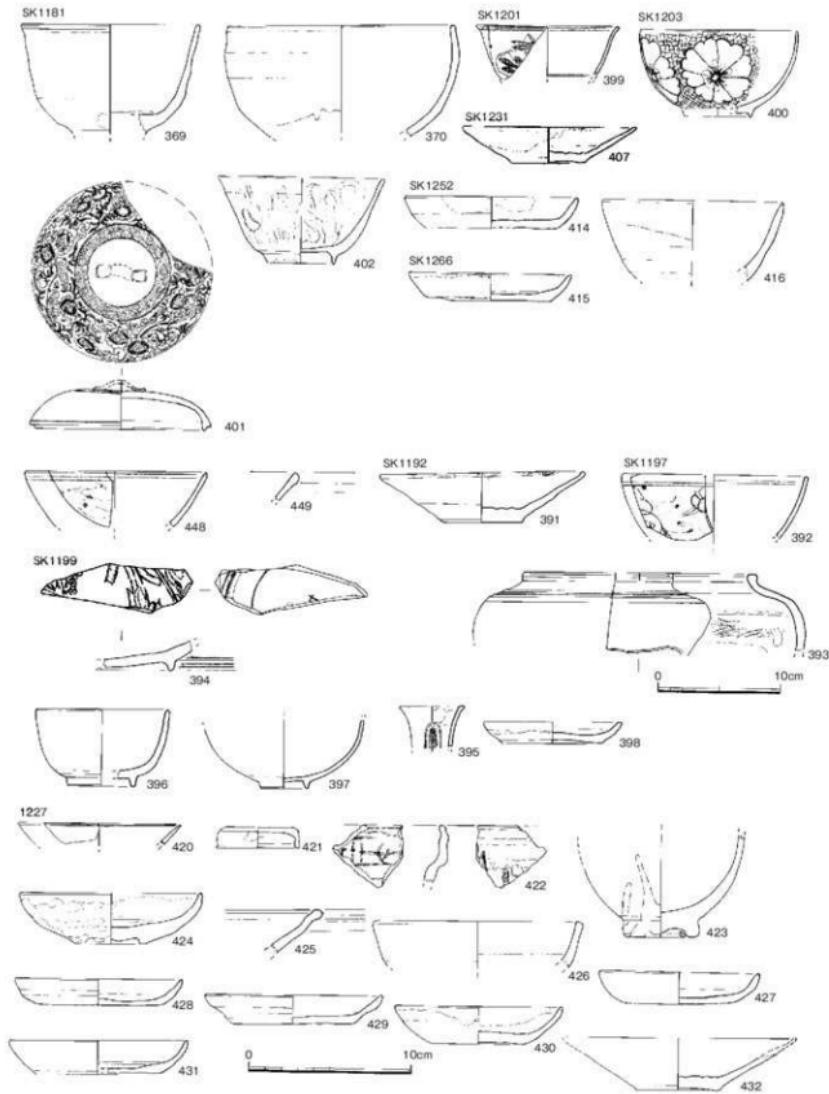
第41図 土坑・ビット出土遺物 I (1/3)

肥前ミニチュア小盃。完形品。362は肥前有田の碗。薄く精緻な作り。363～366は陶器。363は肥前の刷毛目碗。高台疊付砂粒付着。364は福岡産陶器藁灰釉陶器の口縁片。365・366は片口の擂鉢。365は福岡産。366は小石原か上野。367・368は土師器皿。口径12cm程で367は底部が黒い。

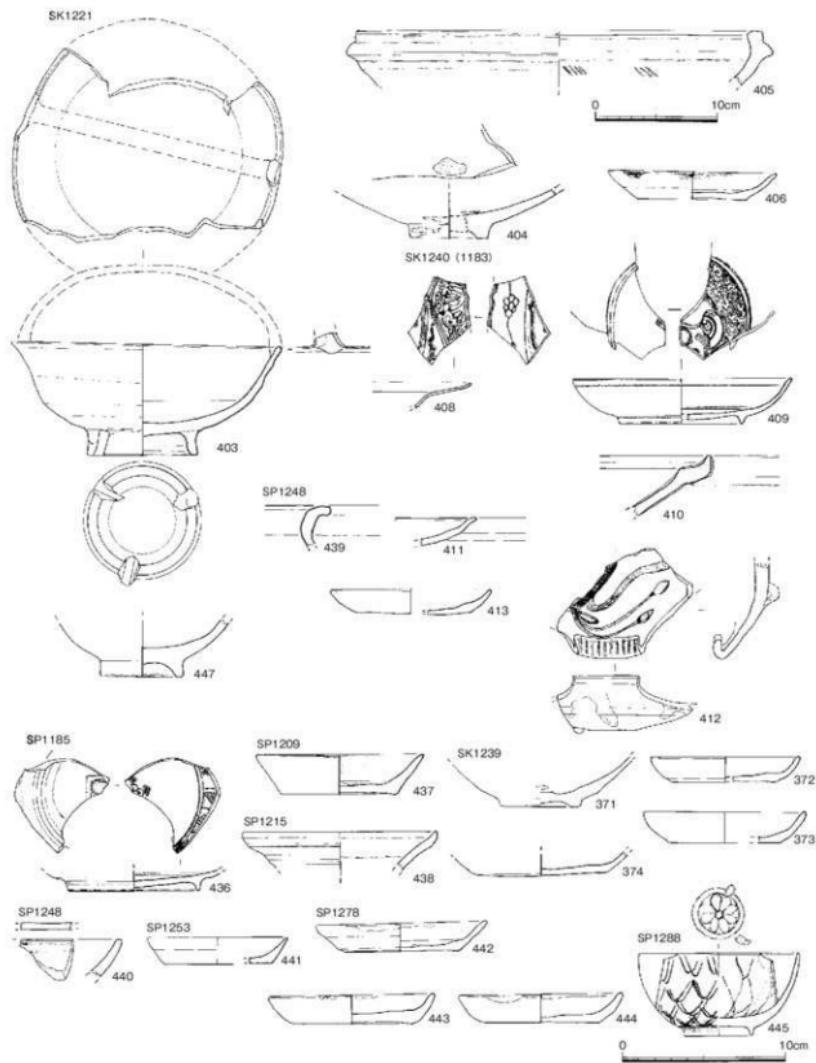
SK1239 (第36・42図)

Ⅲ区で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は径0.67×0.98、深さ0.3mを測る。埋土は褐灰色細砂に浅黄色細砂・炭化物多混入。

出土遺物 近世陶磁器や土師器が出土。371は16世紀末～17世紀初頭



第42図 土坑・ピット・1227土師器皿集中遺構出土遺物(1/3・1/4)

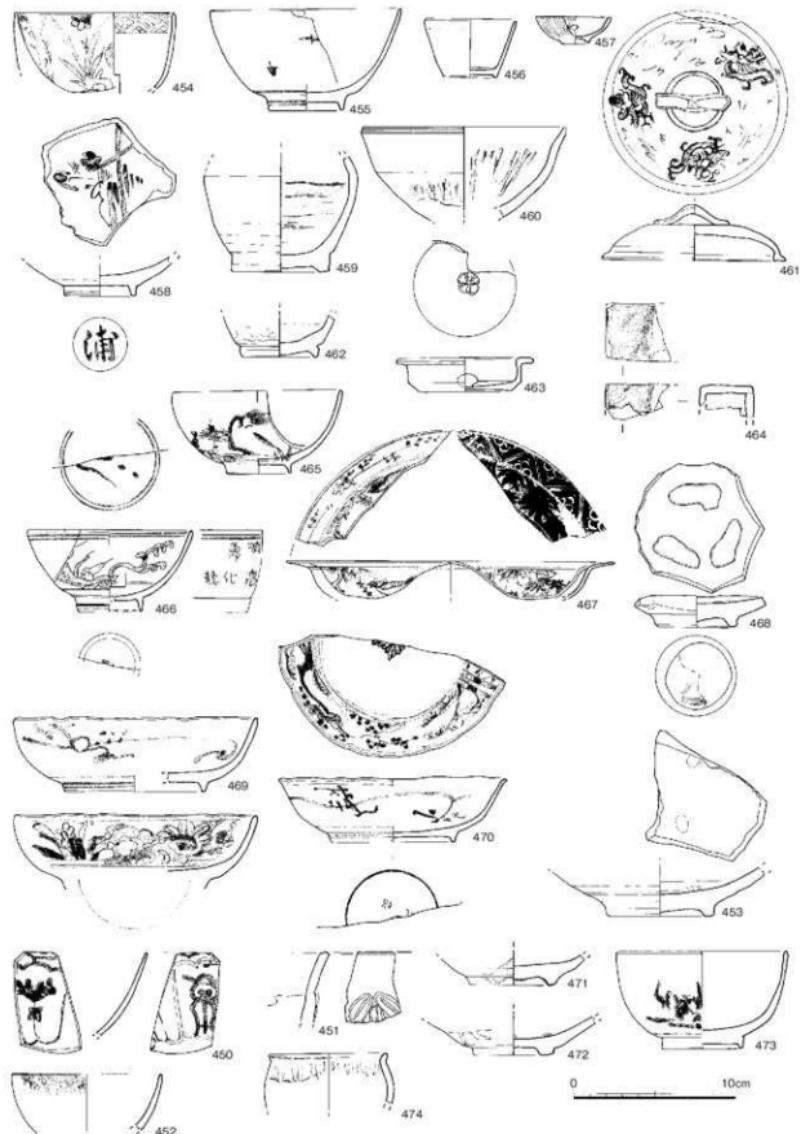


第43図 土坑・ピット出土遺物 II (1/3)

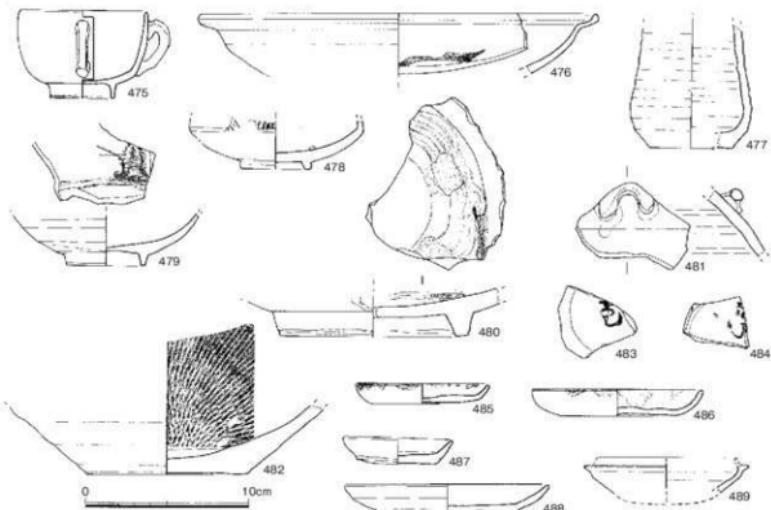
の肥前灰釉皿か。胎土目。372～374は土師器皿。外底部回転糸切離し。

SK1240 (1183) (第36・42図、図版15-(7))

Ⅲ区北側で検出した土坑。当初SK1183として掘ったが、周囲がまだ掘れることが分かり、掘り進



第44図 遺構面・整地面・攪乱出土遺物(1/3)



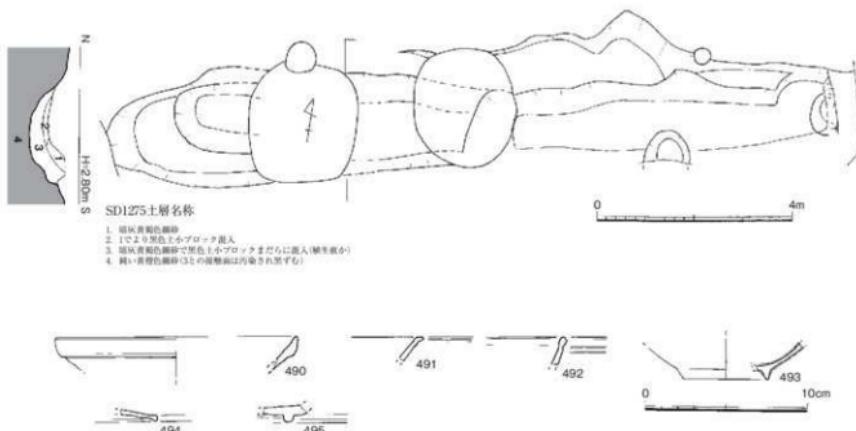
第45図 遺構掘下げ・清掃時出土遺物(1/3)

め規模が拡大したので、SK1240と番号を付けた。規模は径0.68×1.65m、深さ0.3mを測る。埋土は上層SK1183が黄褐色砂、下層SK1240は橙色・灰色粘土混合で炭化物を含む。

出土遺物 17世紀前半までの遺物がある。408~410は中国産磁器。408は景德鎮の色絵皿。精緻な作り。409は景德鎮の染付皿。見込玉取獅子か。410は景德鎮の青磁大皿。411・412は陶器。411は福岡産陶器灰釉皿。412は美濃の志野向付か鉢。413は土師器小皿。外底部回転。

その他土坑出土遺物（第34・41~43図、巻頭図版7、図版16）

375はSK1006出土。肥前染付大皿片。376は浅い落込み土坑SK1032出土。肥前現川焼の刷毛目の方形猪口。377~379はSK1053出土。377は肥前染付小杯。378は福岡産でタンコロ型灯火具。379は瓦質土器火鉢。380はSK1054出土。瀬戸・美濃焼の向付。381は土坑状落込みSK1060出土。福岡上野高取の陶器皿。382はSK1094出土。肥前京焼風陶器諸小碗。327はSK1121出土。肥前か福岡の鉄絵碗。高台部は露胎。383~385はSK1130出土。383は肥前有田の皿か小鉢。二次被熱している。384は肥前の白磁皿。385は福岡産陶器の皿口縁片。386はSK1132出土。肥前有田の色絵小猪口。387~389はSK1135出土。いずれも陶器。387・388は肥前の灰釉皿。387は胎土目。388は砂目痕。389は肥前の茶陶碗。外底はケズリ出しで、重ね焼粘土痕がある。390はSK1137出土。肥前染付の小瓶。神棚に供えたものか。391はSK1192出土。灯明皿として使用の土師器小皿。表面は荒れる。392・393はSK1197出土。392は中国漳州窯の染付碗。393は福岡産褐釉風炉片。茶陶。394~398はSK1199出土。394は肥前有田の色絵磁器皿。395は肥前有田の染付瓶口縁片。396・397は陶器碗。396は福岡産の小碗。397は関西系陶器。398は灯明皿として使用の土師器小皿。399はSK1201出土。中国景德鎮染付小碗。400~402はSK1203出土。400は肥前染付碗。401は肥前有田の染付の蓋。402は肥前刷毛目の中碗。403~406はSK1221出土。403~405は陶器。403は福岡内ヶ磯窯の吊手鉢。割高台で船軸施釉であるが荒れ白くなる。404は肥前の灰釉皿。見込に砂目痕がある。405は福岡産の播鉢。406は土師器灯明



第46図 第3面SD1275と出土遺物(1/100・1/3)

皿。口縁部内外面煤が付着し黒い。407はSK1231出土。土師器灯明皿。内外面赤黒く焼ける。414はSK1252出土。灯明皿として使用の土師器小皿。415はSK1266出土。灯明皿として使用の土師器小皿。416はSK1267出土。

集石土坑SK1182・1218・1236（第36図、図版15-(6)）

主にⅢ区で検出。SK1182は浅い円形土坑。径0.76×0.87m、深さ約0.1mを測る。内に綺麗な玉砂利が敷き詰められていた。埋土は縮まりのある褐色砂。SK1218は径1.2m程で10~30cm程の小礫が纏まっていた。SK1236は長径0.88m、深さ0.16mを測る。径25cm程の石の周りに白から黒色の玉石が纏まっていた。各遺構から出土した遺物は余りなかった。

③その他の遺構（SX）

SX1123瓦溜り（第37・39図、図版15-(1)）

Ⅱ区西壁沿いで検出。不定形の瓦廃棄土坑。規模は長径約4.2mを測る。埋土は暗褐色土～砂質土で炭化物・焼土混入で下部に瓦片が多量に廃棄されていた。瓦は大きく3群に分かれる。

出土遺物 瓦、陶磁器、土師器、金属製品、石製品などで、17世紀代の遺物がある。328は中国漳州窯系染付碗。鈍い光沢の灰白色釉がかかる。329は中国景德鎮の色絵皿。見込は太湖石に草花。330~336は陶器。330・331は肥前陶器。330は灰釉皿。331は碗底部。332は碗底部。333は肥前の二彩大皿。334・335は擂鉢。334は肥前、335は福岡産か。336は福岡産瓶口縁部。337~340は土師器皿。339・340は煤が付着し灯火皿である。341は土師器外耳鍋。外面粗い刷毛目。内面はナデ。

SX1211瓦溜り（図版15-(5)）

SD1275上面で検出した瓦集中遺構。瓦と共にC53祥符通宝が1枚出土している。

SX1118石組（第38図、図版13-(4)）

Ⅱ区東隅で検出した石列。確認規模は1.5m程で、一段分径30~40cm程の礫石を積んでいる。建物などの基礎か。遺構出土の遺物ではないが石列西側前面1117で出土した遺物を紹介する。417~419は福岡産陶器。417は皿。418は口縁部。いずれも表面風化が進む。419は瓶か壺の底部。焼成時粘

土付着。

SX1193石組 (第38図、図版13-(5))

Ⅲ区北壁近くで検出した礎群。南側は大型擾乱SX221で壊される。確認規模は東西長約4mを測る。中央に長さ0.5~0.7mの大振りの石を置き、その両側にピットが各1基と最大20cm位の大きさの割石・転石が集中している。東側には炭化物が集中する部分がある。石は玄武岩や安山岩などの火成岩が多い。出土遺物は図示しうるものはなかった。

1227土師器皿集中遺構 (第38・43図、図版13-(5))

Ⅲ区北東、礎石集中部に灰・炭化物・焼土が集中する部分(特にSK1240周辺)に、完形に近い土師器皿が置かれたよう埋没していた。何か遺構の痕跡かもしれない。

出土遺物 420~427は陶磁器。420は中国景德鎮染付小皿。421は陶器合子蓋。オリーブ灰色釉がかかる。他より1世紀程新しく、後世の遺構のものかも知れない。422は美濃志野焼向付片。423は肥前陶器碗。高台重ね焼粘土が付着。424は福岡産陶器皿。425は福岡産灰釉皿口縁部片。426は福岡産灰釉皿。427~432は土師器皿や灯明皿。口径10cm前後と、口径14cmで大きく開く432がある。

④ピット・整地面・擾乱出土遺物 (第41~45図)

ピット出土遺物 (第41~43図) 433はSP1046出土の福岡上野焼の陶器花瓶か。434・435はSP1082出土。434は瀬戸・美濃焼の碗。435は福岡小石原火口窓窓の陶器皿か。436はSP1185出土の肥前有田の染付皿か。437はSP1209出土の土師器灯明皿。438はSP1215出土の肥前灰釉皿か。439・440はSP1248出土。福岡の鉄釉壺か。440は美濃志野焼向付片。441はSP1253出土土師器小皿。442~444はSP1278出土土師器の灯明皿。445はSP1288出土の肥前染付碗。

整地面出土遺物 446は美濃志野焼向付片。447は福岡呂器手碗か。448は中国漳州窯系の染付碗。449は中国産玉緑白磁碗。450は中国景德鎮芙蓉手の碗。451は肥前青磁瓶。452は肥前有田染付碗。453は肥前の灰釉皿か。464は肥前有田の角瓶か。466は肥前有田の蓋付小広東碗。467は中国景德鎮の精緻な皿。断面漆雜痕が残る。469・470は肥前染付稜花皿。477は福岡産陶器灰落とし。481は信楽焼四耳壺。

擾乱遺構・表採・遺構面掘下げ時出土遺物 陶磁器で、主なものを上げる。458は肥前京焼風陶器で高台内に「浦」の墨書がある。459は瀬戸・美濃の鉄漿壺。483~488は土師器。483・484は意味不明の墨書破片。485・486は灯明皿。489は7世紀初め頃の須恵器坏身小片。

4. 第3面の調査

時間の制約から全面的な確認調査は出来なかった。城下町造成面下で検出した遺構である。

SD1275 (第46図、図版12-(2)・(3))

Ⅲ区南壁際で検出した主軸をN-78°-E方向に取る東西方向の溝。西側はSK1043に切られ、東側は南壁にかかる。西方向の延長の有無は不明。確認規模は約15m、幅1.9~2.4m、深さは0.8m程を測る。埋土は暗灰黄褐色細砂で黒色土小ブロックを斑に混入する。

出土遺物 量は少ないが中国産陶磁器、古代の須恵器、鉄製品などが出土。490~492は中国産白磁。490は玉緑口縁碗。491は端反碗、492は小振りの玉緑碗。493は龍泉窯系青磁碗。494・495は古代の須恵器小片。494は蓋。495は高台付环。

5 各種遺物

①瓦類（第47～51図、図版16）

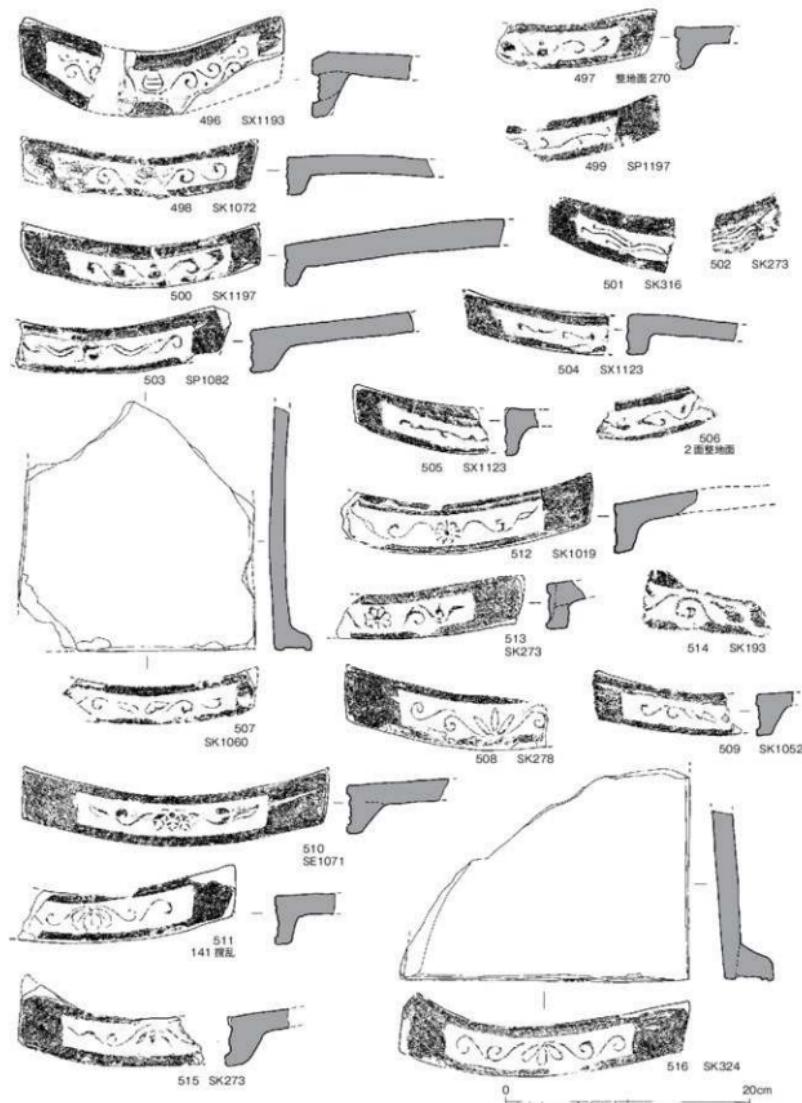
福岡地方の近世瓦の研究については、先行研究が井澤洋一氏によって江戸前期までの分類・編年が行われている^(註11・12)。その後山崎信二氏の『近世瓦の基礎研究』で、井沢氏の編年を受継ぐ形で江戸時代後期までの福岡地方の瓦について概説的に述べ時期分類している^(註13)。山崎氏は近世Ⅲ－1期（1592～1600）、近世Ⅲ－2期（1600～1615）、近世Ⅳ期（1615～1657）、近世Ⅴ期（1657～1682）、近世Ⅵ期（1682～1724）、近世Ⅶ期（1724～1765）、近世Ⅷ期（1765～1800）に分類している。近世Ⅲ－1期は博多遺跡や名島城の瓦の時期。Ⅲ－2期は福岡城創建時瓦や鷹取城瓦、Ⅳ期は御高屋敷、觀世音寺講堂出土の「寛永」銘鬼瓦、Ⅴ期・Ⅵ期は必ずしも明らかでないが、御鷹屋敷第I号溝出土瓦。Ⅵ期は御鷹屋敷II号溝などが該当。Ⅶ期・Ⅷ期も明らかでないが、福岡城大手門出土瓦、Ⅸ期は月見櫻出土軒丸瓦などを代表としている。今回はこれを基に対象数は少ないが分類を行う。

軒平瓦 496～506がⅢ－1期に該当。名島城時代の瓦で、中心飾り宝珠で両側に唐草が反転するものである。496はSK1193出土、497は整地面270出土。498はSK1072出土。499はSP1154出土。500はSK1197出土。501はSK316出土。502はSK273出土。503はSP1082西側出土。504・505はSX1123出土。506はⅡ区2面整地面出土。507～512はⅢ－2期～Ⅳ期頃のもの。中心飾りが複線三葉（508）・二葉（507・509）、桐文（510・511）である。507はSK1060出土。508はSK278出土。509はSK1052出土。510はSE1071出土。511は141攪乱出土。512はSK1019出土。中心飾りは花文・唐草の形態からⅢ－2～Ⅳ期頃か。513～515はⅣ期頃か。中心飾りは513は菊文、514・515は肉厚の三葉か。513・515はSK273出土。514はSK193出土。516はⅤ期。複線の下向きの三葉。SK324出土。517はⅥ期。中心飾りは桐文。SK1008出土。518はⅦ～Ⅸ期で肉厚の三葉文。SE1273直上出土。時期が合わず1面の混ざりであろう。

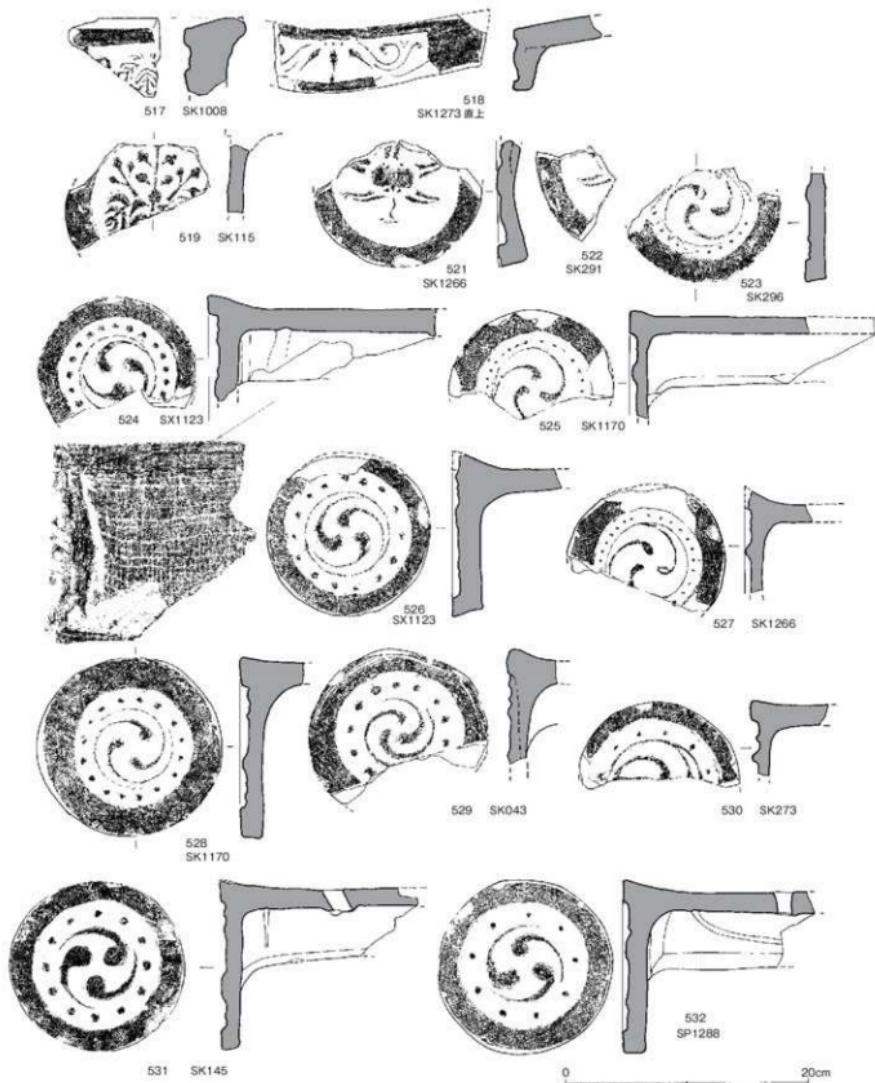
軒丸瓦 519～527はⅢ－1期。519・520は桐文。519は五三桐、520は桐文の痕跡が残る。521・522は黒田氏の替文の橘文。名島城と同じ形態。523～528は珠文が多く巴の尾が繋がる。519はSK115出土。520はI区北側第1面掘下げ出土。521・527はSK1266出土。522はSK291出土。523はSK296出土。524・526はSX1123出土。525はSK1170出土。528はSK1170出土。529～532はⅢ－2期のもの。珠文が少くなり巴が肉厚になる。529はSK043出土。530はSP1104出土。531はSK273出土。532はSP1288出土。533はⅩ期。外縁帯が幅広で、中心の巴は小さく、それを取巻く珠文が大きくなる。SK145出土。534は小型の軒丸瓦。径9cmと小さく、堀の屋根に葺かれたものか。SX062攪乱。

丸瓦 535・536はほぼ大きさは同じ。長さ26.3～27.2cm、筒部幅14.1～14.2cmを測る。535の凸面はタテヘラナデ、凸面粗い布目、釣り紐痕が残る。536は摩滅するが布目が残る。Ⅲ－1期相当か。537は小型の瓦で全長22.7cm、幅11.5cm。凹面布目痕が残る。538は釘孔があり、凹面模骨痕残る。煤が付着する。535はSK1052出土。536はSK1019出土。537はSK1074出土。538はSK273出土。

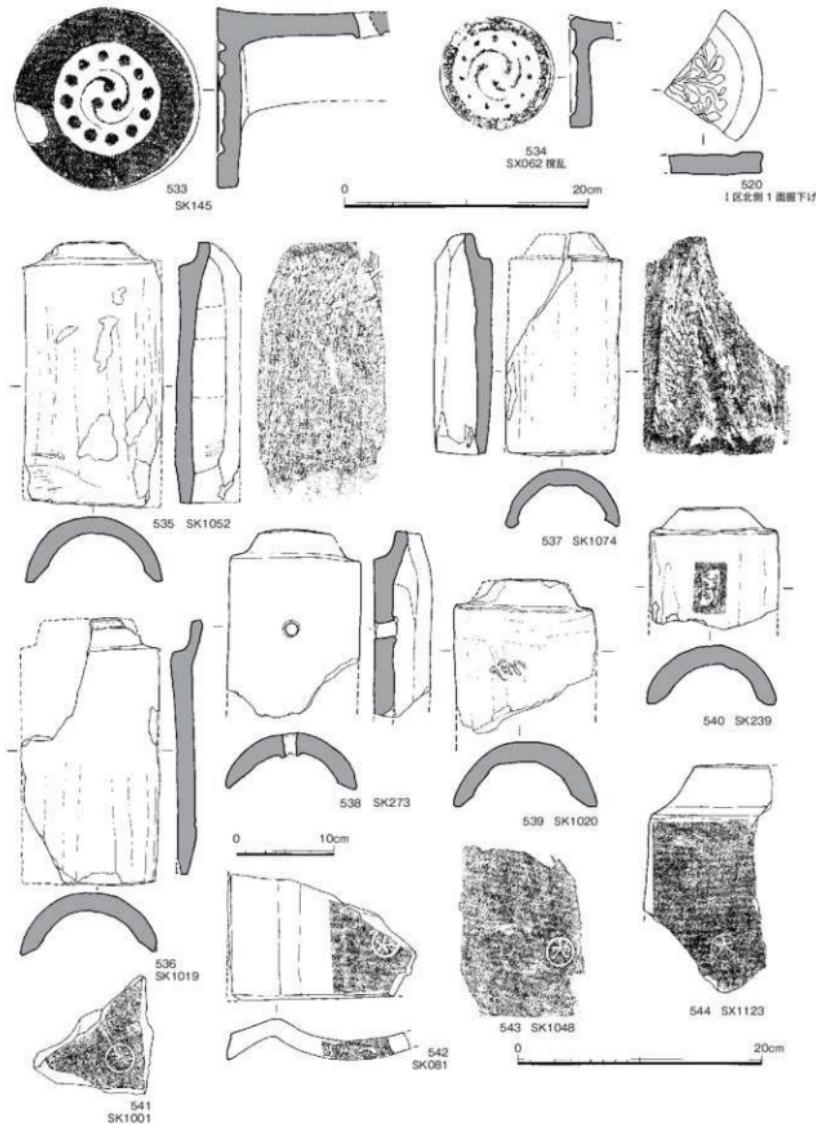
押印瓦 539～558で人名と文様・記号の2種類ある。539・540・545～552は人名。瓦工人を示すものか。539は凸面「久兵衛」と。540は丸瓦凸面で印字不明。545・546は「李兵衛」。547・549は「甚兵衛」、548は不明。550は「左衛門」か。551は「今宿又市」。552は「久左衛門」。541～544・553～558は記号。541～544は丸で囲んだ「大」で平瓦又は棟瓦にある。時槽で多数出土している^(註14)。542の小口面に人名らしき刻字がある。553・554は雲文、555はヘラ切りの三角文。556は花弁？、557は斜格子の格円。558は木の葉文などがある。539・547はSK1020、540はSK239、541はSK1001、542はSK081、543はSK1048、544・556はSX1123、545はSK072、546はSK295、548はSK1124、549はSP286、550はSK1065、551はSK251、552はSK212、553はSX1118、554はSP264、555はI区2面掘下げ、557はSK1121、558はI区1面掘下げで出土。



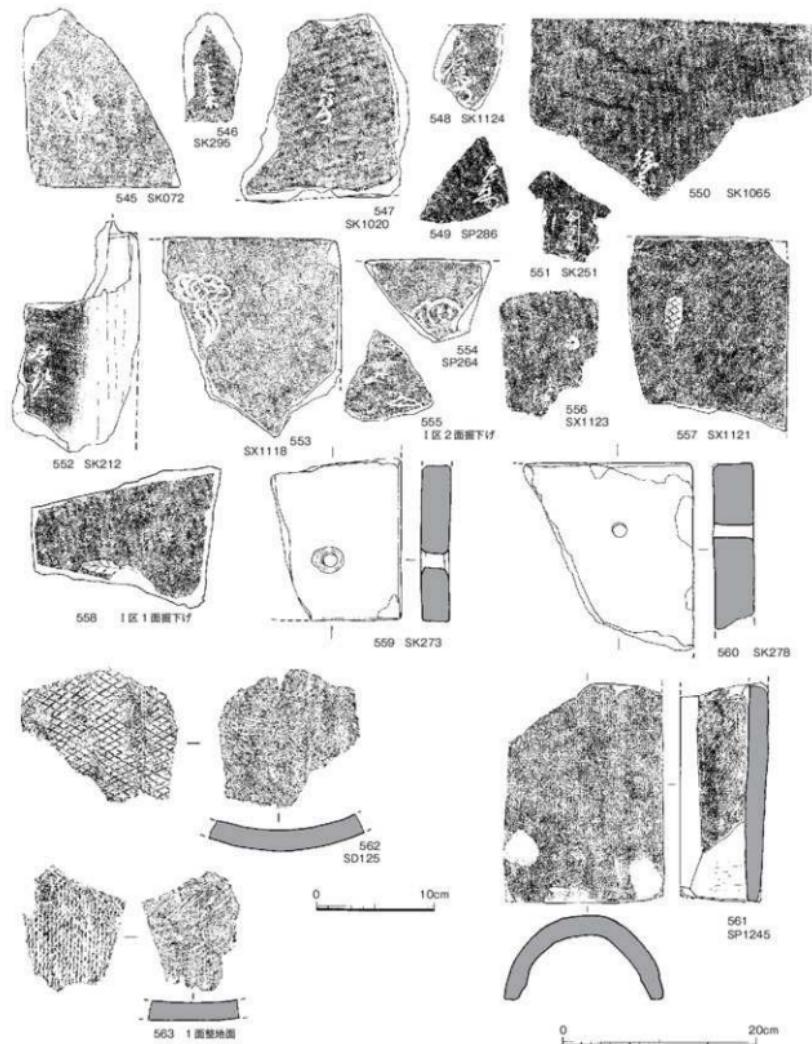
第47図 各遺構出土軒平瓦(1/4)



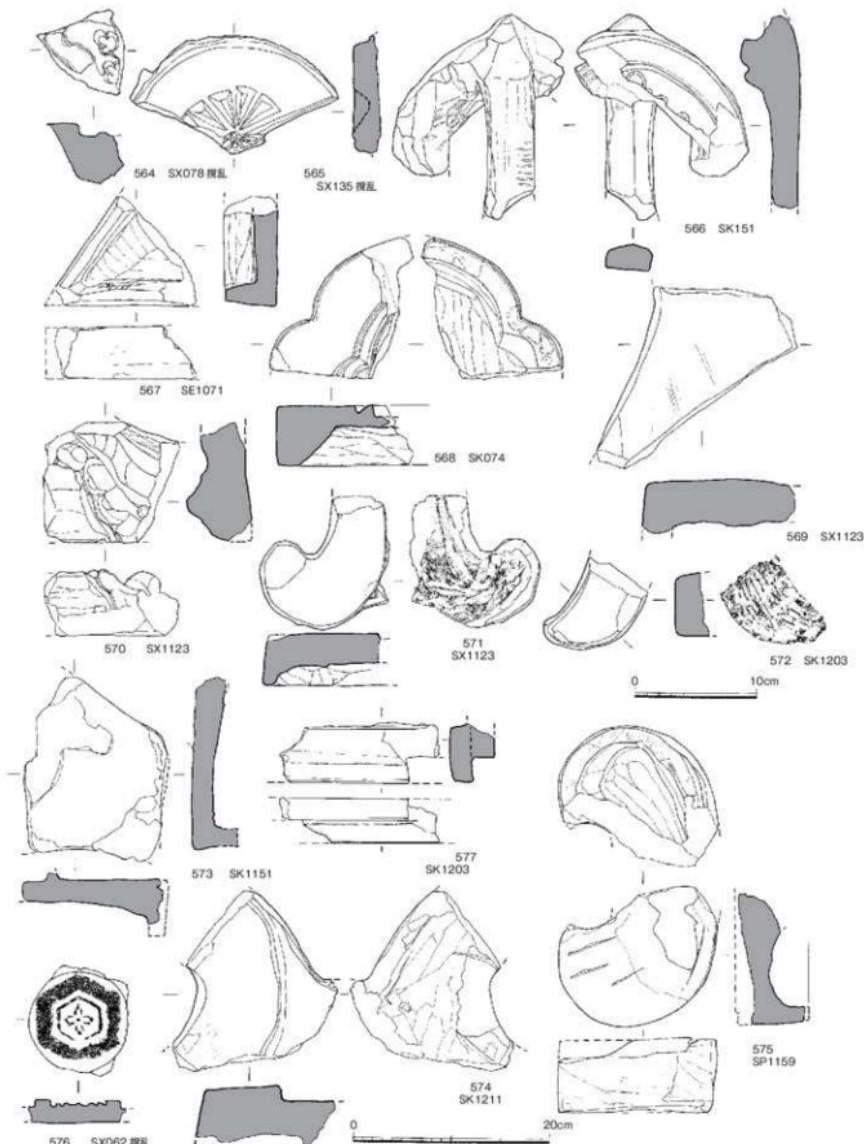
第48図 各遺構出土軒平・軒丸瓦(1/4)



第49図 軒丸瓦・丸瓦 (1/4・535~540は1/5)



第50図 瓦刻印拓影と鴻臚館の瓦(1/4・561は1/5)



第51図 鬼瓦など道具瓦(1/4・573~575は1/5)

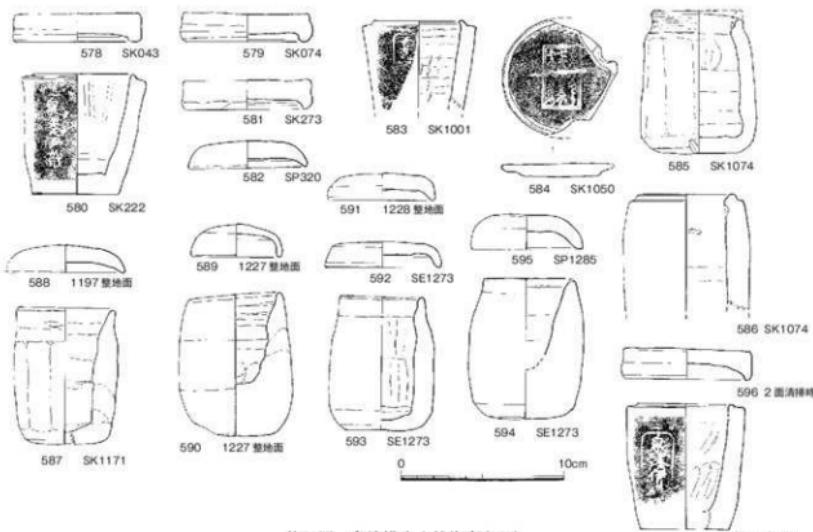
磚 559・560は方形磚片。厚みは2.3、3.4cmを測る。559はSK273、560はSK278出土。

鴻臚館時代の瓦 561は丸瓦。凸面は細い縄目叩き、凹面は布目に斜めコビキ痕、古代よりは中世瓦の可能性がある。灰白色で硬く焼成は良い。562・563は古代平瓦片。凸面は斜格子叩きと縄目叩き、凹面は布目痕。561はSP1245、562はSD125、563は第1面整地面出土。

鬼瓦・道具瓦類 坪井利弘氏の分類で行う^(註15)。564は頭部右側片。565は扇形の鬼瓦片。566は数珠掛鬼瓦頭部片。背部に持ち手がある。567は鬼瓦か道具瓦の一部。568は吹流し型の頭部片。569は鬼板の小片か。表面丁寧なナデ。570は鬼面型の鬼瓦片。571は御所型鬼瓦の左足。572は雲型鬼瓦の左足。573は山形の頭部。574は雲型の頭部で左側窓が開く。575は雲型の左足。576は家紋鬼瓦。花菱で斎藤家の家紋である。577は鬼台のような道具瓦片か。564はSX078攪乱、565はSX135攪乱、566はSK151、567はSE1071、568はSK074、569～571はSX1123、572はSK1193、573はSK1151、574はSK1211、575はSP1159、576はSX062攪乱、577はSK1203出土。

②焼塩壺（第52図）

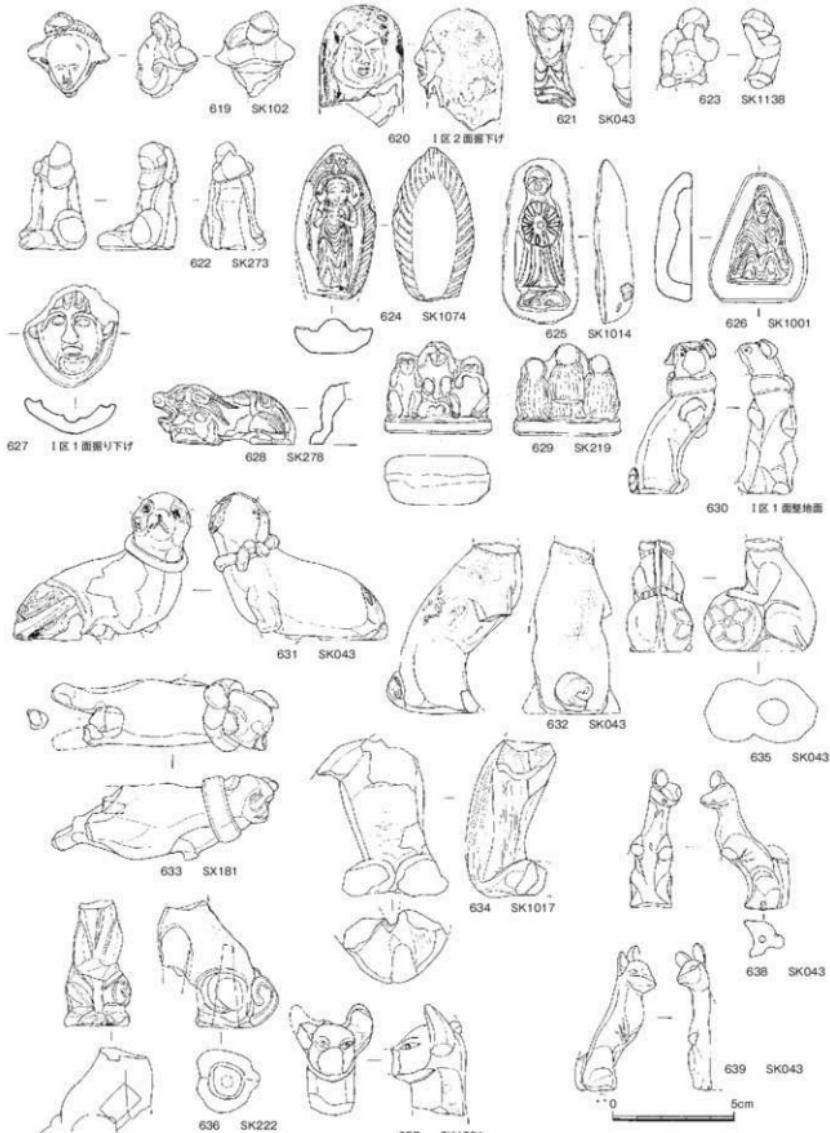
焼塩壺は江戸時代、製塩で作られた粗塩を臼で細かく碎いた後、再焼成し白い不純物のない焼塩を作るための容器と、再焼成した塩を流通させるために入れた容器をいう。主に武家や有力社寺、富裕な商家などで使用された。焼塩壺は福岡市内では福岡城関連調査で出土している。焼塩壺の研究は渡辺誠氏他、何人かの研究がある。ここでは小川望氏の分類案に基づいて行う^(註16)。今回の調査では21点出土。第1面は5点、第2面は15点である。蓋が11点、身の壺9点。蓋はア類（断面外形・内形が弧を描くもので①～③に細分）とイ類（断面が四字形を呈すもので①～⑥に細分）とオ類（底面中央が下方に突出し断面が基本的に凸字形を呈すもので①～③に細分）がある。ア類は6点、イ類が4点。オ類が1点出土。ア類の蓋は口径8cmで、内面には細かい布目があり、外面は平滑でミガキに近いナデ、色調は橙色。イ類の口径は7cm前後で、調整はナデ。蓋の年代はア類が古く17世紀前半～後半、イ類が



第52図 各遺構出土焼塩壺(1/3)



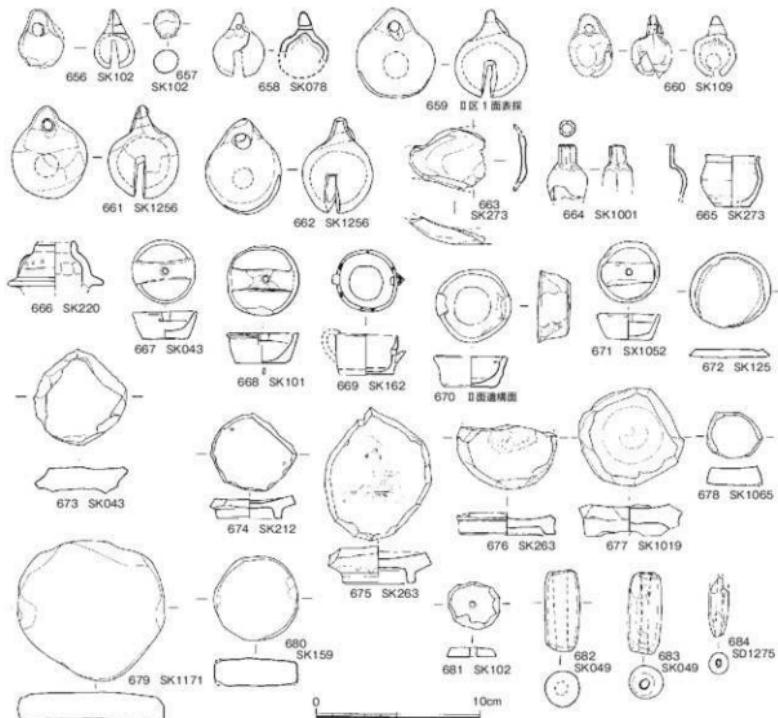
第53図 各遺構出土土製品 I (1/2)



第54図 各種遺物出土土製品 II (1/2)



第55図 各遺構出土土製品III(1/2・1/3)

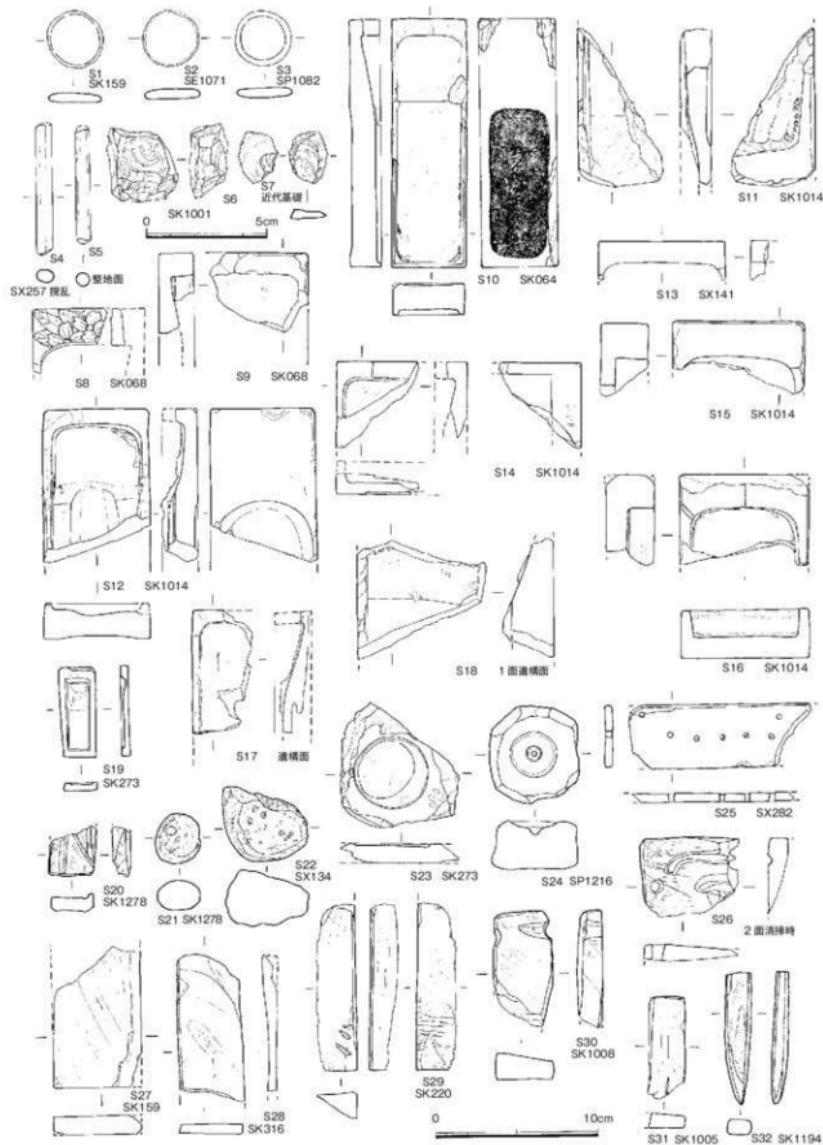


第56図 各遺構出土土製品IV(1/3)

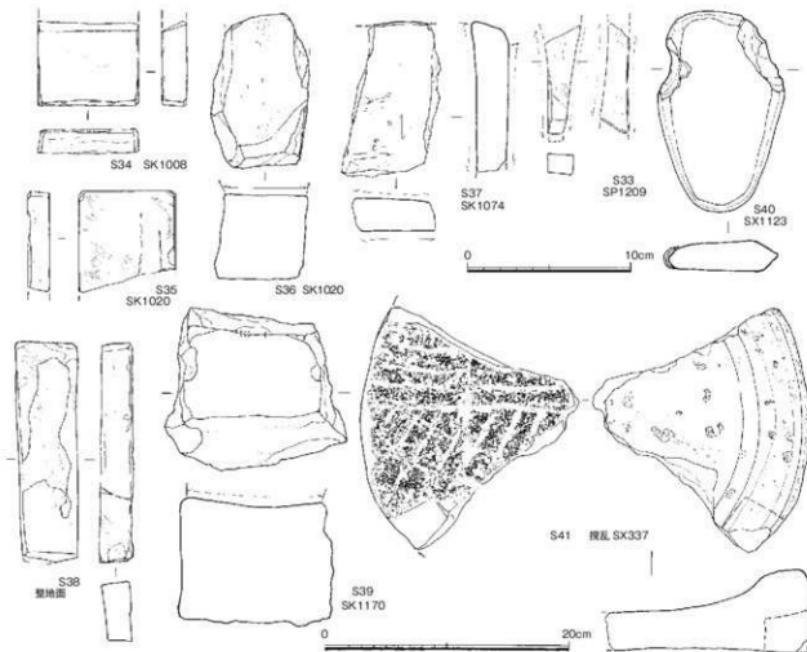
18世紀前半頃、オ類が18世紀後半頃である。身の壺はコップ形と鉢形の2種類に分ける^(註17)。今回はコップ形形態で小川氏は3形態に分類する。I類は底部から粘土で体部を積み上げたもの。II類は芯の周りに粘土板を巻き付けて円筒を作り、その一端に粘土塊を詰めて底とする。(板作り成形)。III類は輥轆成形で粘土塊から体部を引上げ、底部は糸切離しする。当調査ではI類3点、II類4点出土。口径はいずれも5.5~6cm内、器高は7.8~88cm。外面は丁寧なナデ仕上げで色調は橙色。年代としてはI類が古く17世紀前半から後半、II類が18世紀前半頃である。時期的には大身屋敷地時代のものである。また表面に刻印を持つものが4点ある。I類の壺外面に「泉漆伊織」とあり、壺屋藤太郎系の鉢型焼塩壺の製品である。オ類蓋には擦れ判読は難しいが「南○○○兵衛」とあり、「なん若人系」の鉢型焼塩壺の蓋である。578はSK043、579はSK074、580はSK222、581はSK273、582はSP320、583はSK1001、584はSK1050、585・586はSK1074、587はSK1171、588は1197整地面、589・590は1227整地面、591は1228整地面、592~594はSE1273、595はSP1285、596は第2面清掃時、597はII区1面出土。

③土製品（第53~56図、図版16）

598~604は天神様。型作りで底面に型の痕跡が残る。いずれも頭部が欠け、残存高で3~6cmを測る。601、603は赤色顔料が斑に残る。600・604の底面には径1cm・0.4cmの孔があく。603の底面には「つ」



第57図 各遺構出土石製品 I (1/2・1/3)



第58図 各遺構出土石製品 II (1/3・S39、40は1/4)

字の墨書きが残る。598~600はSK043、601はSK102、602はSK219、603はSK273、604はSK1014出土。605は版型から打ち出された福禄寿で指揮さえ痕が残る。SE1071上層出土。606は肥前器高麗聖人の頭部。607は西行の下半部。型作り。SP1021出土。608~609は姉雄。608は男雄、609は女雄（姉様）。いずれも頭を欠損。608の首に鉄分付着。609の底面には径1cm程の円錐状の孔があり、大坂系の人形か。608はSK043、609はSK041上面出土。610は太夫で手ひねりである。SK043出土。611は姉様か太夫。底部円錐形の孔がある。胎土は白く京都系か。SK043出土。612は富士見西行か。SK1065出土。613は武者の下半部。底面四角い孔がある。SK262出土。614は箱を持つ少女座像。焼けたのか黄色・橙色に変化している。撫乱SX135出土。615~618は人の頭部。615は翁の頭部。616~618は人の顔。2.5cm前後で、中空で壓押し作り。615はSK104、616はSK125、617はSK273、618はSX051撫乱出土。619は太夫の頭。620は肥前色絵磁器で婦人の頭部。619はSK102。620は1区2面掘下げ。621~623は手ひねりの人形。3~4cm位の大きさ。621はSK043、622はSK273、623はSK1138出土。624は薬師如来か觀音菩薩の護持仏。長さ6.3cm。SK1074出土。625~636は土型。625は西行、626は觀音様か。625はSK1014、626はSK1001出土。627は人面の泥面子。I区1面掘下げ出土。

628は備前焼の獅子。色調は赤く、型作りで装飾の一部か。SK278出土。629は型作りの三猿。SK219出土。630~634は柴犬など在来の犬。子供の愛玩か安産のお守りか。大きさは7~9cmで、いずれも手

ひねり。四肢が欠損する。630～632はチチ犬。632の胎土は白く京都系か。633の尻部分には串を刺す孔が開く。不細工な顔であるが、胎土は白く精良で丁寧な作り。634は在地系の作り。色調は黒く黒犬か。630はI区1面整地面、631・632はSK043、633はSX181攪乱。634はSK1017出土。635は玉取猫。型作りで底部直径1.2cmの孔があく。SK043出土。636～639は狐。636は型作り。褐色顔料が残る。底部に径1.5cm、深さ3.4cmの円錐形の孔があく。637は頭部。ピンクの顔料が残る。638・639は手ひねり。5～6cm。底面には小孔が開いている。636はSK222、637はSK1001、638・639はSK043出土。640・641は馬。640は手ひねり。638は型作りで、胎土は白く精良。京都系か。腹に径4mmの孔があく。640はSK043、641はSK059出土。642・643は鶴。いずれも型作り。642の底面には径1.6cmの円錐形の孔があく。大坂系か。643は写実的な作りで、底部に径0.4cmの孔がある。644～646は鳩。型作りで644は黒ずむ。645は透明釉がかかったように光沢を持つ。646は頭部。陶製で釉がかかる。642はSK043、643はSK219、644はSP336、645はSK102、646はSK278出土。647は型作りの亀。腹に斜めの孔がある。表面薄く釉が残り彩色された可能性あり。京都粟田口人形の模倣。SK1135出土。648は鯉。腹に孔が開く。SK288出土。649は樓門の泥面。650は箱庭道具。緑色の施釉陶器である。いずれも攪乱282出土。651は京都伏見系のでんぼう。型打ち成形。SK102出土。652は巴太鼓？箱庭道具か。SX078出土。

653～655は型打ち成形。653は福助の一部か。654は猫。655は亀か。653は外面赤色が残る。654は胡粉が残る。655は型合わせ痕がある。653・655の底部に墨痕がある。653はSK295、654はSK102、655はSK273出土。

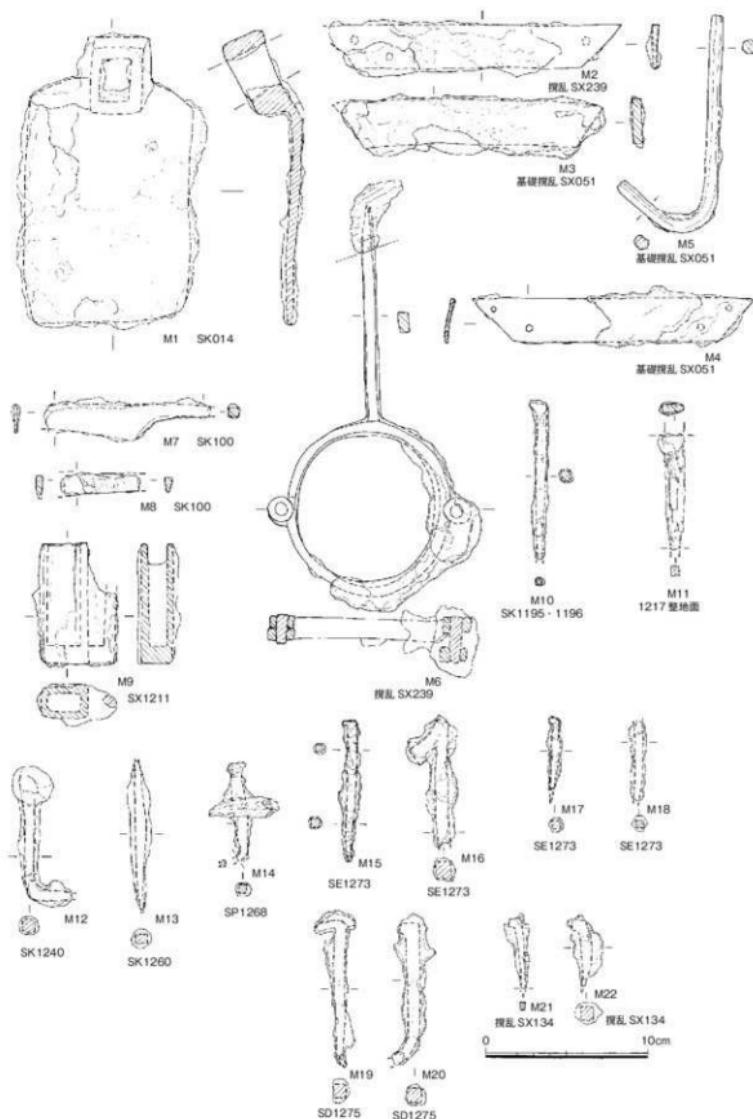
656～662は土鉢。土師質で焼きは良い。小型のもの656・658・660と大型659・661・662がある。657は土鉢内の玉。659～662内には玉が残っていた。656・657はSK102、658はSK078、659はII区1面表裏、660はSK109、661・662はSK1256出土。663は船か箱庭道具。SK273出土。

664～666はまごと道具。664は肥前磁器の壺か。665は土師質の甕。666は湯釜。667～671は軟質施釉陶器の灯明皿。口径4cm程で、口縁部に橋がかかり、中央に円孔がある。灯芯を出したのか黒く焼けている。666は口と把手が付き、他とは形態が違う。出土。672～681は円板か瓦玉。672は陶器片、673は陶器片、674は陶器片、675は京都系陶器片、676は白磁片、677は陶器片利用。678～680は丁寧に縁を研磨し丸く整える。681は土製有孔円板、682・683は土錘。684は陶製の土錘。664はSK1001、665はSK273、666はSK220、669はSK162、670はII区面透構面。671はSK1052、672はSK125、667・673はSK043、668・681はSK102、674はSK212、675・676はSK263、677はSK1019、678はSK1065、679はSK1171、680はSK159、682はSK049、683はSK049、684はSD1275出土。

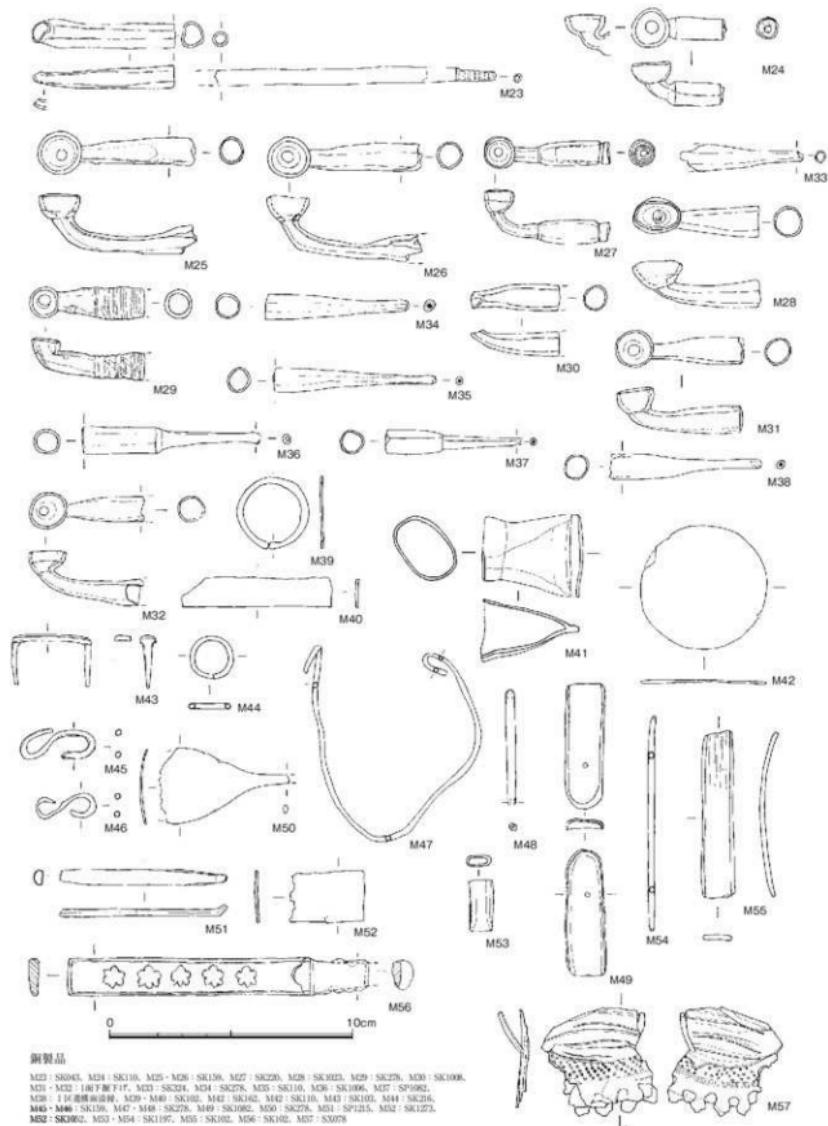
④石製品（第57・58図、巻頭図版8）

S1～S3は碁石。径2.3cm、厚さ0.4cmを測る。S1は灰赤色で白基石か、S2・3は黒碁石。S1はSK159、S2はSE1071、S3はSP1082出土。S4・S5は棒状の石筆。長さ5.4cm、4.9cm、径0.5×0.7cm、0.5cmで、両端は擦り減っている。石材はロウ石か。S4はSX257攪乱、S5は整地面出土。石筆は幕末頃から日本に流入した西洋の教材の一つで、明治の初め頃当地にあった大名小学校のものであろうか。S6は碧玉と思われる暗緑灰色を呈す石核。各面調整剥離面が残る。火打ち石か碧玉の素材か。碧玉とすれば鴻臚館以前のものか。SK1001出土。S7は黒曜石片。近代基礎跡出土。

S8～S19は硯。いずれも外面は丁寧な研磨仕上げである。S8は色調が赤く赤間石と思われ、周縁表面に桜花を浮彫する上等な硯である。SK068出土。S9は海部の破片。石質は頁岩か。SK068出土。S10は一部欠損するが全容が残る。石材は褐灰色を呈す粘板岩と思われる。陸・海部に朱が残り、朱墨用の硯と思われる。底面は浅く窪み@⑩石と線刻がある。石材の産地名か。SK064出土。S10は赤間石硯の破片。再加工している。SX133・134近代攪乱出土。S11の色調は青黒色を呈す粘板岩か。



第59図 各遺構出土鐵製品 (1/3)



第60図 各種遺構出土銅製品(1/2)

S12は残存長8.2cmの破片。海部には墨痕が残り、陸部は使用で窪む。色調は暗赤褐色で、石材は赤間石か。**SK1014**出土。S13～S18は小片。S16は海部片。内面使用痕跡の墨痕が残る。石材は頁岩。S17の石材は青黒色の粘板岩。S18は厚手の硯。色調は鈍い黄褐色で石材は頁岩か。S13は**SX141**攢乱、S14～S16は**SK1014**出土。S17は遺構面、S18は1面遺構面出土。S19・S20は小型の硯。S19は長さ5cm。石材は泥岩か粘板岩で、海・陸部は削りと擦り仕上げ。**SK273**出土。S20は硯片の転用品である。S19は**SK273**、S20は**SK1278**出土。S21は石弾か。石材は玄武岩で丸く仕上げる。S22は輕石製品。表面は擦り。S21は**SK1278**出土。S22は近代攢乱**SX134**出土。S23・S24は不明石製品。上面径4.3×4.6cmの円形の窪みがある。S24は石灰岩系の石材で六角形状に粗加工し、上面径2.7cmの浅い円錐状に掘り窪める。S23は**SK273**、S24は**SP1216**出土。S25は板状の不明闇製品。残存長10cmで色調は鈍い黄橙色で、表面径3mmのⅤ個の孔がある。**SX282**攢乱出土。S26は不明滑石製品片。表面孔と溝がある。孔は紐擦れがあり携帯用か。**2面清掃時取上げ**。S27～S39は砥石片。S27は板状の砥石片。表面使用擦痕が残る。色調鈍い黄色で頁岩系統の石材か。S28は長さ8.8cmの手持ち砥石。石材は頁岩。S29は方形の破片。使用痕が残る。残存長10.1cm。石材は頁岩か。S30は手持ち砥石の転用品か上部縫括りの抉りがある。両面は使用で摩滅する。S31は砥石片。長さ6.2cm、3面が使用面。石材は泥岩。S32は先が尖った砥石。長さ8.2cm。黒灰色の粘板岩か。S33は手持ちの仕上げ砥石。長さ6.7cm。石材は粘板岩。S34は方形の板材。表面丁寧な研磨仕上げ。S35は板状の石材。輝線凝灰岩の赤間石で視材か。S36は砂岩の中・荒砥石片。長さ10.5cm。S37は仕上砥石片か。石材は頁岩。S38は長方形の砥石か。使用痕が残るが欠損が著しい。長さ13.4cm。石材は粘板岩か。S39は大型の荒砥石片。長さ14.7cmで、石材は砂岩。S40は磨石か石錘。上部に抉り状加工痕がある。下端は擦り痕が残る。S41は研臼の上臼。下面に擦目があるが使用により摩滅する。S27は**SK159**、S28は**SK316**、S29は**SK220**、S30・S34は**SK1008**、S31は**SK1005**、S32は**SK1194**、S33は**SP1209**、S35・S36は**SK1020**、S37は**SK1074**、S38は整地面、S39は**SK1170**、S40は**SK1123**、S41は**攢乱SX337**出土。

⑤鉄製品（第59図）

釘類を中心多く量の鉄製品がある。一部を紹介する。M1は鎌。上部に柄の装着孔がある。長さ15cm、幅7.1cm。鎌が酷い。**SK014**出土。M2～M4は建築金具か。長さ16.9・15.9cm。表面観察では不明だが、M2・M4ではX線写真で孔が2か所、M4は両側に4個の孔がある。いずれも近代のものか。M5も金具か。下端が鉤状に曲がる。M6は不明製品で円環と一か所から把手が付く。把手の先端は尖り木質が付着する。円環は内径で10cm程、両側に丸い接着装置が付く。M2・M6は**攢乱SX239**、M3～M5は基礎攢乱**SX051**出土。M7・M8は小刀か刀子。M7は刃～茎部。残存長10cm。刃部断面は下端が尖る。M8は残存長4.8cm、茎から刃部。木質が残る。M7・M8は**SK100**出土。M9はソケット状の不明製品。長さ7.4cm。鎌が酷い。瓦溜**SX1211**出土。M10～M22は釘。全体に鎌が酷い。断面は方形。頭がつぶれたり曲がったりする。M11・M15・M21・M22は木質が残る。残存長4.1～9.5cm。M10は**SK1195・1196**、M11は**1217整地面**、M12は**SK1240**、M13は**SK1260**、M14は**SP1268**、M15～M18は**SE1273**、M19・M20は**SD1275**、M21・M22は近代攢乱**SX134**出土。

⑥銅製品（第60図、巻頭図版8）

M23～M38は煙管。小泉弘氏の煙管の編年^(注18)に照らして説明する。伸ばした金属板を巻いて作っている。M23はIV期か。雁首から吸口まで。全長17cm以上。首はつぶれ、緑青が吹く。吸口には木質が残る。M24～M29は雁首。M24はIV期、M25・M26はIII期の雁首か、火皿は径1.7～1.8cmと大きい。接合痕が残る。表面は緑青が吹く。M27はI～II期。内面木質（竹か）が残り中空である。M28はIV類か。接合痕が残り火皿径は1.9cm。M29はV～VI期雁首肩部に連続する沈線の装飾が付き木質が

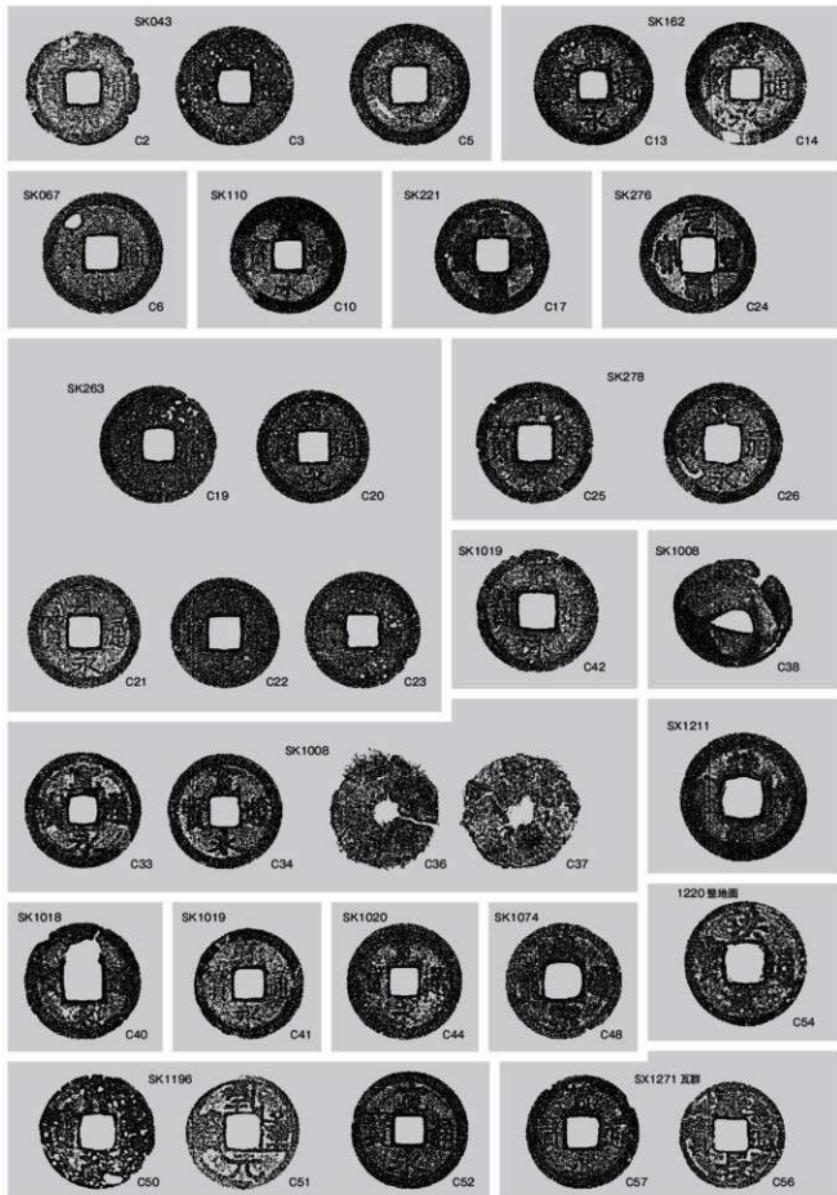
残る。M30～M32はIV期か。M31は接合面が残る。M33～M38は吸口。吸口の形態から見るとM33～M35・M38はIV期。M36はII期・M37はIII期で接合痕がある。M39は扁平な円錐の銅輪。径2.9～3.0cm。M40は長さ6.1cm、幅1.2cmを測る。M41は袋状の不明製品。断面は梢円形。長さ4.1cm。M42は径5.1cm、厚さ2mm未満の薄い円板。M43はサッパ釘。M44は径1.7cmの銅環。M45・M46はS字状金具。M47は銅線。M48は中空の銅棒状製品。長さ4.7cm。M49は断面船底状の金具。長さ5.1cm。M50・M51は笄の一部か。M52は薄い銅板。M53は柄端のカバーか。M54は棒状銅製品。長さ8.7cm。M55は弧状の不明板状製品。長さ7.8cm。凸面は線状の磨き擦痕が残る。M56は刀子の柄。長さ12.2cm、幅1.5cmを測る。上面に5個の花形の浮き彫り文様がある。M57はビラビラ簪か。

⑦銭貨（第61図）

各遺構から65枚出土。内訳は表2の通りである。第1面が28枚、第2面が30枚、遺構面他が7枚。銅錢が61枚、鉄錢が3枚、雁首錢が1枚である。全体を通して寛永通宝が多く50枚、江戸時代初期頃の慶長通宝1枚、中国錢8枚、不明6枚である。寛永通宝は直径にバラつきがあり、背面に「文」字（1668～1683年）が入った新寛永（分銭）が2枚ある。第1面の大半は寛永通宝であるが、第2面の遺構には中国錢（主に宋錢）が多い。江戸時代前半まで中国錢が普通に流通していたことが分かる。

表2 各遺構出土銭貨

番号	種類	遺物名	遺構名		備考(径) cm	番号	種類	遺物名	遺構名		備考(径) cm	
			地区	調査面					地区	調査面		
C1	青銅	寛永通宝	I	1	建物基礎001	2.48	C34	青銅	寛永通宝	I	2	SK1008最上層
C2	青銅	寛永通宝	I	1	SK043下層	2.39	C35	鉄	寛永通宝か	I	2	SK1008
C3	青銅	寛永通宝	I	1	SK043下層	2.30	C36	鉄	鉄錢	I	2	SK1008
C4	青銅	跋貢不明	I	1	SK043下層	不明	C37	鉄	跋錢	I	2	SK1008
C5	青銅	寛永通宝	I	1	037(SK043上層)	2.28	C38	青銅	雁首錢	I	2	SK1008
C6	青銅	寛永通宝	I	1	SK067下層	2.38	C39	青銅	寛永通宝	I	2	SK1012
C7	青銅	寛永通宝	I	1	SK067下～下層	2.52	C40	青銅	寛永通宝	I	2	SK1018
C8	青銅	寛永通宝	I	1	SX078攤疊土坑	2.52	C41	青銅	寛永通宝	I	2	SK1019ベルト面
C9	青銅	寛永通宝	I	1	SK102東側土器群	(2.45)	C42	青銅	寛永通宝	I	2	SK1019
C10	青銅	寛永通宝	I	1	SK110下層	25(背文)	C43	青銅	寛永通宝	I	2	SK1019南側
C11	青銅	寛永通宝	II	1	SK133-134間攤疊	2.17	C44	青銅	寛永通宝	I	2	SK1020中層(東側)
C12	青銅	寛永通宝	II	1	SK160	2.34	C45	青銅	寛永通宝	I	2	SK1020 R3
C13	青銅	寛永通宝	II	1	SK162	2.65(背文)	C46	青銅	寛永通宝	I	2	SK1048.1層 不明
C14	青銅	寛永通宝	II	1	SK162-2	2.48	C47	青銅	寛永通宝	I	2	SK1052(SK110)ベルト
C15	青銅	寛永通宝	II	1	SK163	2.47	C48	青銅	寛永通宝	II	2	SK1074 F層 1038
C16	青銅	寛永通宝	II	1	SK219	2.57	C49	青銅	寛永通宝	II	2	SK1152
C17	青銅	元祐通宝	II	1	SK221東壁	1086	C50	青銅	乳十通宝	III	2	SK1196西側 758
C18	青銅	判読不明	III	1	SK250-1東側	(2.46)	C51	青銅	熙寧通宝	III	2	SK1196西側 1068
C19	青銅	寛永通宝	III	1	SK263 R2	2.46	C52	青銅	寛永通宝	III	2	SK1196東側 243
C20	青銅	寛永通宝	III	1	SK263 R2	2.36	C53	青銅	祥符通宝	III	2	SX1211瓦溜り 1009
C21	青銅	寛永通宝	III	1	SK263 R2	2.3	C54	青銅	元祐通宝	III	2	1220-4整地面 1078
C22	青銅	寛永通宝	III	1	SK263 R2	2.41	C55	青銅	洪武通宝	III	2	1220-4掘下げ 1368
C23	青銅	寛永通宝	III	1	SK263 R2	2.36	C56	青銅	寛永通宝	III	2	1271瓦群 234
C24	青銅	元祐通宝	III	1	SK276-2	1078	C57	青銅	慶長通宝	III	2	SX1271瓦群 1596-1615
C25	青銅	寛永通宝	III	1	SK278下層	2.30	C58	鉄	寛永通宝か	III	2	SE1273上層 248
C26	青銅	寛永通宝	III	1	SK278-2	2.32	C59	青銅	寛永通宝	I	1	3B区中層下げ 227
C27	青銅	□符□符	III	1	SP318	不明	C60	青銅	寛永通宝	I	1	3B区中層下げ 241
C28	青銅	寛永通宝	III	1	SX337攤乱	2.60	C61	青銅	寛永通宝	I	2	北闕清掃時 (2.46)
C29	青銅	寛永通宝	I	2	SK1001	2.47	C62	青銅	寛永通宝	III	1	IDK遺構面取り下げ(西側) 244
C30	鉄	寛永通宝か	I	2	SK1001	2.83	C63	青銅	□水通宝	I	1	2C区清掃中 (2.30)
C31	青銅	寛永通宝	I	2	SK1001東側	2.37	C64	青銅	寛永通宝	II	1	北半分全景写真清掃 228
C32	青銅	寛永通宝	I	2	SK1003(北半分)	2.30	C65	青銅	寛永通宝	I	2	中央ベルト整地層 218
C33	青銅	寛永通宝	I	2	SK1008最上層	2.43						



第61図 各遺構出土錢貨(X線写真)

註・参考文献

- 註1 福岡市教育委員会 2010「浜の町貝塚第1次調査報告」「福岡埋蔵文化財年報Vol23」80~89頁
- 註2 福岡市教育委員会 1992「福岡城肥前堀第4次調査報告」福岡市埋蔵文化財報告書第294集
- 註3 福岡市教育委員会 1983「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ 福岡城址」福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集
- 註4 福岡市教育委員会 2006「警固丸山古墳第1次調査」「福岡埋蔵文化財年報Vol19」80~87頁
- 註5 前掲註3文献
- 註6 西公園東側の福岡船舶の岸壁下、水深7mの砂層中から古代から中世頃の須恵器甕が出土。(個人から福岡市博物館に寄贈された。) 1999「平成8年度福岡市博物館収蔵品目録14」
- 註7 三木隆行 1994「福岡城の櫓」福岡市教育委員会
- 註8 柴多一雄2013「I 総説」「新修福岡市史特別篇 福岡城」4頁
- 註9 中野等2013「近世の福岡城」「新修福岡市史特別篇 福岡城」25頁
- 註10 明治42年(1909)刊行の地図「新修福岡市史特別篇 福岡城」247頁掲載
- 註11 井澤洋一1995「筑前ににおける中世瓦の分類試案(上)」「福岡市博物館研究紀要」第5号85~108頁
- 註12 井澤洋一1996「筑前ににおける中世瓦の分類試案(下)」「福岡市博物館研究紀要」第6号60~101頁
- 註13 山崎信二2008「近世瓦の研究」同成社 122~132頁
- 註14 福岡市教育委員会 2007「福岡城跡-潮見櫓・時鐘整備に伴う確認調査報告-」福岡市埋蔵文化財調査報告書第969集
- 註15 坪井利弘1983「日本の瓦屋根」理工学社
- 註16 小川望2008「焼塙壺と近世の考古学」同成社
- 註17 小川望2001「飲食具2焼塙壺」「図説江戸考古学研究事典」柏書房
- 註18 小泉弘2001「喫茶2煙管」「図説江戸考古学研究事典」柏書房
- 註19 福岡地方史研究会古文書を読む会編2008「福岡藩無足組安見家三代記」の福岡藩奉行所配置図(安政三年十二月改)掲載図(林(美)家文書、福岡県地域史研究会所蔵)にある、文化九年図(第4図)では斎藤家の敷地が間口(東西)46間、入(南北)36間である。
- 註20 福岡市教育委員会 1980「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷」福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集
福岡市教育委員会 1990「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷(図録編)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集
- 註21 新宮町教育委員会 2000「朝鮮通信使客館跡」新宮町埋蔵文化財調査報告書第17集
- 註22 1間が6尺(182cm)に統一されるのは明治時代からで、それまでは京間や太閤検地による1間(6尺3寸)などがあり、1間の規格は各地域で異なり、統一されていなかった。江戸でも京間が主流であった。それは官大工など寺院・仏閣建設を受け持つ職人が京都系の職人が多かったことからと言われる。
- 註23 W.M.Warden&Coの弟子は英国が1870年代、他国の電信事業を進めるためにロンドンエリアで作ったものとされる。本地点出土のものはその初期に焼かれたものと思われる(大橋康二氏のご教示による)。
- 註24 前掲註14、註20文献
- 註25 岩国市教育委員会・山口県教育委員会 1995「岩国城跡(天守)」山口県埋蔵文化財調査報告第173集
- 註26 前掲註20文献

表3 各遺構出土陶磁器・土器観察表

※底洋もしくは高台洋

神國 番号	國版 番号	出土遺構・部位	種類	器 形	残存率	法量(cm) 口径(横径) 底径(深)	物語など(土器は色調)		文様(土器は調整)		技法の特徴・點など	产地	年代
							外縁	内縁	外縁	内縁	見込		
13-1	4-1	SD125-15X西側上層	陶器	小碗	略定存	9.2 3.6 4.9	眞い黄色釉	露胎	外面鉛鉛底	無	底部鉛鉛 黑苔あり	肥前高筑風	18C前半
13-2		SD125-21L-中層	陶器	土執基	1-2個	7.8	4.3	黑色釉 露胎		鉛付灰器物合む	黒苔か肥後か	18C E.-19C	
13-3	4-3	SD125-11K RI	陶器	瓶	完存	20 10 24.2	外面暗赤褐色 鉛鉛上に自然釉		口縁部織巻き付く		黒苔	18C末-19C	
13-4		SK043下層	染付	碗	1/3	14.6 5.6 6.4	内外面乳白色透明釉	(外)具足の文様、高台彌縫	微付輪錠き取り	更曲か福岡	18C後半-19C初		
13-5		SK043下層	陶器染付	瓶	1/2	11.8 4.6 7.1	厚め灰オーバー釉	露胎	微付鉛鉛を塗る	肥前	18C前半		
13-6		SK043西側	染付	碗	10.1 4.4 5.7	眞い透明釉	(外)松と鶴		微付鉛鉛を塗る	肥前	18C前半-中葉		
13-7	4-7	SK043下層	染付	瓶	略定存	13.5 7.7 3.3	光沢のある透明釉	唐草	ヨコ唐草 五葉花	微付鉛鉛を塗る	肥前	18C前半	
13-8	4-8	SK043下層	色絵	瓶	1/3	10.5 4.6 2.4	見込み灰-黄-青文様	青色團彌	露胎	高台昆虫文	肥前	18C後半-19C初	
13-9		SK043下層	陶器	コップ形	略定存	5.9 4.2 6.0	透明釉の底部露胎	(外)灰筋文	アラハレロウ唐草の影響	福岡小	18C-19C		
13-10		SK043(BH027)上層	陶器	蓋	2-3	10.8	3.1	内外面オーバー色絵	カキ目状旋	露胎	黒苔	18C前半-後半	
13-11		SK043下層	陶器	土執基	完存	7.4	4.2	菊瓣直角彌	露胎		福岡	18C後半-19C初	
13-12	4-12	SK043下層	陶器	碗	略定存	10.6 4.2 5.4	内外面乳白色透明釉		高台輪錠き取り鉛鉛付	高台	18C中-後半		
13-13		SK043下層	陶器	火入れ	1-4個	10.7 8.0 7.0	古式火入れの乳白色	露胎の貼付	輪錠二度剥け	高台高取系	18C-19C		
13-14		SK043下層	陶器	小盤	1-2個	11.2 7.0 9.6	内外面褐色-黑色直角		断続色鉛鉛に寸	福岡	18C-19C前半		
13-15	4-15	SK043下層	陶器	瓶	口縁	6.6	2.2	黑色釉 露胎		黒色釉-白色粘土磨毛目	肥前武雄窯	18C前半	
13-16		SK043下層	陶器	竹節瓶	口縁	9.9 19.0	1-7個	黒褐色直角	沈綿と作み	外底丸割	福岡高取系	18C頃	
13-17		SK043下層	陶器	壺	口縁	9.1	14.4	頬面-黒墨直角乳突泡		外底圓滑-ケズリ	福岡	18C-19C	
13-18	4-18	SK043下層	二割陶器 大腹木桶	1-6	90.0	19.0	断続色釉と白礪毛目	山水文	白化粧土上に鉄錆	更曲武雄窯近	17C後半-18C初		
13-19	4-19	SK043下層	陶器	アワビ形	1-4個	7.9	7.9	菊瓣直角の乳白色	アワビ形	菊唐草-二枚貝の足	福岡高取系	18C前半	
13-20		SK044上層	染付	小碗	略定存	56-57	3.8	52.2	青味のある透明釉	瓶-瓶-瓶-露胎	乳頭色毛ひ、豊付施り	肥前系	1820-1860年頃
13-21	4-21	SK044 R3	青磁	小碗	略定存	7.9	3.1	青味のある緑色直角		更曲大河内山窯			
13-22	4-22	SK044 R4	陶器	小碗	略定存	6.8	3.4	5.0	黑色釉に白斑を施す		福岡高取系	18C初-末	
13-23	4-23	SK044 R3	圓内系	土執基	耳	4.2	1.8	青味釉	露胎	外底丸割			
13-24		SK044 R1	陶器	灯明瓶	2-3	11.6 6.8 3.7	(内)灰オーバー色絵	底部丁寧なケズリ	微付	輪錠	18C-19C		
13-25		SK044	土脚置上層	七輪	口縁部	23.7			I型ナナ	外底自適スランプ	福岡	19C~	
13-26		SK045	染付	碗	1/2	11.4 4.8 7.3	内外面乳白色	(外) 断水-流水-四方唇	微付輪錠施り	肥前	18C		
13-27		SK045	染付	瓶	瓶部分			透明釉 露胎	露胎と透跋文	内面粗面れる	肥前	18C	
13-28		SK045	磁影	入物子	一部欠	4.8	10.9	和色釉 露胎		印W.M.ARDEN&CO 美国製	1869年		
13-29		SK047中-下層	染付	小・中・束口	2-3	10.2 3.8 5.1	内外面透明釉	微付輪錠	高台付拂拂	肥前系	18C後半-19C初		
13-30		SK047上層	染付	碗	口縁	2.1	11.8	内外面灰乳白色	竹叶垂	高台輪錠き取り	肥前系	18C	
13-31		SK047中-下層	染付	小盤	2-3	9.8 5.7 1.8	眞い透明釉	唐草、露胎	型押し-成型	肥前有田	18C後半-19C初		
13-32	4-32	SK047中-下層	色絵	輪花瓶	2-3	14.5 7.4 4.3	乳白色透明釉	輪花	色絵無	型押し-成型、微付り	肥前有田	18C後半-19C初	
13-33		SK047中-下層	染付	瓶	体部	8.0	10.8	乳白色直角	露胎	乳白色	高台ルミナ付	肥前有田	18C後半-19C初
13-34	4-34	SK047中-下層	青磁	瓶	1/2	5.4 4.8 5.5	断続オーバー色乳白色内腔		タケナツ	型作り、既底輪宝巻	肥前	18C	
13-35	4-35	SK047中-下層	色絵	花口瓶	瓶	8.5	8.2	露胎直角	梅鉢と唐草	型作り	肥前有田	18C後半-18C初	
13-36		SK047中-下層	陶器	瓶	1-2個	13.0 5.6 2.5	浅灰色直角		型打ち	天蓋	18C前半		
13-37	4-37	SK047 R1	陶器	竹節瓶	体部	9.6 19.5	鉛鉛-灰黒釉	沈綿と作み	外底丸割	福岡小石原窯			
13-38	4-38	SK047中-下層	陶器	大甕	1/4 43.8	31.8 137 23.8	断続-乳白色と乳白色	ギョウシ	瓶-一度削け、花瓣難解	福岡	18C後半-19C初		
13-39		SK047上層	陶器	茶碗	1-4個	12.0	72.0	黑色(灰)釉	底部ませ装飾	黑色釉に灰白色難解ける	福岡高取系	18C後半-19C初	
13-40	5-40	SK047中-下層	陶器	碗	略定存	9.5	4.7	暗褐色直角	露胎	黒色の重ね燒	肥前	17C末-18C前半	
13-41		SK047中-下層	土器	土器	略定存	7.6	5.8 1.5	褐色	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半	
13-42		SK047中-下層	土器	小盤	完存	7.5	5.4 1.1	褐色	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半	
13-43		SK047中-下層	土器	土器	完存	7.5	5.8 1.7	浅褐色直角	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半	
13-44		SK047中-下層	土器	小盤	完存	7.6 6.1 1.3	褐色	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半		
13-45		SK047中-下層	土器	小盤	底1-2	5.0 0.9	眞い-褐色	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半		
13-46		SK047中-下層	土器	白磁小	完存	7.5 6.0 0.9	浅黄色直角	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半		
13-47		SK047中-下層	土器	土器	完存	7.8 5.5 1.7	浅灰色直角	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半		
13-48		SK047中-下層	土器	小盤	完存	7.8 5.5 1.1	帶色	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半		
13-49		SK047中-下層	土器	土器	完存	7.5 5.4 1.1	眞い-褐色	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半		
13-50		SK047中-下層	土器	土器	完存	11.2 6.0 1.8	灰白色で外付垂	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	17C末-18C前半		
13-51		SK047中-下層	瓦質土器	火鉢	1/2	23.6 15.5 16.6	黒色	ヨリナガ-断続-露胎	同軸ナダ	外付垂	3-所の足	18C後半	
13-52		SK047中-下層	瓦質土器	火鉢	1/6	22.7 14.8	黒色	断続露胎	同軸ナダ	外付垂	印伊瓦	18C後半	
13-53		SK047	染付	碗	1/3	10.2 3.8 5.7	全面透明釉	城丸模	植物?	高台印伊瓦	1770-1810年		
13-54		SK048	染付	手皿	3/4	8.6 5.2 1.9	全面透明釉	帆船	帆船風景	打ひ、高台濃溝手、拂	肥前有田	18C後半-19C初	
13-55		SK048	色絵	碗	破片	5.3	4.2	褐色	褐色を淡青で彩色	宋磁形の外形容	型打ち成形	肥前三河内	19C
13-56		SK048	陶器	灯明瓶	1/2	6.7 4.6 3.2	露胎	ヨリナガ-ケズリ	ケズリ	受端無底心			
13-57		SK048	土器	小盤	1/2	8.4 6.1 1.5	眞い-褐色	同軸ナダ	同軸ナダ	土軸付合	肥前	18C後半	
13-58		SK102ベルト上層	白磁	壺口	略定存	4.8 1.6 3.4	全面白色直角			高台無底拂	肥前	18C後半	
13-59		SK102下層	白磁	壺口	1/3	6.4 4.4 6.3	乳白色的透明釉		微付拂	肥前	18C後半-19C前半		
13-60		SK102土器群	白磁	紅瓶	完存	4.0 2.4 1.4	灰白色直角下付手蓋	菊花形	型打ち成形	肥前	18C後半		
13-61		SK102土器群	白磁	紅瓶	略定存	4.9 1.5 1.5	灰白色直角下付手蓋	菊花形	型打ち成形	肥前	18C		

種類 番号	図版 番号	出土遺構・層位	施耐	器種	残存率	法量(cm)		物語など(土器は色画)		文様(土器部は調整)		技術の特徴・胎土など	産地	年代	
						口径	底面	高さ	外縁	内面	足跡				
17-62	SK102	R2	染付	手塙瓶	底部	9.4		透明釉		茎子文		高台円錐窯で造りあり 肥前有田	18C後半		
17-63	SK102		染付	(鉢頭瓶)	底部	4.0		透明釉		茎子文		高台円錐窯富翁山	肥前	18C後半	
17-64	SK102東隅上層群	色絵	花瓶	完全	3.9	26	8.2	新絵、褐色地、透明釉	草花、簡化した耳			型押し成型、内面磨砂	肥前?	18C代	
17-65	5-65	SK102ベルト上層	陶器	灯明瓶	略定存	9.1	34	2.9	暗褐色-黒褐色地	口縁一部剥む		外底大切で粘土塊付着	肥前	17C後半-18C代	
17-66	SK102上層群	土器器	灯明瓶	略定存	7.7	57	1.7	青い黄褐色	回転ナメ	回転ナメ	細め多く混入、口縁付着	勤上綿紗脱入			
17-67	SK102上層群	土器器	小皿	略定存	7.3	57	1.3	純い橙色	回転ナメアメメ	回転ナメ	細め多く混入、口縁付着	勤上綿紗脱入			
17-68	SK102 R1		土器器	灯明瓶	完全	8.0	51	1.4	純い橙色	回転ナメナメ	回転ナメ	細め多く混入、口縁付着	勤上綿紗脱入		
17-69	SK102上層群	土器器	小皿	1/2	7.8	56	1.4	橙色	回転ナメナメ	回転ナメ	細め多く混入、口縁付着	勤上綿紗脱入			
17-70	SK102 R1	土器器下层	外耳瓶	略定存	21.2	21.1	5.5	粉色	タケノ葉文	高台円錐窯ナメ	1月の耳、外側付着する、胎土やや粗い				
17-71	5-71	SK119	陶器	灰唐とし	完全	4.2	53	6.9	浅黄色地、外灰露胎	色々色で草花	口縁はむら、底部アズリ	京焼風陶器	肥前有田	18C後半-19C	
17-72	5-72	SK110	二彩陶器	大鉢	底部	15.0	14.4	武州系に眉毛目	波状の刷毛目	高台圓錐窯、ケズリ	肥前志賀西山	17C後半-18C初			
17-73	SK110上～中層	染付	フランク小皿	1/2	9.8	38	5.4	病オリーブ色	苦の輪桜梅	高台圓錐窯、香椎御影手	肥前佐佐見系	肥前	18C後半		
18-74	SK110	染付	美谷子小皿	1/2	10.0	36	5.1	青味のある透明釉	丘花・花	茎子文	高台内輪、付持ナメ	肥前有田	1770-1810年		
18-75	SK110 R3	染付	皿	1/3	10.6	64	2.0	透明釉	水引文		他の日野屋窯で脚付有田	肥前有田手前	18C後半-18C前		
18-76	SK110	染付	皿	完全	9.7	34	2.4	青味のある灰色地	さくら花		紙ぬれ胎脱き取り	肥前	18C後半-19C半期		
18-77	SK110	染付	美形小鉢	1/2	直径42		26	透明釉	高台青色口紅	四つ足付け	肥前有田	18C			
18-78	SK110 R2	陶器	小杯	1/3		32		乳白色良石釉		高台圓錐窯、重ね焼粘土	肥前手前	18C後半-19C			
18-79	SK110上～中層	陶器	碗	底部		38		オーリーブ色		高台圓錐窯	肥前志賀西山	18C後半			
18-80	SK110 R3	土器器	灯明瓶	略定存	7.2	54	1.0	粉色	回転ナメ	回転ナメ	紙ぬれ胎脱き取り	肥前有田手前	18C後半-19C半期		
21-81	SK115断割り	陶器	小皿	口縁付	4.2			厚めの灰白色釉	表面ビンホール	付持無、高台内ヒビ無れ	高台内輪、山	1610-1640年			
21-82	SK115断割り	白磁	皿	底部		7.0		明オリーブ灰色地		付持無、高台内ヒビ無れ	高台内輪、ケズリ	中國			
21-83	5-83	SK115断割り	陶器	皿	銅底部	9.1		昭和無釉		底部焼成時に斜材付着	福岡開化肥前	1590-17C初			
21-84	SK115断割り	瓦質土器	火鉢	口縁付	16.0			オーリーブ灰	昭和灰白色	白口白、白色砂多量混入					
18-85	SK121	陶器	小皿	1/3	7.4	32	3.2	灰青色-青白一帯	ハニカム	底部無釉	北部燒成で、粘土手前				
18-86	SK129-2R	染付	碗	1/2強	12.0	41	5.1	厚め灰白色地	回転	付持無	中国津州窯	17C前半			
18-87	SK129-1R	陶器	灯明瓶	略定完	14.2	56	4.1	Y字窓筋	昭和灰白色	付持者	重ね焼粘土	肥前	1590-1610年		
18-88	SK129-1R	陶器	大皿	口縁付				昭和灰白色地	苦の輪	付持無	外輪下半部露	福岡開化窯	17C初頭		
18-89	5-89	SK129-2R	陶器	白磁	1/3強	4.5		乳白色-淡黄色地		高台圓錐窯でケズリ	福岡	17C後半-18C			
18-90	SK162-1R	染付	梅花瓶	3/4	14.6	92	3.2	透明釉	唐草	付持無焼成	肥前有田	1660-1690年			
18-91	SK162-1R	陶器	小皿	1/3	7.0	28	3.6	灰青色-昭モリーブ		高台圓錐窯	肥前有田	18C			
18-92	SK162-1R	陶器	皿	1/2	15.0	8.0	3.3	青磁釉		付持無焼成	肥前高取	17C後半			
18-93	SK219上層	染付	小皿	1/2	5.4			青い透明釉	草花、葉、草花、葉	美差手	肥前有田	17C後半			
18-94	SK219	陶器	ミニチュア	1/3強	5.0	30	1.8	薄い透明釉		底部回転無切、直営施	西脇窯	18C33年			
18-95	SK220	陶器	碗	1/3強	14.6			灰白色の透明釉	荒文		高台圓錐窯でケズリ	福岡	1670-1680年		
18-96	SK220	白磁	碗	1/6	12.5		3.5	オーリーブ色		付持無焼成	肥前有田	1660-1690年			
18-97	SK220上面	青磁	皿	底1/2		6.5		昭和オーリーブ色			高台内輪土付着	中国越州常世	10C後半-11C中頃		
18-98	SK222	青磁	皿	1/6	14.0			厚めオーリーブ色			付持無	17C後半			
18-99	SK222	陶器	皿	1/4		4.6		灰白色地			付持無焼成	肥前	17C後半		
18-100	SK251	染付	小杯	1/6	9.0		4.3	青味がかった灰白色	文様あり	輪	輪	中国景徳鎮	17C前半		
18-101	SK251	白磁	碗	1/8	12.0			灰白色地			外輪シングル、地成不良	肥前	17C後半-18C		
18-102	SK262下層	染付	小皿	1/4	9.0		3.1	灰白色透明釉	施文		肥前系	18C			
18-103	SK262下層	陶器	丸碗	1/6	11.3	4.6	6.7	オーリーブ灰色地			肥前高取	18C			
18-104	SK262下層	陶器	回輪	1/6	10.0		6.1	浅灰色地			輪	西脇窯	18C後半		
18-105	SK262下層	陶器	碗	1/2	12.4	4.5	4.8	青白地、高台露胎			京焼風陶器	18C前半			
18-106	SK273-1R下層	染付	蓋付小鉢	1/2	9.0	5.4	5.0	青味がかった灰白色地	灰宝珠		付持無焼成	肥前	17C後半-18C		
18-107	SK273-1R上層	染付	碗	底部片		35		すくんだ透明釉	寄虫文	付持無焼成	肥前系	18C後半-19C前半			
19-108	5-108	SK273-2R下層	染付	碗	2/3	11.2	5.3	5.7	青味がかった透明釉	丁字縫隙	付持無焼成	肥前系、領也?	18C後半-19C前半		
19-109	SK273-1R下層	染付	広底碗	1/4	12.2	6.5	6.7	青味がかった灰白色地	アヤミ文	付持無焼成	肥前系	1780-1810年			
19-110	SK273-1R下層	染付	碗	底部		4.3		青味がかった透明釉	有・不明	五角花	肥前波佐依系	18C後半			
19-111	SK273-1R下層	染付	皿	1/4	17.6	8.4	3.5	灰沢のある透明釉	つる草	付持無	肥前良辰?	18C後半-末			
19-112	SK273-1R下層	染付	皿	1/3	10.0			青味がかった透明釉	回輪	五角花	付持無焼成	肥前波佐依系	18C中-後半		
19-113	SK273-1R下層	染付	小皿	底部		6.1		灰沢のある灰白色地		南希の講	付持無焼成	肥前	18C後半-19C		
19-114	SK273-2R	染付	小皿	3/4	64.75	35+45	1.8	灰白色(発色悪い)	草花		机影で盤打ち	肥前系	18C		
19-115	SK273-2R下層	染付	法事碗	1/4	9.8		2.5	灰沢を持つ透明釉	波紋と山水	如意宮文					
19-116	SK273-2R下層	染付	皿	1/6	10.2		2.7	灰沢を持つ透明釉	蔓草と垂葉	回輪	機影で盤打ち	肥前系	18C後半-19C		
19-117	3-117	SK273-2R下層	色絵	小杯	2/3	6.4	2.6	4.3	灰沢を持つ透明釉	梅	桃色-黄緑色での彩色	中国景徳鎮	18C後半-19C		
19-118	SK273-1R下層	染付	皿	1/4	9.4		1.7	灰沢を持つ透明釉	梅	赤-黄-黒の彩色、受盆無	肥前有田	18C			
19-119	SK273-1R上層	染付	小皿	1/3	13.4	4.3	3.7	灰沢を持つ灰白色地	鶴	鶴の日輪調	付持無焼成	肥前	18C後半-19C前半		
19-120	SK273-2R下層	白磁	小皿	1/4	11.4			灰沢を持つ透明釉			粗い質感	肥前	18C		
19-121	SK273-1R上層	白磁	小杯	略定存	6.6	2.6	2.3	灰沢のある灰白色地			微付き無焼成	肥前	18C		
19-122	SK273-1R下層	白磁	皿	底1/2		4.4		灰沢のある灰白色地			鶴の日輪調	京焼風陶器	18C後半		
19-123	SK273-1R下層	白磁	碗	2/3	15.2	5.0	5.5	灰沢のある灰白色地			高台圓錐窯を盛る	肥前	18C中-末		
19-124	SK273-2R下層	白磁	虹皿	1/3	4.4	1.4	1.4	灰沢のある灰白色地			高台圓錐窯、塑作り	肥前	18C		

種類 番号	図版 番号	出土遺構・層位	種類	器種	残存率	法量(cm) 口径 底径 高さ	物語など(土器は色画)			文様(土器部は調整)			技法の特徴・駁点など	産地	年代
							外縁	内面	外縁	内面	足跡				
19-125	SK273-25×下層	白磁	紅皿	1・2周	4.4	1.5	1.3	光沢のある灰白色釉	菊花形	高台部露胎, 烧作り	肥前	18C後半~19C初			
19-126	SK273-15×上層	白磁	紅皿	完存	4.2	1.4	1.3	音柱がかった灰白色釉	菊花形	高台部露胎, 烧作り	肥前	18C後半~19C初			
19-127	SK273-15×上層	白磁	紅皿	完存	4.2	1.6	1.2	光沢のある灰白色釉	菊花形	高台部露胎, 烧作り	肥前	18C後半~19C初			
19-128	SK273-25×上層	白磁	合身	完存	2.4	3.1	1.1	光沢を失つ透明釉		花瓶脚, 口縁脚引き取り	肥前	18C末~19C中葉			
19-129	S-129	SK273-15×上層	陶器	蓋	1/2	8.0	3.2	肩周角直角	露胎	船形	南九州か	19C			
19-130	SK273-15×上層	陶器	蓋	まごと巻	1/3	2.8		フリーハンド	露胎	船上, 梅食粉っぽい	関西系陶器	18C後半~19C			
19-131	SK273-15×上層	陶器	丸皿	1/3	8.6	3.2	5.4	純・黄色透明釉		高台部露胎, クリ出し	関西系陶器	18C後半			
19-132	SK273-15×上層	陶器	碗	1/2	9.2	3.4	5.3	薄い透明釉, 色付入		高台部露胎	関西系陶器	18C後半			
19-133	S-133	SK273-15×上層	陶器	水差	1/2		3.4		赤色		体部有模様	備前	18C~19C		
20-134	S-134	SK273-15×上層	陶器	油差	口縁欠	5.6	8.0上	黒褐色直角	露胎	6角舟手付	高台部泥付	肥前	18C~19C		
20-135	SK273-15×上層	土器	小皿	1/4	7.6	3.4	1.4	純・白色	回転ナデ	回転糸切	筋立, やや粗い				
20-136	SK273-15×下層	瓦質土器	火鉢	1/7	33.2			純・黒色	ミガキ	横ナデ	外表面のスタンプ, 赤色粒子含む				
20-137	SK273-15×下層	瓦質土器	火鉢	1/6	22.8			黒色	ナラシミタケ	ナダ	外表面スタンプ, 6mm内砂粒や混入				
20-138	SK273-15×下層	瓦質土器	火鉢	1/2	28.0	19.2	19.0	黒色	黄い青緑色	工具ナデ+ナラシミタケ	外表面花, 3寸足見, 手丁, 梅食, SK295と接合				
20-139	SK273-15×下層	瓦質土器	火鉢	破片				肩周・底周青灰色	ナラシミタケ	重ね模様	外表面花, 1cm内白色粒子混入				
20-140	SK273-15×下層	生土器	有蓋壺	口縁片				黄い青緑色		内厚減し調整不明	口縁丸めり, 1~2mm白色砂多く混入				
20-141	SK278-25×下層	柴付	碗	略	完存	9.8	3.5	5.1	青味がかった透明釉	草花十字	「寿」字	高台部露胎, 回転糸取り	肥前系・福岡	18C後半~19C初	
20-142	SK278-25×	柴付	皿	底部		6.6			光沢を持つ透明釉	圓錐脚	山水楼閣画	高台部風化年輪画, 肥前有田	18C末~19C前半		
20-143	SK278-25×	柴付	底部	1・2周	10.3		2.9	音柱がかった透明釉	割れ口	直線脚	井手瀬部輪接着	肥前系	1780~1810年		
20-144	SK278-25×	柴付	小皿	1/2	7.5	3.0	3.1	光沢を持つ透明釉	露胎	重ね模様付	肥前	18C			
20-145	SK278-25×	柴付	小杯	底部		2.6		光沢を持つ透明釉	露胎	直線脚	付骨, 指握り	肥前	19C後半~中葉		
20-146	SK278-25×	白磁	紅皿	1/2	3.9	1.5	1.2	光沢を持つ灰白色釉	菊花形		高台部露胎, 型作り	肥前	18C後半		
20-147	SK278-25×	白磁	紅皿	完存	4.3	1.4	1.3	光沢を持つ灰白色釉	菊花形		高台部露胎, 烧作り	肥前	18C末~19C後半		
20-148	SK278-25×下層	陶器	皿	1・2周	18.4	8.4	6.9	ナラシ模様と直角		重ね模様	高台部露胎付	福岡小代作	18C後半~19C初		
20-149	S-149	SK278R1-R2	陶器	深鉢	1/4	30.6	11.6	13.3	暗褐色直角	10本单位の鉢口	底内青色ねじ跡付	福岡小代作(6寸鉢)	18C頃		
20-150	SK288R2	白磁	碗	口縁脚付				光沢を持つ透明釉			端反り	中国	11C後半~12C前半		
20-151	SK288R2	白磁	碗	口縁				光沢を持つ透明釉			中国	宋			
20-152	SK295	白磁	皿	1/6	13.0	4.7	3.7	光沢を持つ透明釉		船の日輪調	世付に羅列付	肥前系	18C後半~19C前半		
20-153	SK295	陶器	碗	口	1/4	10.0		光沢を持つ透明釉		鉢底と白化粧上	船上セメント裏蓋付	肥前系	18C後半~19C		
20-154	SK317R2	陶器	碗	底部		4.2		浅黄色~黒褐色			高台部露胎でケズリ	肥前	17C第2~3回半		
21-155	4-155	SK049	柴付	瓶	口縁欠	4.5	9.25上		草唐草と蘭			肥前	18C前半		
21-156	S-156	SK056	陶器	向付		破片		黄味がかった灰白色釉			天馬志郎・越前	17C初頭			
21-157	SK062	陶器	網目脚付	口縁	3.4			黒色の直角	露胎		肥前	18C半			
21-158	SK062	陶器	碗	1/3	10.0		10.0上	浅黄色明輪			肥前正燒窯脇	18C前半			
21-159	SK062	陶器	碗	1/2周	11.6	4.6	4.4	浅黄色			肥前正燒窯脇	18C前半			
21-160	4-160	SK063	色絵	皿	1/3周	12.2	6.7	2.7	光沢を持つ透明釉	ナラシ模様と直角	見込みの日輪調	肥前	18C		
21-161	SK063	柴付	盤	1/2周	5.2	3.3	3.3	光沢を持つ透明釉	「唐波紋」圖錐	「壽」字	付骨に羅列付	肥前	18C		
21-162	SK063	白磁	紅皿	完存	4.2	1.6	1.1	光沢を持つ灰白色釉	菊花形		高台部露胎, 型作り	肥前	18C代		
21-163	4-163	SK063	陶器	ランコロ	完存	3.8	3.8	4.7	黒色の直角	下足跡	火照に灯芯あり	萩原小代	18C~19C		
21-164	SK145	陶器	盤	1/8	14.8			灰白色直角			福岡高吸収	17C			
21-165	SK145	白磁	紅皿	完存	4.2	1.2	1.4	光沢を持つ透明釉	菊花形	壁打ち, 重ね模様直角	肥前	18C			
21-166	SK145	白磁	紅皿	完存	1.9	2.6	6.8	光沢を持つ灰白色釉	伝	香りき模様付, 付骨付	肥前有田	18C後半~19C中頃			
21-167	SK151	柴付	碗	口縁片				露胎の透明釉			天保手, 二次被熱	中國	17C前半		
21-168	5-168	SK222	陶器	碗	略	12.1	4.1	4.5	浅黄色明輪	跡・而方・直・准	高台部露胎, 型作り	肥前正燒窯脇	18C前半		
21-169	SK222	陶器	碗	ヒヨウツク	底部	5.7	4.1	4.5	鉢底滑る		外底部斜軸糸切	肥前	18C~19C		
22-170	SK245	土器	小皿	完存	5.8	4.0	2.3	浅黄色		岸底溝歪不	船上	18C			
21-171	SK263	白磁	紅皿	完存	4.8	1.5	1.5	光沢を持つ灰白色釉	菊花形	外表面露胎で型作り	肥前	18C			
21-172	SK263	陶器	碗	口縁脚付				銅錆付			肥前	17C第2~3回半			
21-173	5-173	SK263	陶器	二官脚付		39		黃褐色直角			底露胎, 回転糸切	福岡高吸	18C後半		
21-174	SK263	陶器	皿	底部		90		露胎の透明釉			洋舟手, 二次被熱	中國	17C前半		
21-175	SK263R1	土器	青花上	七輪	底部	20.5		直角			手平口部あり, 二脚	肥前正燒窯脇	18C~19C		
22-176	SK316	柴付	皿	1/7	11.0			光沢を持つ透明釉	(外)青花とう苞口字		底の發色良い	福岡高吸	1610~1640年		
22-177	SK316	陶器	类?	131/8	298			露胎の直角			模様付	17C前半			
22-178	SK316	陶器	体	1/7	23.6			露胎直角	露胎		外底部露胎	中国	17C前半		
22-179	SK316	土器	小皿	1/3	10.0			浅黄色	回転ナデ	回転糸切	福岡小代作	18C後半~19C			
22-180	SK316	土器	青花上	脚	1/7	26.0		直角	工具ナデ	手平口部あり, 二脚	肥前	18C~19C			
22-181	5-181	SP123	柴付	水滴	小片		4.8	光沢を持つ透明釉	露胎	内面部露胎, 橋脚毛目	手焼付, 脚付直角	肥前	18C後半~19C前半		
22-182	SP244	柴付	皿	1/8	11.6			露胎直角	露胎		中国青花	17C前半			
22-183	SP293	白磁	碗	1/8	12.2			光沢を持つ透明釉			模様付	17C~18C			
22-184	SP312	土器	明鏡か	2/3	16.4	6.8	1.9	純・黄褐色	露胎	カギボ付	外底部露胎直角	中国	17C前半		
22-185	SP314	柴付	碗	1/10	13.0			光沢を持つ透明釉	露胎		底露胎糸切	中国	17C前半		
22-186	5-186	SP321	陶器	蓋?	蓋	9.1	3.9	3.3	青花と直角		底露胎	肥前	17C		
22-187	SP331	陶器	瓶	1/3周	12.8	4.4	6.0	光沢を持つ灰白色		手目	外底部露胎ケズリ	1590~1610年			

碑固 番号	同版 番号	出土遺構・層位	種類	器種	残存率	法量(cm)		軸部など(土器は色調)		文様(土器部は調整)		技法の特徴・點込など	产地	年代		
						口径	底径	外周	内面	外周	内面	足跡				
22-188	SP331	土器部	小鉢	1/4	9.8	6.0	2.5	純い白色	圓筒ナデ	摩減	回転赤系	土・良				
23-189	6-189	SK119土器集中品	陶器	甕	1/3	18.2	14.5	27.8	厚めの黒褐色陶器	猪子日彌き	底基押込孔	縦木鉢合	高台窯場屋	17C後半		
23-190	SK039	陶器	灰板状	実存	1.3	—	—	光沢を持つ白色物	外底(セ83) ?記号あり	製作り、接合ライン残る	繩びがく	近代				
23-191	SK076	陶器	輪入子持	破片	—	—	—	褐色	褐色	ミガキに近い工具ナデ	角面取り、方形の楚口胎	土やや粗い	英國製			
23-192	SK076	陶器	土器蓋土器	假炉	底部片	—	—	褐色	褐色	—	—	—	—			
23-193	16-193	SX141陶器	陶器	四脚付円筒	1/2	14.5	9.4	5.1	錫風の透明感、外光反射	銀鉛文様	高台窯筒底状G:層名	錫バカ	19C			
23-194	SX142	陶器	輪入子持	—	—	—	—	明赤色輪	スタンプあり	リムM MINTON WESTMINSTER	英國製	1869年				
23-195	SX160	陶器	白磁	ミニチュア集	片	1.4	—	光沢を持つ透明感	—	—	内面輪胎、反具か	肥前	18C後			
23-196	SX160	陶器	蓋	定存	6.4	—	—	輪胎直角輪	—	—	「西」系地圖、地名や不吉	肥前	19C			
23-197	SX161	陶器	甕付	瓶	1/3	15.8	9.2	5.1	青味がかった透明感	圓筒、告章、圓筒、底?	菊、松	日吉門呂、色能差地	肥前	18C後半-19C初		
23-198	SX165	陶器	瓶	1/4	12.4	4.6	3.6	光沢を持つ透明感	瓶下す露滴	見足付上口	高台大型のケリ	肥前街津か	1590-1610			
23-199	SX165	陶器	小瓶	底2/3	—	3.7	瓦リマー印	—	—	高台内裏書「朝用」	西系	18C後半-19C前半				
23-200	SX182	陶器	甕付	片口小杯	定存	2.6	1.8	2.4	光沢を持つ白色物	直口メガネ	—	（外）肩油愛染の體	近代(20C前半)			
23-201	5-201	Fx247	陶器	製瓶	瓶	1/3	11.6	5.2	2.6	光沢を持つオーバー色	—	—	高台輪胎、輪胎口押	白		
23-202	SX258	陶器	瓶	瓶	1/6	11.8	4.0	4.0	光沢を持つオーバー色	—	—	外光輪胎、ケリ、墨書き	肥前	1590-1610年		
23-203	SX271	陶器	甕	甕	1/3	11.2	12.0	21.6	写真オーバー黄色輪	圓筒直角輪、直角輪上かけ	口縁斜脚輪	福岡西郷山	19C			
23-204	SX271	陶器	乳首付の甕	蓋	2/3	9.8	4.8	—	暗赤色輪	—	押しし、内面指押	西系	18C後半			
23-205	SX272	陶器	瓦質土器	火鉢	1/3	36.0	—	黑色	丁寧な土ギヤ	—	土・丸山の層物あり	西系	18C後半			
23-206	SX275	陶器	甕	瓶	1/6	20.8	7.2	7.2	瓶オーバー輪	朝毛目	延辺赤ね毛瓶	番付き軸付着し、轍筋	肥前	18C後半-19C初		
23-207	SX337	陶器	瓶	大瓶	小瓶	—	—	白化粧土器上	—	—	高台輪胎	西系	18C後半			
23-208	SE1071	耐火土・中層	耐火土	甕	1/2	11.2	4.3	3.8	光沢を持つ透明感	菊草花	高台「大明新年」跡	肥前	17C末-18C初			
23-209	SE1071	上層	白磁	小杯	1/28	6.0	2.8	3.7	青味を帯び透明感	—	—	投げ込み跡取り	肥前	17C後半		
23-210	SE1071	耐火土・中層	青磁	小柄	1/3	4.6	3.0	3.5	オーバー白磁、内面直輪	—	—	投げ付き鉄趾を擦る	更曲	17C中葉-末		
23-211	SE1071	耐火土・中層	色輪	壺の端台	破片	—	—	透明感	露滴	—	押しし、成型	肥前	17C末-18C初			
23-212	SE1071	上層(上面)	陶器	甕	1/3	9.2	4.6	6.3	光沢を持つ褐色輪	—	—	高台露滴	西系	18C後半		
23-213	SE1071	上層	丸瓶	丸瓶	1/6	12.2	—	—	純い黃褐色輪	—	—	輪胎は削れる	肥前北福岡	17C後半-18C前半		
23-214	SE1071	上層(上面)	陶器	小瓶	1/4	11.6	5.0	6.5	白化粧土器透明感	朝毛目	見ぬかが消がれる	輪胎か	17C			
23-215	SE1071	上層(上面)	陶器	縦袖瓶	1/6	12.0	—	—	暗灰オーバー色輪	—	—	口縁部が青・朱色	肥前内野山	17C第4-18C前半		
23-216	5-216	SE1071	上層(上面)	陶器	縦袖四耳甕	耳破片	—	—	緑輪	輪胎の耳	内面唇口の暗オーバー色輪	肥前武雄	17C中頃			
23-217	SE1071	上層(上面)	土器部	小鉢	1/8	9.6	7.0	1.2	純い褐色	摩減不明	回転赤系	部屋E2所掌丸あり				
23-218	SE1071	上層	土器部	甕小頭	1/2	52	36	73.0	純い褐色	眉・眉口	工具ナデ	需しし-3-5m砂利多量入				
23-219	SE1071	上層	土器部	甕小頭	破片	48.6	32.8	7.3	純い褐色	眉・眉口	工具ナデナダ	外成露毛目、全青色、赤色多く混入				
23-220	3-220	SE1273	井筒上面土器	陶器	向付	2/3	11.2	11.7	4.7	透明感後側縦輪	鉢底で舟形・水草、草を擦ぐ	底部露動で足立き、模型作	美濃越職	豪長組		
23-221	SE1273	井筒上面R18	甕	瓶	1/2	—	4.0	—	深・浅色輪、底部下斜割	テカリナデ	口縁残	摩減か	摩減か	1590-1610年		
23-222	SE1273	井筒上面R19	陶器	瓦玉	底部	6.5	5.7	2.4	オーバー白磁、直輪	草花文	—	高台部。ケリで露滴	福岡	17C		
23-223	SK1001	染付	蓋付小鉢	3/4	9.8	5.3	3.6	光沢を持つ透明感	—	—	口縁輪胎き取り	肥前有田	17C末-18C前半			
23-224	SK1001	陶器	陶軽油付	瓶	1/3	12.2	6.8	6.8	灰オーバー色輪	鐵枝文	—	肥前	18C前半			
23-225	6-225	SK1001ベルト下	陶器	蘿石立	1/28	11.8	5.1	6.4	暗オーバー色輪	飛翔状ケツリ	高台ケリズ、露滴	肥前	18C後半-18C前半			
23-226	6-226	SK1001ベルト下	陶器	乳頭蓋立	1/4	5.4	—	—	黃褐色輪	耳	内面豊壁が残る	輪	寛文(1661-1673)			
23-227	6-227	SK1001ベルト下	陶器	小要立	1/部少	10.3	9.8	12.9	暗オーバー色輪	青灰輪上かけ	底部露動	摩減か	摩減か	17C末-18C前半		
23-228	SK1001黒土器	陶器	二重瓶	一部少	9.2	5.5	—	—	灰輪	摩減口縁	摩減	持付	肥前	18C前半		
23-229	SK1001ベルト下	土器部	小鉢	残存	7.9	5.8	1.4	純い褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転赤系	軸付	17C末-18C前半			
23-230	SK1001	①	土器蓋土器	丸鉢	—	—	—	純い褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	軸付赤	軸付	17C末-18C前半			
23-231	SK1003	甕	甕	1/3	9.0	3.4	4.9	純い褐色	鉄筋で横文	—	高台ケリズで露滴	肥前直燒風磨	18C前半			
23-232	SK1005	甕	甕	底3/4	4.2	—	—	純い褐色	緑・黄・白色で鉢	—	高台露滴	西系	18C末			
23-233	6-233	SK1005上層	陶器	折腹甕	1/3	11.2	5.8	2.3	オーバー色輪	口縁内側花状模様	見足付の日輪輪き取り	輪	天通	16C後半		
23-234	SK1005	白磁	瓶	1/6	11.2	—	—	—	—	—	ハラ切又	外周・半輪露	中国			
23-235	SK1008	白磁	小杯	1/4	7.0	—	—	光沢のある透明感	—	—	肥前	17C末-18C前半				
23-236	SK1008	R1	染付	瓶	一部少	19.6	14.7	—	光沢のある灰褐色輪	竹と桜木	3.8E7.51t	コシニヤ克印、削付	肥前佐久伊萬	18C中-末		
23-237	SK1008上層	色輪	化粧小鉢	1/28	9.8	5.4	2.6	光沢を持つ透明感	花?	口縁全垂輪	山水・風景	肥前有田	18C第2-3回半			
23-238	SK1008	白磁	蓋	2/3	9.8	—	—	光沢を持つ透明感	—	—	内面露滴	肥前	18C中-末			
23-239	6-239	SK1008上層	陶器	二彩輪	2/3	11.0	4.3	7.1	黒褐色・淡褐色の兼	高台露滴、番付き拂り	摩減	摩減直燒風磨	18C前半			
23-240	SK1008	陶器	瓶	1/4	13.4	4.8	4.3	灰オーバー色輪	—	—	摩減	摩減	1610-1630年			
23-241	SK1008上層	陶器	蓋	—	—	—	—	白灰色輪	—	—	被熱し難発治している	輪削(高取)	17C-18C			
23-242	3-242	SK1008-R1	陶器	散葉	郎部	—	—	赤褐色	丁寧な研磨	摩減	摩減	摩減	中國宜興窯	18C		
23-243	SK1008	陶器	油差	破片	—	—	—	黒褐色輪	摩減	摩減	摩減	摩減	摩減	18C前半		
23-244	SK1008	土器	灯明瓶	定存	8.0	6.4	3.7	淡黄褐色輪	丁寧なナデ	丁寧なナデ	摩減	摩減	古物			
23-245	SK1008	綠釉輪胎	把手付	破片	—	—	—	黃褐色輪	—	—	—	—	古物			
23-246	SK1014	瓦群中	染付	小杯	底部	2.2	—	—	厚の灰白輪	文様	粘土付	高台露滴、粗粒粉付	肥前	1630-1640年代		
23-247	SK1014	染付	小杯	1/4	7.8	—	—	灰白色輪	—	—	黒い鉄筋文様	外周白化粧上浅心	肥前系	18C		
23-248	SK1014	染付	小瓶	3/4	10.2	4.1	4.7	光沢を持つ灰白色輪	白灰輪	—	番付拂り	高台露滴	肥前	18C前半-中層		
23-249	6-249	SK1014上面	染付	蓋無蓋	完全	11.4	3.4	—	光沢を持つ灰白色輪	梅と花	口縁全垂露	抹手	抹手露滴	肥前有田	18C後半	
23-250	SK1014瓦群中	色輪	水滴	破片	—	—	—	黃褐色輪	露滴	—	摩減	摩減	摩減	18C頃		

種類 番号	図版 番号	出土遺構・層位	種類	器種	残存率	法線(cm)		物語など(土器は色画)		文様(土器器は調整)		技法の特徴・胎土など	産地	年代	
						口径	底径	高さ	外側	内側	外側	内側			
31-251	SK1014	陶器	碗	1/2割	11.4	4.6	5.3	網干リーフ	白山赤堀基	白山赤堀基の上絞け		高台付き露胎。ナデ	福岡高取	18C	
31-252	SK1014	陶器	蓋付縁身片					波状銀色					肥前	18C前半	
33-253	SK1016	柴付	小碗	1/3	10.4	4.2	5.5	光沢を持つ透明釉	松竹梅	高台付	露胎	高台付(露胎), 柴付と拂り	肥前有田	18C前半	
33-254	SK1016	柴付	蓋付香炉	1/3	10.2	6.2	3.1	光沢を持つ透明釉	山本赤堀基	口縁内赤い		肥の日置高台で柴付露胎	肥前	18C後半	
33-255	6-255	SK1016	陶器	角皿	破片			白化粧土					肥の日置高台で書付露胎	18C前半	
33-256	6-256	SK1016	陶器	角皿	破片			白化粧土					肥の日置高台で書付露胎	18C前半	
31-257	SK1018	柴付	蓋物の身	1/2	5.2	2.6	2.7	光沢を持つ透明釉	桐花丸	夏草文6文		255と同一個体か	京焼乾山支流	18C前半	
31-258	SK1018	柴付	蓋物の蓋	1/5	10.8	2.9	2.9	光沢を持つ透明釉	文字文	桐花丸	印文	天井部胎絞き取り	肥前	18C前半～中葉	
31-259	SK1018	柴付	合子蓋	1/4割	5.0	1.2	光沢を持つ透明釉	桐花丸	印文	桐花丸	印文	肥前有田	17C後半		
31-260	SK1018	柴付	合子身	1/2	4.0	2.6	2.6	光沢を持つ透明釉	桐花丸	印文	桐花丸	肥の日高台, 沼河	18C前半～沼河		
31-261	SK1018上～中層	陶器	中皿	1/4	20.8	6.9	7.7	黒裏色	横柄毛目	波状, 梅毛目	高台露胎, 白化粧土, 他	肥前	18C第2-3回半期		
31-262	SK1018	陶器	茶入	1/2	3.0			4.0～7割	輪踏		外底露胎, 外底部赤泥	福岡高取	17C		
31-263	SK1018	俎志郎	类	小破片				灰	格子口印	当て赤字ナデ			古代以前		
31-264	SK1019	柴付	小皿	1/2割	7.4	2.5	4.2	黄裏色	波状銀色	波状銀色	波状銀色	波成不良, 表面度具	肥前	18C前半	
31-265	SK1019上層	柴付	皿	1/4	14.0	9.2	3.4	青味だった透明釉	喜多丸, 銀葉	桐花丸	印文	肥前有田	1690代～18C後半		
31-266	SK1019南側	柴付	碗	破片	6.2			光沢を持つ透明釉	八瓣文	印文	高台露胎, 拂り	肥前流佐足系	18C中葉～末		
31-267	SK1019	磁器	碗	破片	5.0			青釉				柴付(鉢)有田	17C		
31-268	6-268	SK1019	陶器	小鉢	2.3	9.4	5.3	網干色	黑色と並上	五重の花びら状		柴付と繩締き取り	福岡	18C	
31-269	7-269	SK1019	陶器	手付小皿	碗	8.4	4.0	5.9	黒裏色	桐花色	桐花色	延辺物語	相間	18C	
31-270	6-270	SK1019	陶器	波造	断定存	3.8	5.2	11.9	11.7	波造	波造	世付き露胎, 瓢付	肥前	17C後半～18C初め	
31-271	SK1019	陶器	小鉢	2.9	9.4	3.4	8.4	光沢を持つ浅黄色	波造文	波造文	桐花色	桐花色の上絞け	関西系陶器	18C	
31-272	SK1019	陶器	小碗	1/3	9.9	3.0	5.1	浜黄色	浜黄色	波造文	高台露胎, 丁寧なナデ	関西系陶器	18C後半		
32-273	6-273	SK1019北側R3	陶器	茶碗	3/4	11.4	4.0	5.5	白化粧土	口縁波造二度引け	口縁波造二度引け	波付き露胎, ケズリ	朝鮮族狀物	17C後半～18C	
32-274	6-274	SK1019西北側上部	陶器	網干口鉢	1/2	14.6	5.1	7.1	黒裏色	白化粧土	桐花月	波付き露胎, 波	肥前平山(内) 沼河	18C前半	
32-275	SK1019RJ-1	陶器	片口鉢	1/4	20.8			灰黄色				カキ目赤紫	桐花月	18C前半	
32-276	SK1019北側R5	陶器	小皿	破片	8.4	6.6	1.5	明赤色	明赤色	波造ナデ	波造ナデ	波造ナデ	桐花色	18C前半	
32-277	SK1019	土器	小皿	2/3割	8.0	5.4	1.5	純い白色	純い白色	波造ナデ	波造ナデ	波造ナデ	豊前里, 瓢付多く(良人)	18C	
32-278	SK1019	土器	瓶	破片	1/4	13.0	8.0	2.2	純い白色	純い白色	波造ナデ	波造ナデ	波造ナデ	桐花月, 内底墨化	18C
32-279	SK1008	土器	豆甕	破片	1/3	9.0		青い銀色	青い銀色	波造ナデ	波造ナデ	波造ナデ	桐花月, 内外端付, 豆甕か	18C	
32-280	SK1019北側R3	土器直上	七輪か	底部		19.0		青い銀色	青い銀色	波造ナデ	波造ナデ	波造ナデ	桐花月, 直角, 内底墨化	18C	
32-281	SK1020南側	白磁	小仔	底部	24			光沢を持つ灰白色				高台露胎, 拂り	肥前	1630～1640年代	
32-282	SK1020	灰・灰灰	色鉢	破片				施釉	施釉	赤	孔	孔がある	肥前有田	18C	
32-283	6-283	SK1020 R6	陶器	碗	破片	11.3	4.4	6.4	黑色			世付き繩締き取り, 拂り	福岡	18C	
32-284	SK1020 R3	陶器	蓋付の身	1/4	13.0	6.0	8.9	黒裏色	白化粧土	(外)白化粧土刷毛目	高台露胎3次, 波板1番目	肥前	18C前半		
32-285	SK1020 R4	陶器	蓋付の身	1/3	14.0	6.5	8.7	純い白色		(外)白化粧土刷毛目	高台露胎, 波付き拂り	肥前	17C		
32-286	SK1020 R11	陶器	深皿	1/2	13.8	8.4	4.8	オーリーフ白色		(外)白化粧土を意識的に使う	波付き露胎, 波	波付き露胎, 波	18C後半		
32-287	6-287	SK1020 R1	陶器	片口鉢	3/4	15.6	5.2	6.0	オーリーフ白色	波造	波造	波付き繩締き取り	肥前	18C第2-3回半期	
32-288	SK1020 R14	陶器	蓋か口付	1/3	13.0	6.2		黒裏色		桐花毛目	桐花毛目	桐花毛目	18C後半		
32-289	SK1020 R8	陶器	二脚土瓶	1/4	10.4	9.2		褐色, 黑, 銀色				波付き	肥前	18C中～後半	
32-290	SK1020 R10	陶器	波造	波造	2.1	5.8	1.0	黑色				波付き繩締き取り, 拂り	肥前	17C末～18C前半	
32-291	SK1020東・灰灰(下層)	陶器	蓋付の蓋	1/2	9.9	5.0	2.9	青い銀色	波状銀色	波状銀色	波状銀色	波付き露胎, 波, 波	肥前	17C後半～18C前半	
32-292	SK1020 R3	土器	小皿	2/3	7.8	5.8	1.5	純い白色	純い白色	波造ナデ	波造ナデ	波造ナデ	桐花月	18C後半	
32-293	SK1023	柴付	碗	完全	16.0	4.0	5.3	光沢を持つ透明釉	八海梅	波造文	波造文	波造文	桐花月	18C後半	
32-294	SK1023ベルト	陶器	碗	口付	9.8	4.2	5.2	光沢を持つ透明釉	波造文	波造文	波造文	桐花月	18C後半		
32-295	SK1023ベルト	陶器	碗	1/2	10.0	4.4	5.4	黑裏色		口縁波造	口縁波造	口縁波造	桐花月	18C	
32-296	SK1023	土器	灯明用具	安室	8.0	6.3	1.5	黒裏色	黒裏色	桐花毛目	桐花毛目	桐花毛目	金剛鳥粉粒子, 丸, 球泡付	18C	
32-297	SK1023	土器	瓶	1/4	11.6			黒裏色	黒裏色	桐花毛目	桐花毛目	桐花毛目	桐花月, 黒, 色斑化する。	18C	
32-298	SK1048	柴付	蓋	1/3	13.4	7.8		光沢を持つ透明釉	波草	波草文	波草文	波付き拂り, 波, 波	肥前	18C後半	
32-299	7-299	SK1048	色鉢	水滴	1/2割	9.13	5.1	5.8	光沢を持つ透明釉	波草文	波草文	波付き拂り, 波, 波	肥前	18C後半	
33-300	7-300	SK1052上層	陶器	密蓋	1/3割	11.6	4.16	オーリーフ白色	白化粧土	桐花毛目	桐花毛目	桐花毛目	桐花月, 波, 波, 波	肥前有田	17C後半
33-301	SK1052上層	陶器	瓶	小片				黒裏色					桐花月, 波, 波, 波	18C	
33-302	SK1052	土器	波造			12.4×7.1	3.8	赤銀色		桐毛口ナデ			桐花月, 波, 波, 波	18C	
33-303	7-303	SK1056 R11	柴付	編花瓶	1/2	14.5	8.0	2.8	光沢を持つ透明釉	コロボラテ	桐花毛目	桐花毛目	桐花月, 波, 波, 波	肥前有田	18C第2-3回半期
33-304	SK1056	陶器	茶碗	1/2割	10.5	4.5	7.6	黒裏色					桐花月, 波, 波, 波	18C後半	
34-305	SK1065	柴付	小皿	完全	9.9	3.6	5.0	灰裏色	透明明鏡	吉海御御	吉海御	吉海御	吉海御, 波, 波, 波	肥前	18C後半
34-306	SK1065	柴付	小皿・束縫	1/2割	10.0	3.3	4.9	光沢を持つ灰白色	壽字文	壽字文	壽字文	波付き拂り	肥前	1770～1850年代	
34-307	SK1065	柴付	小皿・束縫	底部欠	10.1			光沢を持つ灰白色	壽字文	壽字文	壽字文	波付き拂り	肥前	1770～1850年代	
34-308	SK1065	柴付	口付	完全	7.3	5.4	6.1	くすんだ白色	波造文	波付き拂り	波付き拂り	波付き拂り	波付き拂り	18C後半	
34-309	SK1065	柴付	蓋	1/3	13.4			光沢を持つ透明釉	波の文	波の文	波の文	波の文	波の文	18C後半	
34-310	SK1065	柴付	蓋	完全	8.8			光沢を持つ透明釉	(外)輪宝文, 兵部款	波造文	波造文	波造文	波造文	18C第1四子葉～18C前	
34-311	SK1065	白磁	小丸瓶	完全	9.0	3.3	6.0	光沢を持つ透明釉	(外)輪宝文, 兵部款	波造文	波造文	波造文	波造文	18C後半	
34-312	SK1065	陶器	手付瓶	完全	8.9	5.2	5.5	灰裏色	手付	手付	手付	手付	手付	18C後半	
34-313	SK1065	土器	小皿	1/2	8.6	6.0	1.3	純い白色	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	18C	

種別 番号	図版 番号	出土遺構・層位	施耐	器種	残存率	法量(cm) (口径×直徑×厚)	物語など(土器は色画)			文様(土器部は調整)		技法の特徴・胎土など	産地	年代	
							外縁	内面	外縁	内面	足跡				
34-314	SK1065	土器部	粗	略定存	11.4	6.0	1.9	鶴灰色	外縁ナメ	回転ナメ	鶴灰色化、全周舟形窓含む。				
34-315	SK1065	瓦質土器	火鉢	片				鶴灰色	ミガキ	横刷毛目	外縁スタンプ、勘子模様				
34-316	7-316	SK1067	陶器	粗	1/2	19.8	7.8	5.7	灰褐色	外縁毛刷毛の施加あり	高台形窓含む。			18C後半-19C前半	
34-317	SK1067	土器部土器	不明	小片				灰褐色	ミガキ	横刷毛目	高台形窓含む。				
34-318	SK1074-2	染付	粗	粗		9.0		光沢を持つ透明釉	唐草?	ミガキ、墨石	高台形窓含む。			1660-1690年	
34-319	SK1074-19	白磁	粗	1/4	16.0			光沢を持つ透明釉	唐草?	ミガキ、墨石	高台形窓含む。			1660-1690年	
34-320	7-320	SK1074-2	染付	伝雀部	略定形	8.0	4.2	6.7	灰白色釉、兔形窓	唐草?	ミガキ	高台形窓含む。		17C後半	
34-321	7-321	SK1074-2	色絵	伝雀部	脚部			光沢を持つ灰白色釉	毛乞などござる	唐草?	ミガキ	脚部駒歎で、軌部ケズリ	肥前有田	17C後半-18C前半	
34-322	SK1074-2	陶器	碗	粗	1/2弱	10.8	7.0	4.6	光沢ナリーグロス釉	唐草?	ミガキ	脚部駒歎で、軌部ケズリ	肥前有田	17C後半-18C前半	
34-323	SK1074-2	陶器	粗	粗	1/6	12.6		音指の御紋様	砂目直	砂目直	微付き施錦引き取り、砂付有	肥前内野山	17C後半-18C前半		
34-324	SK1074-2	陶器	粗	粗	1/4	14.0	4.6	3.7	鶴灰色釉	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	福島小石原	17C		
34-325	SK1074-18	陶器	粗	粗	1/2弱	8.4		鶴灰色釉	露筋	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	福岡会	18C		
34-326	SK1074-R5	瓦質土器	火鉢	底1/3		15.8		灰釉	暗灰色	サナフアシ直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前内野山	17C後半-18C前半		
34-327	SK1121	陶器	粗	粗	1/6	5.2		青(?)の施加、千利休風	脚筋	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前小福岡	17C初め		
34-328	SX1123-2上～下層	染付	碗	粗	1/8	12.4		黄(?)の施加、黄白地青	青い瀬織	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	中国瀬州窯	17C前半		
34-329	3-329	SX1123-2上層	色絵	粗	底部			光沢を持つ透明釉	牡丹、太陽石	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	中国瀬州窯	17C前半		
34-330	SX1123-2丸群1丁	陶器	粗	粗	1/2弱			光沢青白釉	牡丹、千利休風	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前有田	1590-1610年		
34-331	SX1123-2丸群1丁	陶器	碗	底部		4.3		灰白地青白	牡丹、千利休風	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前有田	17C前半		
34-332	SX1123-2下層	陶器	碗	底	1/2	4.8		灰白地青白	輪上ビンホール入る	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前有田	17C前半		
34-333	SX1123-2下層	陶器	二彩瓶	小片				黒褐色釉	青白地灰白色	口縁暗オーラー青白釉	口縁暗オーラー青白釉	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前	17C中～中葉
34-334	SX1123-2群1丁	陶器	瓶詰	1/8	30.2			暗赤色	青条文	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前	17C前半		
34-335	SX1123-2群1丁	陶器	瓶詰	瓶				断面赤色	青条文	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	福岡会	17C		
34-336	SX1123-2群1丁	陶器	瓶詰	瓶	1/3-1/2	5.0		断面赤色	青条文	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	福岡会	17C		
34-337	SX1123-2上～下層	土器部	小皿	粗	3/4	8.4	6.2	1.5	鶴灰色	回転ナメ	回転ナメ	砂付付き施錦引き取り、砂付有	中国龍泉窯系	13C	
34-338	SX1123-2	土器部	小皿	粗	3/4	8.8	7.0	1.4	鶴灰色	回転ナメ	回転ナメ	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前	17C前半	
34-339	SX1123-2上～下層	土器部	灯明瓶	1/2	9.6	6.6	1.5	鶴灰色	回転ナメ	回転ナメ	内面暗毛化、世紀末到着有り	中国瀬州窯系	17C前半		
34-340	SX1123-2群1丁	土器部	灯明瓶	1/2	11.0	6.6	1.5	鶴灰色	回転ナメ	回転ナメ	内面暗毛化、世紀末到着有り	中国瀬州窯系	17C前半		
34-341	SX1123-2上～下層	土器部土器	鍋	粗	1/6	26.8		鶴灰色	脚筋	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前有田	17C後半		
34-342	SK1168	青磁	碗	細片				鶴灰色釉	脚筋	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	中国龍泉窯系	13C		
34-343	SK1168	陶器	瓶詰	細片				明示細釉	脚筋	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	福岡会	17C		
34-344	7-344	SK1170	染付	碗	1/4弱	13.0		青(?)の施加	唐草?	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前初期伊万里	1610-1630年		
34-345	3-345	SK1170	染付	碗	1/4弱	14.2		青(?)がかった灰白色地	露筋	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	中国瀬州窯系	17C前半		
34-346	SK1170	陶器	粗	口縁片				白磁釉	折線模	砂目直	砂付付き施錦引き取り、砂付有	肥前	17C前半		
34-347	SK1170-7群	陶器	粗	粗	底1/3	7.4		明オーラー灰白色	脚筋	砂目直	高台形窓ねぬ粘土付着	福岡内野山	17C前半		
34-348	SK1170-7群	陶器	粗	粗	1/3	11.0		黒褐色釉	脚筋	砂目直	燒成不良や不具	福岡会	17C		
34-349	7-349	SK1171-7群	染付	碗	1/4弱	12.0		くすんだ灰オーラー色	唐草?	砂目直	燒成不良や不具	肥前初期伊万里	1610-1630年		
34-350	SK1171-7南側	染付	碗	底	1/10弱	約13		光沢を持つ透明釉	不明	砂目直	燒成不良や不具	中国瀬州窯系	17C前半		
34-351	SK1171	染付	碗	底	1/3	12.0		光沢を持つ透明釉	露筋	砂目直	燒成不良や不具	中国瀬州窯系	17C前半		
34-352	3-352	SK1171-7南側	陶器	粗	底	7.6		光沢を持つ透明釉	鶴灰色	砂目直	燒成不良や不具	初期京焼	元末に降		
34-353	SK1171-7南側	陶器	粗	粗	底1/3	7.4		明オーラー灰白色	脚筋	砂目直	燒成不良や不具	肥前	1610-1630年		
34-354	SK1170-7群	陶器	粗	粗	1/3	11.0		黒褐色釉	脚筋	砂目直	燒成不良や不具	福岡会	17C頃		
34-355	SK1171-7群	陶器	粗	粗	1/4	12.0		くすんだ灰オーラー色	唐草?	砂目直	燒成不良や不具	肥前初期伊万里	1610-1630年		
34-356	3-356	SK1172	陶器	向付	1/2	(9.0)×11.1	4.4	銅鋸目、鉛灰地	露筋	砂目直	燒成不良や不具	高台形窓	1590-1610年		
34-357	7-357	SK1172	陶器	向付	略定存	11.5	4.6	6.9	露筋	砂目直	燒成不良や不具	高台形窓	17C後半		
34-358	SK1194	陶器	水滴	底	1/2弱	6.4		青(?)色	露筋	砂目直	燒成不良や不具	高台形窓	17C後半		
34-359	SK1194	瓦質土器	大溝小口	瓶片	20	21		オーラー黒色	脚筋	砂目直	燒成不良や不具	高台形窓	17C後半		
34-360	SK1195	陶器	把手	瓶片				白化粧土壁	沈拂状伏枝	砂目直	燒成不良や不具	福岡高取系	17C前半		
34-361	SK1196-4側	白磁	小皿	完全	4.5	2.5	1.6	光沢を持つ灰白色地		砂目直	ミニチュア?	肥前	17C後半-18C前半		
34-362	SK1196-4側	白磁	碗	1/4	11.6			光沢を持つ透明釉		砂目直	燒成不良や不具	肥前有田	17C後半		
34-363	SK1196-4側	陶器	碗	略定存	10.7	5.6	2.8	暗青灰色釉	露筋	砂目直	燒成不良や不具	17C末-18C初葉			
34-364	SK1196-4側	陶器	粗	口縁片				風景(灰・青・黒・黄)	脚筋	砂目直	燒成不良や不具	肥前	17C前半		
34-365	SK1196-4側	陶器	粗	粗	1/2	25.6	11.0	9.7	露筋	砂目直	燒成不良や不具	福岡高取系	17C後半-18C初葉		
34-366	SK1196-4側	陶器	粗	粗	1/2	25.6	11.0	9.7	露筋	砂目直	燒成不良や不具	福岡高取系	17C後半-18C初葉		
34-367	SK1196-4側	陶器	粗	粗	1/6	11.8	8.6	2.3	鶴灰色	砂目直	砂目直	砂目直	福岡高取系	17C後半	
34-368	SK1196-4側	土器部	粗	粗	1/4	12.0	6.6	2.4	浅青色釉	砂目直	砂目直	砂目直	福岡高取系	17C後半	
34-369	SK1181-3	陶器	碗	底	1/6	11.0		ホリナリーブ色	露筋	砂目直	砂目直	砂目直	福岡高取系	17C後半	
34-370	7-370	SK1181-3	陶器	碗	1/2	14.0		ホリナリーブ色	露筋	砂目直	砂目直	砂目直	福岡高取系	17C後半	
34-371	SK1229	陶器	灰釉粗	底部				灰褐色	脚筋	砂目直	砂目直	砂目直	福岡高取系	17C後半	
34-372	SK1229	土器部	粗	小片	1/6	9.0	6.0	1.6	鶴灰色	脚筋	砂目直	砂目直	福岡高取系	17C後半	
34-373	SK1229	土器部	粗	小片	1/6	9.8	6.8	1.9	鶴灰色	脚筋	砂目直	砂目直	福岡高取系	17C後半	
34-374	SK1229	土器部	粗	底部				鶴灰色	脚筋	砂目直	砂目直	砂目直	福岡高取系	17C後半	
34-375	SK1006	染付	大皿	小片				くすんだ灰白色	唐草(つる)花	砂目直	砂目直	砂目直	肥前	18C前半	
34-376	7-376	SX1032(落込み)	陶器	窓口	略定存	6.0	34	5.2	明褐色釉	浜青色粘土の刷毛目文様	砂目直	砂目直	砂目直	肥前	1590-1610年

神奈 番号	図版 番号	出土遺構・層位	種類	器種	残存率	法量(cm) 口径 底径 高さ	物差など(土器は色調)		文様(土器部は調整)	技法の特徴・駆込など	产地	年代	
							外縁 内縁	外縁 内縁					
41-377	SK1053上層	染付	小杯	定穴	5.3	1.6	2.3	光沢を持つ透明釉	毛足と本皮足	骨付で軸絞り取り、拂り	肥前	18C後半	
41-378	SK1053上層	陶器	チンコロ	定穴	4.1	4.0	4.9	軸絞り色	打基部あり	外底輪刷	底部承切で、0.5cm孔あり	福岡	18C
41-379	SK1053上層	瓦質土器	土器大口	1・2弱	12.5	10.6	10.8	黒色	研磨加工	軸絞り、拂毛	軸絞り	18C後半	
41-380	SK1054	陶器	向付	小片				灰オーバー色釉	鉄鉋	鉄鉋	表面磨きを施している	発川・美濃	17C
41-381	SK1060-1	陶器	直	1・2弱	14.6	4.5	4.4	淡青色の色刷り(風化)			高台でクリ出しがある	福岡上野・高田	17C前半
41-382	SK1094	陶器	小碗	1・2弱	9.0	3.6	6.0	薄い黄褐色	鉄鉋の旋文		高台丁寧なケズリと露胎	肥前庄周窯跡	18C前半
41-383	SK1130上層	染付	粗目小鉢	小片	11.0			光沢を持つ透明釉	裏	山船焼灰	被焼している	肥前有田	17C後半
41-384	SK1130	白磁	直	1・2弱	13.0	4.8	4.1	光沢のある灰白色	粗い質入	骨付で軸絞り取り	肥前	17C後半-18C早期	
41-385	SK1130上層	陶器	粗目盤か 圓片				灰オーバー色釉			表面磨きが施す。	福岡	17C	
41-386	SK1132上層	色釉	小箱13	1・2弱	4.8	3.4	3.2	光沢のある灰白色	扇と草花	骨付で織り	肥前有田	18C後半	
41-387	SK1135	陶器	灰釉鉢	1/2		4.6		灰オーバー色刷り		日皿	高台で露胎、ケズリ	肥前	1600-1630年
41-388	SK1135	陶器	灰釉鉢	1/2		4.2		灰オーバー色釉		日皿	高台で露胎、ケズリ	肥前	1600-1630年
41-389	7-389	SK1135	陶器	茶碗	1/2	11.4	4.3	7.1	薄い色刷りで露胎色抜け		高台で淡い露胎土	肥前(福岡の可能性あり) 1600-1630	
41-390	SK1137	陶器	小瓶	定穴	1.9	3.7	10.0	汚い露胎で露胎	若松文	骨付で軸絞り取り	肥前	18C後半	
42-391	SK1192	土器器	灯明皿	3/4	12.2	4.7	3.2	灰	回転ナメ	回転ナメ	口縁を保付着、筋付	福岡	18C後半
42-392	SK1197	染付	碗	1/5	11.4			青緑がかった透明釉	草花文	回転ナメ	中国津州窯	17C前半	
42-393	7-393	SK1197	陶器	施釉風炉	小片			施オーバー色刷り	扇形留め	回転ナメ	一毫端面	17C	
42-394	SK1199	色釉	直	小片				光沢を持つ透明釉	(内)赤・青・黄色の文様	高台内蔵あり	肥前有田	18C前半	
42-395	SK1199	染付	瓶	13瓣片	4.0			光沢を持つ透明釉	若松文	骨付で軸絞り	肥前有田	18C前半	
42-396	SK1199	陶器	小瓶	1・3弱	8.2	4.2	4.7	暗オーバー色釉	細かい質入	高台露胎	18C		
42-397	SK1199	陶器	小瓶	2/3		3.0		暗オーバー色釉		高台露胎	西海陶器	18C	
42-398	SK1199	土器器	灯明皿	略定形	8.4	6.0	1.3	純い青色で剥げける	回転ナメ	回転ナメ	内外螺付着、船上筋	18C	
42-399	SK1201	染付	小瓶	1/4	8.8			光沢を持つ透明釉	草花と扇	露胎	中国景德镇	17C前半	
42-400	SK1203	染付	碗	1/2	9.8	4.0	5.3	光沢を持つ透明釉	扇形留め	骨付で織り	肥前	18C前半-中葉	
42-401	SK1203	染付	小瓶小鉢等	3/4	10.4		(2.7)	光沢を持つ透明釉	草花・露胎	受部露胎、移鉢付着	肥前有田	18C後半-19C早期	
42-402	SK1203	陶器	小瓶	1/3	10.2	4.2	5.3	黒褐色釉	白化作上の網目	高台部内輪絞り	肥前	18C前半	
43-403	16-403	SK1221	陶器	吊手鉢	1・2弱	16.7	6.7	赤色(朱)は船形	骨付で付	側り口台で露胎	福岡國內	18C初め	
43-404	SK1221	陶器	灰釉鉢	1/4		4.8		灰褐色		移ノ目	高台露胎で、糸付着	肥前か	17C前半
43-405	SK1222	陶器	灰釉鉢	1/6	33.0			灰褐色	横ナメ	4条目	福岡	17C	
43-406	SK1221	土器器	灯明皿	定穴	10.2	6.5	1.8	純い青色	回転ナメ	回転ナメ	内螺付着、船上筋	18C	
43-407	SK1221 R1	土器器	灯明皿	2/3	10.6	4.5	2.3	灰褐色・黒褐色	回転ナメ	回転ナメ	内螺付着	18C	
43-408	3-408	SK1230	五形色花	絞花瓶	小片			青い透明釉	草花	青・青緑の色調	中国景德镇	17C前半	
43-409	3-409	SK1240 R2	染付	直	1/5	13.4	7.6	2.8	光沢のある灰白色	玉取獅子		中国景德镇	17C前半
43-410	SK1240下層	青磁	大瓶	小片				オーバー色釉			中國慶原窯系 14-15C 前半		
43-411	SK1240	陶器	灰釉鉢	小片				灰褐色			福岡	17C初頭	
43-412	3-412	SK1240 R1	陶器	向付	小片	6.8	7.2	4.0	乳白色志野釉	黒褐色の鉄筋文様	継状の足が残る	美濃志野焼	16C末
43-413	SK1240	土器器	小瓶	1/3	9.8	7.0	1.5	純い青色	摩滅し不明	到輪系			
42-414	SK1252-1253	土器器	灯明皿	4/5	10.5	7.8	2.0	浅青色	摩滅し不明	到輪系	内螺使用で黒化する		
42-415	SK1266 R2	土器器	灯明皿	定穴	9.8	7.4	1.8	純い青色	摩滅する少到輪ナメ	回輪系	内螺部使用で黒化する		
42-416	SK1267	陶器	系瓶	1/6	11.2			オーバー黒色			福岡	17C	
41-417	H17SX118石削前	陶器	直	1/4弱	12.6			灰黄色			表面風化が進む	福岡	17C前半
41-418	H17SX118石削前	陶器	灰小鉢	13瓣片				灰オーバー色(墨)と白			表面風化が進む	福岡	17C
41-419	H17SX118石削前	陶器	灰小鉢	1/4		10.4		灰(?)			外底粘土付着	福岡	17C前半
42-420	SX1227	染付	碗	1/9	10.0			光沢を持つ透明釉	口縁に模様	回輪系	中国景德镇	17C前半	
42-421	SX1227	陶器	合子蓋	1/2	5.1			オーバー灰釉			口縁部軸絞り取りで赤帯	18C	
42-422	SX1227-1	陶器	向付	小片				乳白色釉			河内志野釉	美濃志野焼	16C末
42-423	SX1227	陶器	碗					内外黒色、船形で彩色			高台露胎、重ね軸付着	肥前	1600-1630年
42-424	SX1227	陶器	直		4.6			オーバー灰釉			骨付で軸絞り取り、船付	福岡・17C初頭	
42-425	SX1227-2側上げ	陶器	灰釉鉢	小片				オーバー灰釉			溝縁口縁	福岡小堀前	17C初頭
42-426	SX1227	陶器	灰釉鉢	1/6	12.8			オーバー灰釉			福岡	17C初頭	
42-427	SX1227 R2	土器器	小瓶	3/4	9.8	7.0	2.1	純い青色	摩滅不明	回転ナメ	内螺部軸絞り取りで黒ずむ		
42-428	SX1227 R6	土器器	直	1/2	10.2	7.4	1.6	純い青色	回転ナメ	ナメ	骨付で軸絞り合せ		
42-429	SX1227 R3	土器器	直	1/2弱	10.8	7.6	1.8	灰黄色	回転ナメ	ナメ	骨付で軸絞り		
42-430	SX1227 R5	土器器	灯明皿	1/2弱	10.2	5.6	2.3	帶色・黒色	摩滅・不明	到輪系	骨付で軸絞り、内螺黒化する		
42-431	SX1227	土器器	直	1/3	10.8	7.7	2.1	橙色	ナメ	回輪系	骨付で軸絞り		
42-432	SX1227	土器器	直	(1/4)	5.0			純い青色	回転ナメ	回転ナメ	高部被熱し黒ずむ		
41-433	SPI046	陶器	佐和板	刷毛底				黒色釉に舟形舟上巻			底部露胎、骨付で残る	福岡上野下	17C
41-434	SPI1082	陶器	碗	1/2	5.6			オーバー灰釉			高台骨付で輪縁	発川・美濃	17C
41-435	SPI1082	陶器	直	1/3	20.6	5.6	5.7	黒褐色釉	毛の目刷り		高台露胎、重ね軸刷	福岡小堀(火口)	17C末-18C前半
43-436	SPI1185	染付	直	4/4		8.0		光沢を持つ透明釉	矢羽文	五瓣花	高台内「溝縁」、船付	肥前有田山	18C前半
43-437	SPI209	土器器	灯明皿	1/2	10.2	7.0	2.5	純い青色	回転ナメ	回輪系	骨付で口縁、内螺付着		
43-438	SPI2125	陶器	直小	1/6	12.0			浅黃色			内面下干露胎	肥前か	1500-1610
43-439	SPI248	陶器	直	圓片				黑色(黒)釉			福岡	17C-18C前半	

番号	図版番号	出土遺構・層位	種類	器種	残存率	法量(cm) 口径 底径 高さ	物差など(土器は色調)			文様(土器部は調整)	技法の特徴・歴史など	産地	年代
							外縁	内面	足跡				
43-440	SP1248	陶器	向付	口縁片			乳白色の志野	黒灰色の縦線		向付か角粗片	美濃	16C末	
43-441	SP1253	土器器	小皿	1.6	10.2	6.2	1.9	薄い黃褐色	回転ナデ	回転ナデからナデ	勤士精良		
43-442	SP1272	土器器	灯明皿	安在	10.3	6.8	1.9	薄い燈籠色	回転ナデ	城成不明	回転舟切	勤士精良、口縁葉付舟	
43-443	SP1278	土器器	灯明皿	略定在	10.0	7.3	1.9	薄い燈籠色	回転ナデ	回転ナデ	勤士精良	口縁葉付舟	
43-444	SP1278	土器器	灯明皿	略定在	9.9	6.5	1.9	薄い燈籠色	回転ナデ	調整不明	回転舟切	勤士精良、口縁黒化される	
43-445	SP1288	染付	碗	1/4	9.8	4.2	5.1	光沢のある灰白色釉	二重巻口文	高台振り	肥前	18C前半	
41-446	1081 地面	陶器	向付	底部			灰オーリーブ赤褐色	跳躍文様		勤士精良を丸めた足が付く	美濃	16C末	
43-447	1228B山側下げ	陶器	呑手皿	底1/2	5.0		灰オーリーブ灰黑色	細かい貫入がある		透付き搔き取り	福岡	17C後半	
42-448	1189横槽面内れ	染付	碗	1.8	11.2		青味がかった透明釉	跳躍と文字	縦線		中国深州窯	17C前半	
42-449	1189横槽面内れ	白磁	碗	細片			灰黄色透明釉			玉縁碗	中国		
44-450	第2面	染付	小鉢	小片			青味がかった透明釉	花卉文		美濃小手	中国景德镇	17C前半	
44-451	I区2面南東2-9茶湯器	青磁	瓶	小片			緑灰色釉	浮文あり		肥前	17C中~末		
44-452	1220整地面	染付	碗	1.6	9.2		灰オーリーブ色釉	(外)薄垂れ銀の音色釉		肥前	18C前半		
44-453	1222地面	陶器	灰粗粒	1/4	6.6		露點	純い黄褐色	勤士目板	外輪露點でケズリ	肥前小手肥前	17C初頭	
44-454	I-3区北側1面削下げ	染付	碗	1.2	10.4	3.9	薄りのある透明釉	松竹梅		透付き搔き取り	肥前	18C前半	
44-455	B-1面床粘土下	染付	碗	1/2周	11.8	4.6	6.2	光沢を持つ透明釉	帆船と圓輪	高台離れ跡付舟	肥前手	17C後半	
44-456	I-3区北側1面削下げ	白磁	鏡口	2/3周	5.7	3.4	3.6	光沢を持つ透明釉		透付き搔き取り	肥前	18C後半	
44-457	I区1面表様	白磁	紅皿	安在	4.7	1.7	1.7	光沢を持つ透明釉	菊花形	外面露點文「ヤ」	肥前	18C後半	
44-458	II区南西隅下げ	陶器	瓶	底1/2	4.4		薄い黃色			高台露點文「浦」	肥前竜尾窯	元始(1600~1710)	
44-459	7-458 II区10C中央1面削下げ	陶器	お皿黒裏	底部片	6.0	(7.2)	青色釉	源始		内部鉢挽付舟	肥前・美濃		
44-460	II区北側地下横槽面	陶器	天目茶碗	1.6	12.5		灰褐色~暗褐色	(裏)2次洗		袖一痕跡き連れ	福岡	17C	
44-461	I区2区B-1面削面	染付	蓋	略定存	11.3	3.4	頃い灰褐色	(外)雲龍文で絞状の描み	口縁露點、並び透船と舟	肥前長く手	18C後期~19C前半		
44-462	II区2区D-1面削面	陶器	小皿	底部		4.8	厚め灰褐色~黒褐色		高台ケズリ、露點	福岡か	18C後半~19C前半		
44-463	II区2区D-1面削断下げ	陶器	蓋	1/2	8.4	5.6	2.1	灰オーリーブカッティング	天井花弁状詰込み	関東吉澤窯	19C		
44-464	I区2面削時	染付	水滴	小片	21×4.0	3.5	暗褐色釉	方形容の水滴		肥前有田	18C前半		
44-465	II区3区北側1面削下げ	染付	碗	1/2	10.4	3.9	5.1	薄った透明釉	松竹梅	透付き搔き取り	肥前	18C前半	
44-466	II区北側地下横槽面	染付	小広東碗	1/2	10.2	3.8	5.0	光沢を持つ灰白色釉	能と文字	不明文様	高台露點、透付き挽り	肥前有田	1770~1810年
44-467	I区2区C区底削面	染付	組	1.6	20.2		光沢を持つ透明釉	丸と喜字	透船と露點	中國景德鎮	17C前半		
44-468	I区2面整地面下げ	陶器	灰粗粒	底片	7.8	7.5	1.9	灰褐色	丸と喜字	瓦玉に軸用か	肥前手	1600~1630年	
44-469	I区2面西整地面	染付	伝化組	1/3	14.9	8.6	4.6	光沢を持つ透明釉	透草	透船	肥前手	18C前半~中葉	
44-470	I区2区B-1面削面	染付	絵花瓶	1/2周	14.0	7.8	4.0	光沢を持つ透明釉	透草	高台透け付舟	肥前	18C前半	
44-471	II区3区C区2面削下げ	陶器	灰粗粒	底1/2	5.4		灰オーリーブ色釉			透けぬれ底	肥前手	17C初頭	
44-472	I区2面削ト阐释者	陶器	灰粗粒	底1/2	5.0		光沢を持つ灰黄色			勤士目	高台露點、透付き挽り	福岡手肥前	1590~1610年
44-473	II区3区2面削下げ	陶器	碗	1/2周	10.6	6.0	6.0	光沢を持つ灰黄色	圓に口付	高台露點、内部削則(須留)	肥前立燒窯場	1660~1680	
44-474	I区2面削時直角面	陶器	小盤	小片	1.6	7.0		黒褐色	灰白背景上剥け	袖付と波し	福岡	18C	
45-475	1区2面削整地面	陶器	把手付小皿	安在	7.8	4.0	5.4	光沢のある黒色釉	把手付	透付き堀と化粧土舟	福岡手肥前	18C後半~19C前半	
45-476	I区2面削整地面	陶器	灰粗粒	1/10	24.6		灰褐色			内面露點	福岡手肥前	1500~1610	
45-477	I区2面西側削時	陶器	灰粗粒	1/3	5.0		(外)オーリーブ色釉			内面露點	福岡手肥前	18C~19C前半	
45-478	I区2面西側削時	陶器	碗	2/3	4.4		灰オーリーブ色釉			高台露點、ケズリナゲ	中国廬南窯	18C後半	
45-479	II区C区2面削下げ	陶器	碗	1/2	4.8		光沢のある浅い黄色			高台露點、ケズリナゲ	肥前立燒窯場	18C第1四半期	
45-480	II区C区1面削下げ	陶器	二彩鉢	1/4	10.6		灰黄色釉	白化施上による刷毛モルタル	高台ケズリ、露點	肥前	17C後半		
45-481	I区2面削西側削時	陶器	灰粗粒	底片			灰褐色			茶壺	信楽	17C	
45-482	II区3区C区2面削下げ	陶器	瓶	底片	1/2	9.8	褐褐色	10本竿位の脚		外底部回転舟切	肥前	17C後半	
45-483	I区2面削1面削下げ	土器器	巻子唐片	底部片			高い赤褐色			勤士目	外底部内削舟切		
45-484	I区2面削西側削時	土器器	巻子唐片	底部片			純い褐色			勤士精良、外底墨書き舟			
45-485	I区2面削中央1.5ト1上削	土器器	灯明皿	3/4	12.4	8.2	1.7	明褐色	回転ナデ	回転舟切	口縁内外黒化、勤士精良		
45-486	II区2面削(1)西側削時	土器器	灯明皿	1/2周	10.4	7.0	1.7	純い燈籠色	回転ナデ	回転舟切	口縁内外黒化、勤士精良		
45-487	II区2面削(2)西側削地	土器器	小皿	4/5	6.6	5.0	1.6	純い燈籠色	回転ナデ	回転舟切	勤士精良、舟付き無輪舟	中国	13C~14C初
45-488	II区3面削西側削時	土器器	皿	1/2	12.4	8.2	1.7	明褐色	回転ナデ	回転舟切	勤士精良、内底黒化		
45-489	II区3区C区1面削下げ	灰漆器	环身	1/7			暗灰色	回転ナデ		勤士精良			
46-490	SD1275-3区	白磁	碗	細片+1b型	1/10	14.8		灰オーリーブ色釉			勤士精良、黑色撒子合せ	中国	12C
46-491	SD1275-3区一下解	白磁	碗	V-4型	細片		灰黃色			勤士精良	中国	12C~13C	
46-492	SD1275-3区一下解	白磁	皿	細片			灰オーリーブ色釉			勤士精良	中国	12C	
46-493	SD1275-3区一下解	白磁	小皿	小皿Ⅱ型	1/6	5.2	オーリーブ灰褐色			勤士精良、舟付き無輪舟	中国	13C~14C初	
46-494	SD1275-2区一下解	原漆器	蓋	細片			灰色	回転ナデ		勤士精良	古代BC		
46-495	SD1275-2区一下解	原漆器	高台付环	底部片			灰色	回転ナデ		勤士精良	古代BC		

IV 考 察

1. 調査のまとめ

調査で得られた成果は多いが、紙面の都合上、主な成果を箇条書き的に記述してまとめとしたい。

① 遺構面の時期と遺構

調査で確認した遺構の時期は大きくまとめて3面、第1面：江戸後期郡役所時代以降、第2面：福岡城下町造成の17世紀初めから19世紀初め、第3面：福岡城下町以前である。

第1面では礎石建物を検出した。礎石間距離は約2mに近い。文化9（1812）年、当地にあった藩中老の斎藤家屋敷が火災で焼け、そこに福岡城内にあった福岡藩奉行所（郡役所）が移ってきた。福岡県地域史研究所蔵の林（美）家文書の中に福岡藩奉行所配置図^(注19)がある。調査で検出した礎石列と縮尺を合わせ比較した結果、建物の位置図のラインにはほぼ一致したので、郡役所（奉行所）の建物礎石と判断した（第62図）。この礎石列は図の御郡役所、上座・下座・嘉麻・穂波・那珂・席田・夜須・御笠御役所あたりの建物と廊下の柱の礎石にあたると思われる。福岡城の御鷹屋敷の建物礎石も2m間隔で並び^(注20)、新宮町相島の朝鮮通信使客館跡調査^(注21)でも柱間隔は1m、2mの間隔で、京間の間竿を用いていたものと思われる。福岡藩では公的建物などの柱間は京間の6尺5寸（1.97m）を基準とし、藩奉行所礎石建物もほぼ京間基準^(注22)で作られたものと言える。

第2面ではI・II区では瓦溜り、III区では建物礎石と思われる礎石群と井戸、土坑を検出したが、礎石群からは建物をまとめ得なかった。しかし礎石は北東側に集中し、III区東側に屋敷の主要建物があったと思われる。屋敷の門は南側が内堀北側の道であるので、南側に正門があったのであろう。井戸は瓦井戸である。SE1273は上面に17世紀前半の織部焼などの遺物があり、城下町初期の遺構と言えよう。井筒内は玉砂利が敷詰めてあり、作りは良い。周辺に礎石があり、建替え時に埋められた可能性がある。SK1182の玉砂利がある遺構は庭にある蹲踞^(注23)のような施設の一部かも知れない。I区調査区で検出した大振りの石が配列されていた大型土坑群（SK1008やSK1014・1019・1020など）は底に粘土が貼られてはいなかったが、枯れ山水などのような庭園の池の可能性があり、礎石が集められていたSX1193は庭に伴う施設で、屋敷の西側に庭園があった可能性がある。

第3面は中世の東西方向溝である。この溝から近世以前も一帯に遺構が存在する可能性は高い。

② 出土遺物について

出土遺物は多く中型コンテナで400箱以上出土した。時間の制約から十分な整理が出来ていないが、種類ごとにまとめ成果を述べる。陶磁器は福岡藩の大身屋敷跡らしく、日本各地産の陶磁器（表4）がある。肥前や福岡など九州地方産のもの、備前や萩など中国地方のもの、京焼や信楽焼など関西地方、東海地方の織部・志野、瀬戸の茶陶、中国明王朝末期から清王朝の陶磁器、江戸後期から明治初め頃の英國製皿、舟子^(注24)などがある。美濃地方の茶陶器志野・織部焼の出土は、黒田家の重臣も茶をたしなんでいたのであろう。土師器・土師質土器などの日常雑器類：土師器皿は口径7~10cm程で、多くが灯明皿として使用されている。土師質土器の焜炉や七輪は多くあり煮炊具として使用されている。瓦質土器は火鉢が多い。瓦類は多量に出土。上級家臣の屋敷や郡役所の屋根に葺かれて

表4 第1次調査出土陶磁器生産地別割合

	肥前	肥前系	福岡	南九州	萩	備前	関西系	京焼	信楽	瀬戸・ 美濃	中国	外国	不明	計
個数	253	30	95	3	1	2	22	4	1	19	31	5	2	468
割合(%)	54.1	6.4	20.3	0.6	0.2	0.4	4.7	0.9	0.2	4.1	6.6	1.1	0.4	100

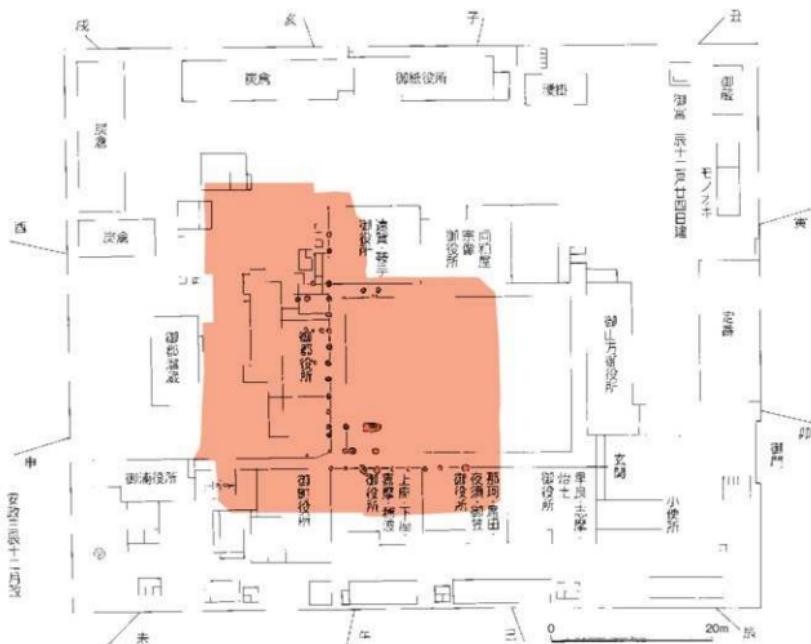
註1：肥前系は福岡含む場合あり。南九州は主に薩摩・熊本である。

いたものである。鬼瓦などもある。鴻臚館時代の古代瓦や遺物が僅かにあり、城下町整備にあたって、城内にあった鴻臚館跡を壊して持ってきた土で整地したことがわかる。また名島城に使われていた瓦もあり、名島城から家臣も瓦を持ってきて使用したことが分かる。軒丸瓦当文は巴文で、黒田家の藤巴などの家紋瓦はない。家臣との間に明瞭な区別があったのであろう。瓦に残っている刻印は福岡城内出土のものと同じである^(註20)。また岩国城と同じ雲状文の刻印^(註25)があり、岩国城と同じ瓦工人が瓦を生産した可能性がある。**焼塙壺**は泉州堺（現在の大坂市）で作られたものが破片も含め20点以上出土。焼塙壺は福岡城内御鷹屋敷^(註26)などでも出土している。御鷹（高）屋敷では、「御塙壺師塙伊織」と「天下一」刻印の二種類があるが、ここでは「泉塙伊織」の刻印を持つものがある。

土製品 土人形、飯事道具、箱庭セット（池灯籠）、土鉢などがある。京都産や大坂産、地元産の土人形がある。地元のものは上方の土人形を模倣して作ったものである。**石製品** は郡役所跡らしく礎石が多く出土。他に砥石、茶臼などもある。刀などの手入れ用の小型の砥石が多い。

金属製品 鉄製品は多量に出土している。大半は未整理であるが、釘など建築用金具が多い。また刀子なども若干ある。**銅製品** は煙管が多い。江戸時代各時期のものがあり、喫煙が江戸初めから一般化していたことが分かる。錢貨は65枚出土。鉄銭が4枚、雁首銭1枚がある。江戸時代の寛永通宝50枚、慶長通宝1枚、中国唐銭1枚、北宋銭7枚、明銭1枚、不明5枚がある。

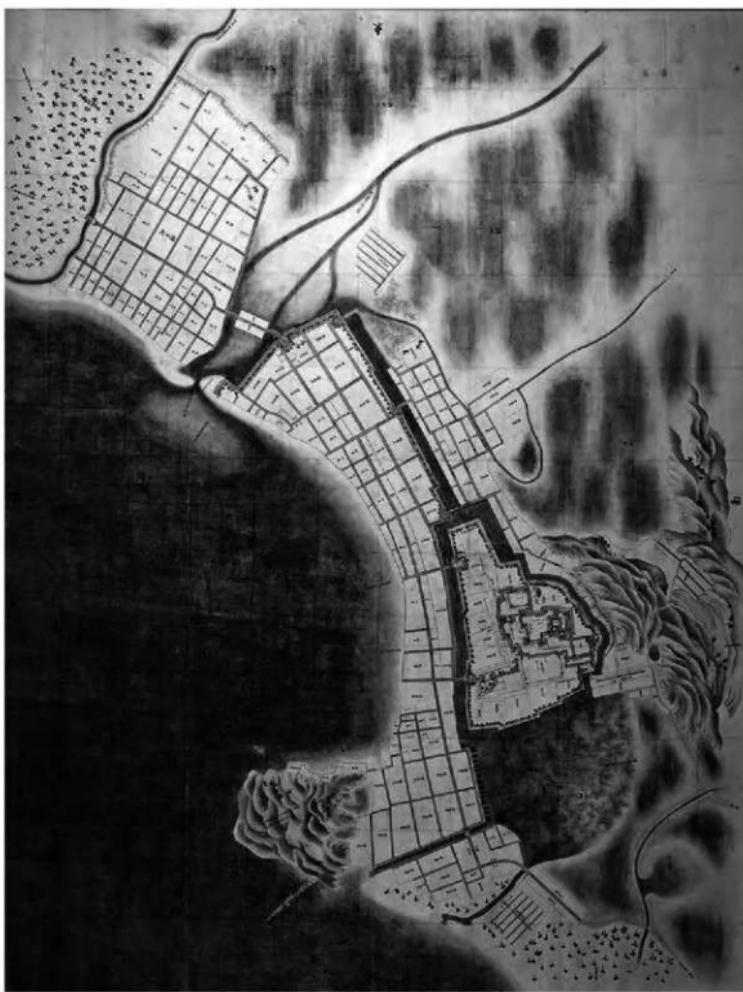
③ 遺物から見た火災の痕跡について



第62図 第1面郡役所建物礎石配置図(1/600)

※註19周囲図を筆者トレス作成

当地での火災は郡役所移転の契機となった文化年間の火災と福岡大空襲の最低2度の火災があった。江戸時代の火災については、瓦などを見ると赤く焼けたものや、鉄製品が溶着したもの、磁器の釉が熱変化で発泡し色が変化したものがいる。第1面の炭化物焼土を含む整地面の存在から火災があったことは確かである。



第63図 正保福岡惣図(福岡市博物館蔵)

2. いわゆる「福岡藩郡役所跡」の土地利用の変遷について

福岡市博物館 学芸課 宮野弘樹

はじめに

本稿では、今回の発掘地点である、いわゆる「福岡藩郡役所跡」が、築城後から現代にいたるまでのどのような変遷をたどってきたのかを古地図等を用いて整理する。当遺跡の立地と歴史的環境については本報告書2～4頁で述べられているので、ここではいわゆる「福岡藩郡役所跡」(以下＝当該地)の区画に絞ってその土地利用の移り変わりを紹介していきたい。

1、近世初期 三奈木黒田家～久野家の屋敷の時代

「福岡藩御古秘笈 六」(福岡県立図書館蔵、福岡県史編纂資料403)に収録された、「長政公福岡御取立之節諸士屋敷段々入替如左」で始まる近世初期の屋敷割の記録は、城内の重臣の屋敷割を皮切りとして城下の約100区画の屋敷割を記す。当該地は「城内」10区画に続く「御堀端下ノ御橋より東」の10番目に登場する。そこには「黒田美作屋敷」とあり、黒田家の草創期を支えた「黒田二十四騎」の一人に数えられる黒田一成(1571～1656)の屋敷地であったことが分かる。一成の子孫らは筑前国下座郡三奈木村(現福岡県朝倉市)周辺に家中随一となる1万6000石余りの知行地を与えられ、「三奈木黒田家」と称され代々筆頭家老を務めたが、この時点での屋敷地の序列は決して高いものではなかった。それは、近世初期の段階では、栗山利安(1550～1631)、井上之房(1554～1634)、母里友信(1556～1615)、後藤基次(1560～1615)といった重臣が存命で、彼らに城内の屋敷が与えられていたためである。

その後、二代藩主黒田忠之(1602～1654)の時代になると初期の重臣らは出奔や改易により黒田家を離れ、当該地に屋敷を拝領していた三奈木黒田家は城内へ移転する。寛文元～9(1661～1669)年頃の景観を描いたと考えられる【図3】「元禄年中福岡絵図」(福岡市博物館蔵、平成17年度購入資料)では、この場所には「久野四兵衛」という名前が見える。この時期に久野家で四兵衛を名乗ったのは、黒田二十四騎の一人に数えられる久野重勝(1545～1592)の孫にあたる一重(1613～1668、4500石)である(「久野家系図」福岡市博物館蔵、久野英子資料)。一重の実兄の一任(1608～1674)は黒田一成の外孫であり、養子となって三奈木黒田家の二代当主となっているので、あるいはそうした血縁関係によって当該地の屋敷を拝領しているのかも知れない。久野家は宝永7(1710)年頃成立とされる「宝水中第簿」(「福岡藩分限帳集成」海鳥社、1999年、83頁)では城内に屋敷を拝領しており、当該地を離れている。

2、近世中期 斎藤家の屋敷の時代

享保10(1725)年11月18日、荒戸四番丁を火元とした火災により武家屋敷181軒、商家542軒余りが焼失する。この時の被害状況の中で「大名町北側西」から2番目に斎藤甚右衛門の屋敷が出てくる(『近世福岡博多史料』第一集、西日本文化協会、1981年、243頁)。延享2(1745)年頃の情報を含むとされる【図6】「福岡御城下之絵図」(福岡県立図書館蔵、福岡県史編纂資料654)に「斎藤権右衛門」の貼紙が見えることから久野家が去った後に斎藤家が当該地に屋敷を拝領したことが分かる。斎藤権右衛門は名を定親といい、祖父の甚右衛門性庵は黒田長政夫人大涼院(1585～1635)の縁者、父甚右衛門の知行2500石を相続後は名を甚右衛門と改めた(『新修福岡市史 資料編近世2』福岡市、2014年、

古地図からみた「郡役所跡」の変遷

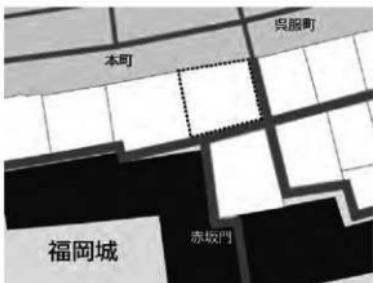


図1 「郡役所跡」付近の図

元禄12(1699)年の福岡御城下絵図(福岡県立図書館蔵)を元に作製した図。点線で囲った部分が今回発掘地点を含む区画。



図2 正保福博物図(福岡市博物館蔵)

正保3(1646)年、国絵図と共に製作された城下図。個別の屋敷の区画は無く「侍屋敷」とあるのみ。武家屋敷周囲の道幅は5間で、町人地は3間。



図3 元禄年中福岡絵図(福岡市博物館蔵)

荒戸の形、源光院の位置から寛文元~9(1661~1669)年頃の図。当該地には「久野四兵衛」とある。他と合わせるために図は東西方向に拡大した。



図4 福岡御城下絵図(福岡県立図書館蔵)

大濠に堤、博多に町奉行屋敷があることから1679~1685年頃の城下図と推定。居住者名は無し。表口43間、入37間ある。福岡県史編纂資料650。



図5 福岡御城下絵図(福岡県立図書館蔵)

元禄12(1699)年頃の作で、正徳3~6(1713~16)年迄の使用が確認される図。当該地の居住者名は判がれて無い。福岡県史編纂資料651。

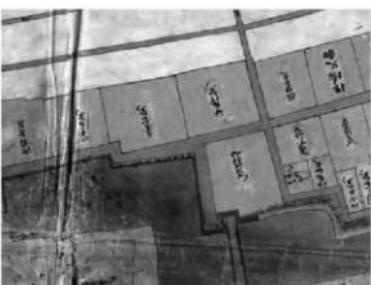


図6 福岡御城下之絵図(福岡県立図書館蔵)

当該地には「斎藤権右衛門」と貼紙がある。延享2(1745)年頃まで使用された図とされる。福岡県史編纂資料654。



図7 福岡御城下絵図（福岡県立図書館蔵）
当該地には「斎藤准之丞」と貼紙がある。天明4(1784)年頃まで使用された図とされる。福岡県史編纂資料653。



図8 福岡市中之図（福岡市博物館蔵）
当該地には「斎藤甚右衛門」、3軒西隣には東学問所（1784設立）がある。西学問所（1798焼失）が無く、荒戸の波戸が拡張以前なので1800年頃の図。



図9 福岡城下町・博多・近畿古図（九州大学蔵）
当該地には「斎藤藏人」の名と家紋・槍印・知行高の情報を記す。最も情報量の多い福岡城下図で1800年頃の景観を描く。三奈木黒田家文書423。



図10 福岡市全図（『福岡市誌 全』付図）
明治24(1891)年発行。当該地には「大名小学」(1894年移転)があり、西隣には東学問所に起源を持つ「中學修猷館」(1900年移転)が見える。



図11 福岡市及附近町村番地記入明細図
大正2(1913)年発行。明治43(1910)年開通の路面電車の線路が見える。この頃の当該地には武徳会演武場(1928年移転)があった。



図12 福岡市番地入実査図
昭和2(1927)年発行。中堀と赤坂門が健在だが、実際は大正14(1925)年頃までには埋め立てられているので、それ以前に調査した図と考えられる。

166頁)。その後の絵図を見ても、「斎藤甚之丞」【図7】、「斎藤甚右衛門」【図8】、「斎藤藏人」【図9】と斎藤家の名前が確認でき、19世紀に至るまで80年程は斎藤家の屋敷として利用されていた。

3、近世後期 郡役所の時代

転機が訪れるのは、文化14(1817)年のこと。荒廃する農村の復興のため農政改革が実施され、その一環で福岡城内にあった郡役所が斎藤藏人屋敷跡に移転されることになり、翌文政元(1818)年4月16日に役所開きが行われた(柴多1983)。【図13】は「文化十四年 裏判所控」の裏書きがある「郡奉行所図面」(九州歴史資料館蔵、福岡藩関係資料347)のトレース図で、郡役所移転時の様子が良く分かる。この時の改革により、5人の郡奉行による農村の直接支配が廃止され、郡奉行は領内全体に関わる問題を担当することになった。その代わりに10人の郡代が置かれ、2人1組で農村支配を新たに行うことになったという(柴多1983)。【図13】では郡奉行の詰所が中庭西側の一角に見られ、北側の5部屋が「郡代役所」となっており、この時の組織改革と対応している。敷地に対して役所の面積が小さいのは、将来の増築に備えてか、描かれていないだけなのかは未詳である。

その後、幕末になると郡役所内の建物が増加する。【図14】は「郡町浦他諸役所之図」(九州歴史資料館蔵、林(美)文書191)をトレースしたものだが、安政3(1856)年12月に改めたとあるこの図には、中庭を囲む各郡支配のための役所を中心に、町役所、浦役所、山方役所などの領内支配のための役所が集められている。ちなみに、【図15】を見ると良く分かるが、グレーの部分が移転当初の郡役所を示しており、中庭を囲む廊下の部分は【図14】とびったりと重なる。一方、周囲の役所は二部屋を繋げたり、半間から一間分奥行きを広げたり、増改築を加えている様子が分かる。当初は均等な面積であった郡代役所が、その後判明した業務量の多寡に合わせてなのか、郡ごとで広さを変えているのが興味深い。本報告書83頁には当該地の発掘範囲と礎石の位置が分かる図【第62図】があるので併せて参照されたい。



図13 郡奉行所図面 (九州歴史資料館蔵、福岡藩関係資料347より作成)

文字の向きは原図の通りとした。柱の位置が●で描かれていたが、図の大きさの都合上省略した。



図14 都町浦他諸役所之図（九州歴史資料館蔵、林（美）文書191より作成）
文字の向きは原図の通りとした。中央から放射状に広がる線と方位の記述があったが省略した。

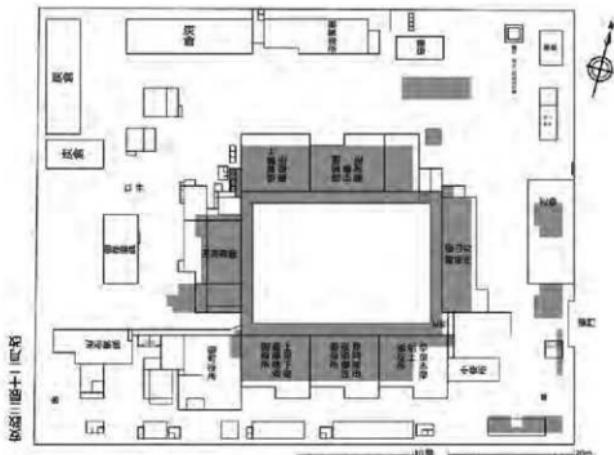


図15 都町浦他諸役所之図に郡奉行所圖面（グレー部分）を重ねた図。

4、近代 大名（大明）小学校の時代

「改正福博詳見全図」（山崎登、1880年）には明治6（1873）年に開校した「大名校」と同年に設置された「福岡電信局」が見える。電信局は10年後に発行された「福岡市明細図」（林斧介、1890年）では福岡橋口町の西中島橋西詰に移転しており、この場所は「大名小学」のみとなっている。学校敷地については87頁の【図10】「福岡市全図」にあるが、東側の通りまでは含んでおらず、通りに面した周囲の敷地は細分化されていたようだ。大名小学校は明治27（1894）年に現在の大名2丁目6番11号に移転しており、その後しばらくは市販の地図からは土地利用の状況は読み取れない。

5、近代 武徳会演武場の時代

次に地図に登場するのは「福岡市街圖里程附」（福岡県福岡警察署、1909年）からで、「武徳会演武場」の表記が見える。演武場は明治38（1905）年3月の完成。その後、老朽化により昭和3（1928）年9月に東公園内に「武徳殿」が新築され移転した。87頁に示した【図11】「福岡市及附近町村番地記入明細図」（入江傳、1913年）と【図12】「福岡市番地入実査図」（春吉土地建物、1927年）からは、この間の当該地の区画を読み取ることが出来る。大名小学校時代は南側に細い入口があり、北側の区画内部で敷地が広がっていたが、この時期は南側の通りに50mほどの区画を持つ敷地になっている。その反面、南から北へ向かって敷地は細くなっている、区画の変更があったことが推測される。

6、昭和から現代

演武場移転後の当該地の状況はよく分からぬ。「福岡市縦横詳細地図」（銀洋社、1938年）では、この場所は空き地になっている。演武場東側の敷地は店舗が連なり、南側の通りから、「林倉八賀店」「しづか食堂」、「中島釣店」「平川アパート」といった店舗等が並ぶ。なお、同時期に発行されたと推定される「福岡市住宅案内図」（発行者未詳、福岡市博物館蔵、原田嘉平資料）でも演武場があった付近は空白となっていて、東側の通りに面して「森」「中川」「小金丸」「中間」「俊藤」「平川」といった姓が見える。

昭和20年6月19日、福岡市はアメリカ軍の空襲を受けるが、空襲直後にアメリカ軍が撮影した福岡市の航空写真（福岡市博物館蔵、重松一資料）を見ると、当該地の西側の本町付近を除いて被災しているように見える。ただ、国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」(<http://maps.gsi.go.jp/>) の昭和23（1948）年11月1日の航空写真では、当該地の区画に建物が確認でき、詳細な被害の程度は未詳である。その後、「福岡地典」（積文館書店、1961年）では、当該地北側を東西に貫く街路が出来ており、かつての「郡役所跡」の区画は分断される。所有者は当該地の西側大半を「大林組支店」が占め、東側の区画には南から「大丸会」「丸林」「ホンダ軽車両」「赤坂カメラ真砂」といった店舗等が確認できる。

おわりに

以上、非常に簡単ではあるが、いわゆる「福岡藩郡役所跡」の土地利用の変遷をたどった。当該地は福岡城下の中でも比較的土地利用の変遷が分かりやすい場所ではあるが、それでも近世前期については不明な部分が多い。今後も統いていくであろう福岡城下町遺跡の発掘のためにも、屋敷割の変遷や火災といった城下町の基礎的な情報の収集を急ぐ必要があるだろう。

【主要参考文献】

- ◆柴多一雄「幕藩制中・後期農村支配機構に関する一考察」（『福岡県史 近世研究編 福岡藩（一）』西日本文化協会、1983年）
- ◆福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』（海鳥社、1999年）
- ◆宮崎克則・福岡アーカイブズ研究会編『古地図の中の福岡・博多』（海鳥社、2005年）
- ◆西田博「近世福岡・博多の歴史地理資料」（『市史研究ふくおか』第3号、2008年）
- ◆福岡市博物館『平成19年度収集 収藏品目録25』（2010年）



(1) 調査区から南側市街地を見る(北から)



(2) 第2面崩壊全景(上から)※合成写真

図版2



(1) I区第1面全景(北から)



(2) I区第1面西側遺構(北東から)



(1) II区第1面全景(南から)



(2) SX132~134検出状況(東から)

図版 4



(1) III区第1面全景(北から)



(2) III区第1面全景(西から)



(1) I 区礎石建物検出状況(北から)



(2) SD125検出状況(北から)



(3) SK043(南から)



(4) SK043南壁土層(北から)

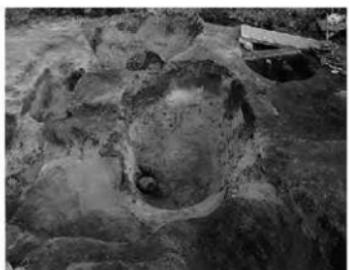
図版 6



(1) III区第1面礎石検出状況(西から)



(2) SK064(北から)



(3) SK067(南から)



(4) SK067遺物出土状況



(5) SK074(北から)



(6) SK083(北から)



(7) SK102(東から)



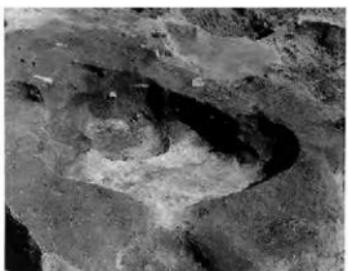
(8) SK104(南から)



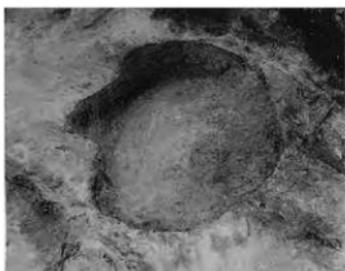
(1) SK110(北西から)



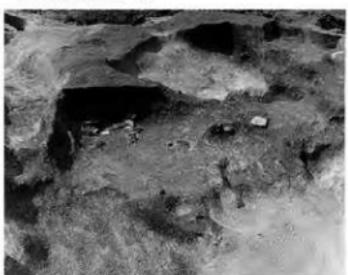
(2) SK115瓦出土状況(南から)



(3) SK159(南から)



(4) SK162(東から)



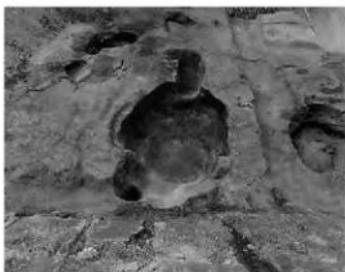
(5) SK220(東から)



(6) SK251(北から)

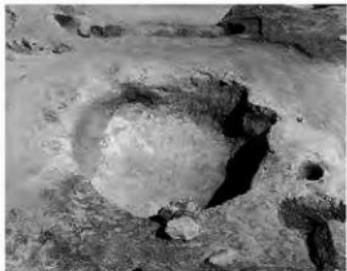


(7) SK262(西から)



(8) SK273・296(南から)

図版 8



(1) SK278(南から)



(2) SK278遺物出土状況(東から)



(3) SK288(南東から)



(4) SK317(南から)



(5) I 区第 2 面全景(北上から)



(1) II区第2面全景(南上から)



(2) 同 第2面・3面全景(南から)

図版10



(1) II区第2面南側(南から)



(2) III区第2面全景(上から)



(1) III区第2面全景(北から)



(2) 同 第2面南側全景(西から)



(1) III区第2面北側礎石検出状況(北から)



(2) 第3面SD1275(東から)



(3) SD1275南壁土層(北西から)



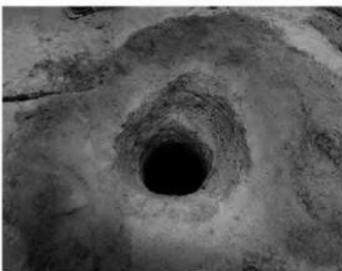
(4) SE1071(南から)



(5) SE1071井筒(北から)



(1) SE1273上面遺物出土状況(北から)



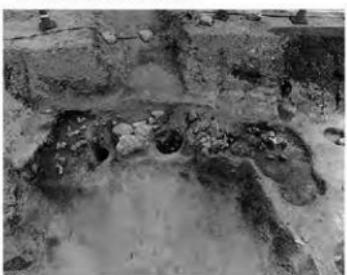
(2) SE1273井筒(西から)



(3) SE1273井筒底の状況



(4) 1118石積みの状況(西から)



(5) SX1193躰群(南から)



(6) SK1001(東から)

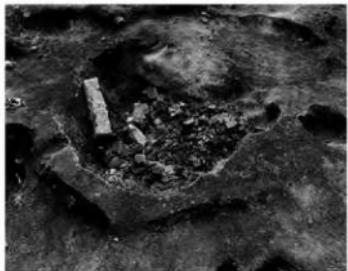


(7) SK1008(西から)



(8) SK1008・1048(北から)

図版14



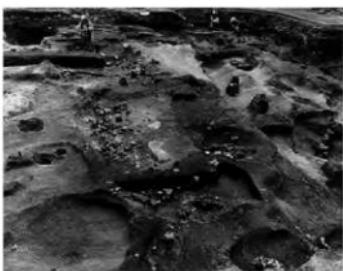
(1) SK1014瓦廃棄状況(西から)



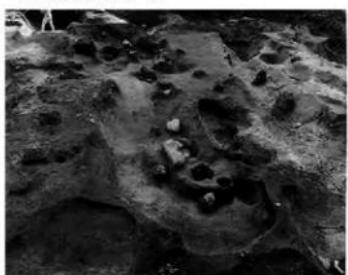
(2) SK1014完掘状況(北から)



(3) SK1018(西から)



(4) SK1019(北から)



(5) SK1019完掘(北から)



(6) SK1020完掘(北から)



(7) SK1056(東から)



(8) SK1074(南から)



(1) SX1123(北西から)



(2) SK1172(西から)



(3) SK1182縄群(北東から)



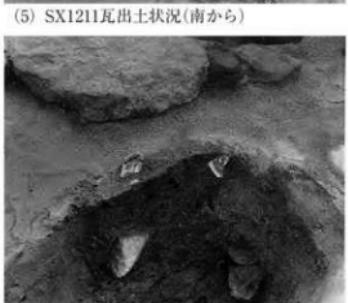
(4) SK1195・1196(北から)



(5) SX1211瓦出土状況(南から)



(6) SK1218縄群(東から)



(7) SK1240遺物出土状況(北東から)



(8) II区調査区北壁(南から)

図版16



各遺構出土陶磁器・瓦・土製品(縮尺不統一)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふくおかじょうかまちいせき						
書名	福岡城下町遺跡1						
副書名	福岡城町遺跡第1次調査の報告						
卷次	1						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1322						
編著者名	山崎龍雄、宮野弘樹						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621福岡市中央区天神1丁目8-1						
発行年月日	西暦2017年3月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ふくおかじょうかまちいせき 福岡城下町遺跡 第1次調査	ふくおかじょうかまちいせき 福岡市中央区赤坂 1丁目174番1他	40133	2888 33度 35分 22秒	130度 23分 24秒	20141215 20150430	1261.00	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
ふくおかじょうかまちいせき 福岡城下町遺跡 第1次調査	屋敷・役所	江戸	溝・建物・土坑・倉庫・井戸・建物基礎・ピット	中世:中国産陶磁器 /江戸時代:輸入陶磁器・国産陶磁器・土師器・土師質土器・瓦質土器・瓦類・石製品・鉄製品・銅製品・錢貨・動物遺体	美濃の織部焼などの茶陶器類が多量に出土		
要約	博多湾岸の海岸砂丘上に立地。2面の調査。上面の第1面は江戸後期文化14年に造られた郡役所の建物礎石と土坑など。役所はそれまであった重臣の斎藤家の屋敷が焼けた後に城内から移ってきたもの。第2面は福岡城下町造成時から郡役所が移る前までの屋敷地の時代。建物礎石や井戸、地下倉庫、庭と思われる大型土坑や廐棄土坑などがあり、江戸時代初め頃の織部焼や志野焼の茶陶が出土した。城下以前の遺構としては鎌倉時代後期以降と思われる東西方向の大溝がある。						

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1322集

福岡城下町遺跡1

-福岡城下町遺跡第1次調査の報告-

2017年(平成29年)3月27日

発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1丁目8-1
 印刷 株式会社博多印刷
 〒812-0028 福岡市博多区須崎町8-5